

# 346のプロデューサー達の女難な日常

黒いファラオ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『アイドルは恋愛禁止』

そんなこと誰が決めた！そんなもん知るか！と言わんばかりにアイドルがプロデューサーたちを襲います。そう、襲います。性的に。既成事実的に。まあ、流石に18禁的な意味ではなく。何故ならプロデューサーが好きだから。愛しているから。愛故に。

どうやらアイドルたちはライブをする度に会場に自重という言葉置きつけていたみたいで。

そこに美城専務から齎された『恋愛推奨』。アイドルを留めていた最後のブレーキが外されてしまった。

頑張れプロデューサー！負けるなプロデューサー！プロデューサーの明日は明るいぞ！（色々な意味で）

この物語は3人のプロデューサーと、アイドルたちのちよつと……少し……かなりズレた日常をお届けします。

※武内Pの敬語が取れたり、妹がいたりします。こんなの武内Pじゃない！という方はブラウザバックしてもらって構いません。

受験終了！（結果が出たとは言っていない） 更新再開するよ！

# 目次

外伝

誕生日おめでどうなお話 『新田美波』	1
誕生日おめでどうなお話 『渋谷凜』上	6
2人の魔法使い チラ見せ	11
誕生日おめでどうなお話 『北条加蓮』	16
誕生日おめでどうなお話 『鷺沢文香』	22
オリキャラ設定※ネタバレ含む	32
番外編	34
バレンタイン	38
ホワイトデー	47
『シンデレラの舞踏会』後のストーリー	
これが日常	51
ふみふみふみふみ	63
緑の事務員さん	72
リボンの少女の恋愛観：前編	78
リボンの少女の恋愛観：後編	83
何が始まるんです？	90
アイドルコミュ 『北条加蓮』	103
アイドルコミュ 『緒方智絵里』	113
アイドルコミュ 『向井拓海』	122
アイドルコミュ 『本田未央』	133
アイドルコミュ 『????』	142
アイドルコミュ 『鷺沢文香』 『橘ありす』	150
幕間『電話』『お知らせ』	158

7 6 5 × 3 4 6 合同イベント『Pont qui relie

ch・teau』編

始まり | 161

3 4 6 スレ① | 167

3 4 6 スレ② | 177

2 5 × 7 2 | 186

ガラスの靴のサイズ | 194

## 外伝

### 誕生日おめでどうなお話 『新田美波』

「それじゃあ改めて。誕生日おめでどう、美波」

「Поздравляю! ミナミ!」

「ありがとうございます!」

7月27日。この日は、美波の誕生日だ。それなのにこの場にいるのは俺とアーニヤ、そして張本人の美波の3人がだけが俺の家にいる。もちろんこの状況には理由がある。

「みんなで祝った後だって言っても良かったのか？俺とアーニヤだけで」

「いいんですよ。1番祝ってほしいのは遼哉さんとアーニヤにですから」

「私もミナミの день рождения、アー……誕生日、ですね。祝えて嬉しいです!」

「ありがとうアーニヤちゃん! 私もアーニヤに祝ってもらって嬉しいよ!」

お互いに笑顔で抱き合う2人。あらゝなんて素敵なシチュエーションではあるのだが……

「美波、せっかくの誕生日だし何か欲しいものあるか? 可能な限りで叶えてやるけど」

「じゃあ遼哉さんの童貞ください」

「Her! ミナミ、独り占めはダメです。アーニヤも混ぜてください!」

「可能な限りだつってんだろが。人の話聴けよ」

本性はこれだ。専務が恋愛推奨を発表した辺りからリミッターが外れたのか、アプローチがヤバイ。前にも言っただろうが、身体つきがご存知の通りだ。ヤバイ。

「可能じゃないですか! 遼哉さんが私に身体を差し出すだけですよ!?!」

「不可能です。だってそもそもが俺童貞じゃねえし」

「嘘っ!？」

「嘘をつくメリットが何処にあるんだよ」

ガチ童貞のいわゆる、「ど、どどどどど童貞ちゃうわ!」とかの言い訳ではないのだ。やることはやってる。

「アー……もしかしてフミカ、ですか?」

「文香ちゃん!? 遼哉さんいつの間に文香ちゃんに手出してたんですか!?! アイドルに手を出すんだったら私にしてくれればいいのに!」  
「ステイステイ、言ってることがおかしいよ。ん、あれ、美波は知らないんだっけ?」

「? 何がですか?」

とつくに知ってるものだと思ってたんだけど。という意味の視線をアーニヤに向ける。

「アーニヤはあの時 раз девалка……アー、楽屋にいました。でもミナミは、シンデレラプロジェクトのアイドルとしてステージに立っていましたね」

「あれから知る機会はいっぱいあっただろうに」

「ミナミは、働き者ですから」

「もー! アーニヤちゃんも遼哉さんも2人だけで話さないでよ!

私、なんの話かサツパリ分からないんだから!」

おっと、このままでは美波が拗ねてしまいそうだ。というか、若干既に拗ねかかっている。そろそろ美波に説明をした方がよさそうだ。

↳ 現在美波に説明中

「遼哉さんと文香ちゃんが昔付き合ってたなんて知りませんでした……」

「まあ、大学の時の話だしな。この話も冬のあの時以来、話すことも無かったしな。広まっていい話という訳でもないし」

「そうですね。ところで遼哉さん」

「ん? どうした?」

話し続けで疲れた喉に飲み物を流し込む。あれ、これさつきまで俺が飲んでたヤツと違うな。まあいいけど。それから美波の方を向く

と服のボタンを外しながらこっちに迫って来ていた。

「この際童貞は仕方ありません。なので普通に○クロスしましょう。大丈夫、○に何を入れるかによっては私たちがやっていることはスポーツになりますから！」

「そう言ってる時点で○にラが入ることをやる訳じゃないってのが明白なんですが!？」

「ミナミ、私も混ぜていいですか?」

「もちろん! 一緒にやれば怖くないよ!」

「赤信号一緒に渡ればの理論じゃねえーか! てか身体……あつつう……」

「あれ、遼哉さんいつの間に飲んだんですか!？」

「何を?」

確かにさつき何か変なの飲んだけどさ。

「私達が痛みを抑えられるかなって思って用意した媚薬なんですけど……遼哉さん飲んじゃったんですね」

「媚薬って……初めからそのつもりで……痛み? お前らもしかしてとは思ってたけど……初めて……なんだよな」

「当たり前じゃないですか。誰彼構わない訳じゃありませんよ?」

「ЛЮБОВЬ、遼哉さんのことが好き、だからです」

「つたく……」

「確認するぞ、2人とも。本当に俺でいいのか? 初めてなんだし、俺より好きになる奴だって」

「いませんよ、遼哉さんより好きになる人なんて」

「Да! ミナミの言う通りです」

「分かった。俺のミスだとはいえ媚薬飲んじまって正直限界なんだ。なるべく頑張るが、痛くしちまったら悪い。」

抑えてはいるけど、やりたくて仕方がない。今いるのが、関係を持っていない美波とアーニヤだったから理性が働いているが、関係を持っている文香たちだったらプツツンしてる。

「いいんですよ。遼哉さんになら」

「もらって……くれますか?」

「まあ……誕生日だからな。俺だってお前らのことが嫌いな訳じゃないし……我慢の限界だ」

俺はどうとうこの日、2人に対する遠慮というものを取り去った。

俺のベッドで眠る美波の頭を撫でながら、起きていたら照れくさくて絶対に言えないだろうことを吐き出す。

「美波、俺はお前に本当に感謝してる。未央のあの一件だって、ずっと張り詰めてた俺を楽にしてくれたのはお前達の遠慮のない言葉だった」

あの時の俺は不安で押し潰されそうになっていた。自分の心を閉ざして誰にも漏らさず溜め込んでいた不満を美波とアーニヤが吐き出させた。

「合宿で俺と俊輔が見てやれなかった間、美波に負担かけた。それでもしつかりとメンバーの面倒を見てくれた。……そのせいで夏フェスでお前の不調に気づけなかったんだけどな」

「あの時、俺はあの場になかったから知らないだろうけど、お前が倒れたって別の所で聴いた時膝から崩れ落ちかけたんだぜ。なんで気づけなかったんだって」

「言ったじゃないですか。そんなに自分を責めなくてもって」

「……起きてたのか」

「さつきですけどね」

生まれたままの姿で起き上がる美波に薄手のブランケットを渡す。  
「暑くなってきたとはいえ、夜は冷えるからこれだけでも一応羽織つとけ。どうしても暑かったらいいけど」

「いえ、ありがとうございます」

「寝て落ち着いたか？」

「はい。まだ違和感が残ってますけど……」

「アーニヤはどうだ？」

「完全に眠っちゃってると思います。多分朝まで起きませんね」

「そうか。明日……もう今日みたいなもんか。お前もアーニヤも自主

レッスンだったよな」

「そうですね」

「休み取っつけ。どうせ歩くのにも違和感感じるんだ、まともに動けやしねーよ。俺んちで大人しく休んでろ」

「……分かりました」

文香も同じような感じだった。言っても、俺も慣れない動きをしたせいで筋肉痛。2人仲良く大学を休んだ。

「俺が悔しかったのはさ、お前の疲労に気づけなかったのが一つ」

「もう一つは？」

「そんな肝心な時に側にいられなかったことだ」

「え？」

「あの時ほどプロデューサー業が嫌になったことはないね」

プロデューサーの数に対して、仕事が多すぎる。

「不安な時は側に誰かいて欲しいものだろ」

「じゃあ今、側にいてください」

そう言つて、ギョツと美波に抱きつかれた。

「私、不安です。遼哉さんが私を抱いてくれたのも今までのも全部夢なんじゃないかって」

「夢じゃねえよ。それとも全部夢だったことにするか？」

「そんなの嫌です！」

「だろ？」

美波を抱きしめ返し、頭を撫でる。

「遼哉さん、私まだ不安なんです。……慰めてくれませんか？」

美波が耳元で甘えた声を出す。

「まったく、しょうがないな……」

美波は少し離れて、俺がすることを待っている。

「誕生日おめでとう……美波」

「……はい」

美波に真正面から口づけをし、俺はそのままベッドに押し倒した。

## 誕生日おめでどうなお話 『渋谷凜』 上

「ねえねえ、凜ちゃん！」

「なに？」

「10日って、凜ちゃんのお誕生日でしたよね！」

「そうだけど……」

何故今その話が出てきたのだろうか？　と思っていると、横から未央が

「その日にニュージエネの3人で何処か行こうって思ってるんだけど、しぶりん何か用事ある？」

ああ……なるほど。私の誕生日のお祝いか。

「無いよ。遼哉さんがその日は空けてくれたから。ね、プロデューサー？」

「あつたりまえよ。せつかくの誕生日に働かせるような野暮な商売やってねえ。まあ、誕生日お祝いイベントみたいなのはそのうちするかもだから頭入れといてくれよ」

「分かった」

「そのこの2人もなく」

「が、頑張ります！」

「未央ちゃんにお任せってね！」

返事にも性格とかが現れてるのって、面白いよね。

「それで、何処かで待ち合わせする？」

「そうですね……何処がいいでしょう」

「んじや、私達に何かと馴染み深い駅前とかは？」

「いいんじゃないか？　アクセスもいいし、遠出するならそのまま電車に乗ればいい。色々便利だな」

「それじゃあ駅前に決定！」

（駅前……か）

あそこはプロデューサー……俊輔さんと初めて出会った場所。あそこであの人に出会ってなかったら、アイドルにならなくなってなくて。何も見つけられないままつまらない人生を送ってた。

何よりも……恋を知らないままだった。

「じゃあ、9時に駅前ね！」

「うん」

「わかりました！」

「あつ、私これから奈緒と加蓮とTPの仕事だから行ってくるね」

「いつてらっしやくい」

「凜ちゃん、頑張ってくださいね！」

「お疲れ様」

「楽しみですネ〜」

「ああ……楽しみだな」

ニヤリと悪い顔をする遼哉。

「凜を騙すのは悪いとは思うけど、あいつにとっても悪いことじゃないから許してくれよ」

「それにしても面白いこと思いついたね」

「思いつきだけだな。サプライズってのは大事だろ？」

「そういうの素敵です！」

「それで、そっちは大丈夫なの？」

「もちろんだ、任せとけよ。でもいいのか卯月？ こっちから提案しておいてなんなんだが」

「いいんです、私はお姉さんですし。それに、そういうのは無しにしてお誕生日は純粹にお祝いしたいですから！」

「卯月たち……まだかな？」

時刻は9時5分。遅れる時は何時も遅れると連絡してくる2人が、今日に限って何も連絡がない。

(サプライズとか……なのかな)

聡い凜は、うつすらとサプライズの存在に気づいた。凜の想像通り、確かにサプライズは存在する。

(何処かに隠れてて驚かすとか?)

しかし、想像しているモノとは全く違う。確かに驚くことではあるが。

「……渋谷さん?」

「え?」

名前を呼ばれ、その相手に驚愕する。凜がその声の持ち主を間違えるはずがない。幾度となく聴き、耳に焼き付いて離れないその声の持ち主は

「プロデューサー? なんぞ?」

そう、渋谷凜のプロデューサー。武内駿輔その人だ。普段見慣れているスーツ姿ではなく、完全に私服。デニムパンツに半袖の上着、下に着ているTシャツの首元からは鎖骨が覗いている。

(駿輔さんの私服ってこんななんだ……。何、あの鎖骨エッチすぎるでしょ。見せてるの、見せつけてるの? そんなの目を惹いちゃうに決まってるじゃん! 永遠に見つめ続けるけど!? てかむしやぶりつきたい)

どうやら驚きと夏の暑さの相乗効果によって頭がおかしくなってしまったようだ。実際に声に出していたら1発で銀の腕輪が装備出来そうなレベルでヤバいことを頭の中で考えている。

「浅葱……遼哉に頼まれました……。『たまには買い物ぐらい付き合えよ』と。それでこの駅前に9時に集合と。渋谷さんこそ何故ここに?」

「目的は決めてなかったんだけど、私は卯月と未央と全く同じ待ち合わせを……ん?」

「ん?」

……ここまで来て2人は気づく。あまりにも話が出来すぎている。

「電話してもいい?」

「はい。私も訊きたいことは同じでしょうから」

プルルルル……と、通話をかければワンコールで。

『はいはい！ 未央ちゃんだよ！ どうしたのしぶりん？』

『どうしたのしぶりん？』じゃないよ！ 謀ったでしょ！』

『私はやめなよって言ったんだけどお……遼哉さんが無理矢理に……』

ヨヨヨ……』

『おい本田ア!! お前誰よりも乗り気だっただろうが!』

「未央……」

『それに凛、別にお前にとって悪い話じゃないだろ?』

「遼哉さん、どういうこと?」

『これは俺達からの合同誕生日プレゼントだよ。まあ、個人的なものには別に用意してるんだけどな。駿輔との1日デート権。俺達はもうこれ以上は干渉しない。完全にプライベートなデートだ。だからこそ駿輔には私服で来るように仕向けた』

そこに駿輔が口を挟んだ。

「すみません、渋谷さん。遼哉と話をさせてもらえませんか?」

「いいけど……遼哉さん、プロデューサーが変わって欲しいってさ」

『聴こえてた。変わってくれ』

電話を変わった駿輔は、アイドル達に接している時のような敬語ではなく友としての口調で遼哉に告げる。

「遼哉、手短に頼む」

『分かってるよ』

「お前がこんなことするなんて珍しいじゃないか」

『まあな、悪いとは思ってるよ』

「驚きはしたけど、怒っちゃいけないさ。それで?」

『難しいことは言わない。純粹に凛とデートしてやって欲しいんだ。凛からはこんなこと言わないだろうし、誕生日なんだしたまには何かしてやろうと思って』

「想像以上でビックリだ」

『お前は俺をなんだと思ってるんだよ』

電話の向こう側で苦い顔をしているのが分かる声に、思わず駿輔は笑ってしまった

「悪い悪い。分かった」

『頼むぞ』

「任せとけ」

『ちやんとお前からプレゼント送れよ?』

「分かってるよ」

『困ったら連絡してくればいいから』

「りよーかい」

通話を切った駿輔に凜が話しかけた。

「終わったの?」

「はい。渋谷さん」

「? 何?」

そして、駿輔の次の言葉で凜は身体も思考も固まった。

「渋谷さん、デートを……しませんか?」

「へっ!?!」

## 2人の魔法使い チラ見せ

「ねえねえ、浅葱さん」

「ん？ どうしたみりあ」

控室でスマホを弄りながら暇を潰していると、赤城みりあが声を掛けてきた。何か不具合でも合ったのだろうか。

みりあの方に顔を向けてみれば、何やら目をキラキラとさせている。

「新しい人達って、何時になったら来るの!?!」

「あつ、あたしもそれ知りたーい!」

みりあと仲が良く、いつもつるんでいる城ヶ崎莉嘉もノってくる。

「えーつと、確か20分前くらいに武内が今から連れていくつて連絡が来たからそろそろだと……」

「申し訳ありません、遅れました」

「……ほらな?」

入ってきたのは4人。それぞれ違う制服を着た3人と、パツと見そっちの筋の人間かと疑ってしまうような固い表情をしたスーツ姿の男性だ。

「遅かったな、武内」

「すみません。色々……滞ってしまつて」

「いや、問題ない。それで、後ろの3人がそうなんだな?」

「はい。彼女達が最後のシンデレラ候補です」

目を向けられた3人がピクリと反応する。

「皆さん、自己紹介を」

黒く長い綺麗な髪の少女は冷静に。

「渋谷凜です。よろしく」

短い髪の活発そうな少女は情熱を感じる挨拶を

「本田未央! 高校一年、未央って呼んでね!」

茶色の長い髪の少女は可愛らしい笑顔で。

「島村卯月です! えつと、頑張ります!」

「この3人に皆さんを加えた、14名がシンデレラプロジェクトのメ

ンバーとなります」

「それじゃあプロデューサーさん、これで？」

独特のエロ……色気を持った現役女子大生、新田美波が訊いてくる。

「ああ、そういうことだよ。なあ、武内？」

「はい。これで全員揃いました。シンデレラプロジェクト始動です」

そこにいた少女達は「やったー！」と手を取り合い、喜び合った。まあ、初期メンバーには本当に長々と待たせちゃったからな。

「なになに、何の騒ぎ〜？」

一通りメンバーの自己紹介が終わった頃に、やけに露出多めな衣装を着たピンク髪の少女が顔を覗かせた。その彼女を見て本田が驚きの声を上げる。

「カリスマJKモデルの城ヶ崎美嘉!？」

「チャオ〜♪」

「お姉ちゃ〜ん!」

城ヶ崎が、城ヶ崎の元へ駆けていく。

「おっと……。莉嘉〜？ ちゃんとやってる？」

「もつちろん！ 大丈夫だよ!」

城ヶ崎莉嘉……ああ、そういえば城ヶ崎は城ヶ崎の

「莉嘉ちゃんって、城ヶ崎美嘉の妹なの!？」

「そうでーす!」

ピースの仕方は姉の真似か。うん、やっぱり目元とか雰囲気は確かに似ているな。など、うむうむと一人で納得していると、城ヶ崎(姉)の目がキラリン♪と光った……：ような気がした。

「おっ、遼哉さんじゃん！ 久しぶり〜!」

自分に抱きついていた城ヶ崎(妹)をわざわざ離してからこちらに

駆けてきて抱きついてきた。そういう所もそっくりなのかよ！

「だあ〜！ その衣装で抱きつく城ヶ崎！ お前は妹とは違ってもう身体が出来上がってんだから！ 色々当たってるっつもの！」

「当てるんじゃない♪ てか城ヶ崎は姉妹で2人いるんだから、いつもみたいに『美嘉』って呼べばいいじゃん。仕事の時の名字呼びは相変わらずなんだね」

「メリハリが大事だって言っただろ。ただ、紛らわしいってのはその通りだな」

「でしょ？ だ〜か〜らあ〜？」

「……ったく、分かったよ美嘉。これでいいだろ？」

「うんうん！」

こうやって話しているとあの頃を思い出す。お互いにちつとも変わっちゃいなかった。

「Pくんがお姉ちゃんと話してる時の顔、私たちと全然違う！」

「莉嘉それはね？ アタシと遼哉さんはただのアイドルとプロデューサーの関係じゃないからね〜」

「そ、それって……」

「お姉ちゃんつてば、だいた〜ん！」

「ダアホ」

「あいたつ」

調子にノッている美嘉の頭に軽くチョップを入れてお灸を据える

「妹と後輩が可愛いからって、あんまり調子に乗るな」

「ええ〜」

「そんなの後輩のためになりたいのならば仕方がない。新人がやりがちな失敗を誰かさんの体験談を借りて俺がこいつらに懇切丁寧にジックリと語ってやろう」

俺が、「あれはとあるカリスマJKモデルがアイドルとしてデビューしたての頃……」と始めると、美嘉が「うわーっ、うわーっ！」と俺の口を塞いだ。

「そ、それだけはやめて！」

「ったく……」

『美嘉さーん！ そろそろ撮影はいりまーす！』

「あつ、はーい！ じゃあ、私行ってくるから」

不満ですつ！といった美嘉の目がさつきまでのものとは違う、仕事をこなすプロのモノになっている。

「後輩のためだ。きちんとお手本になってこい」

「うん、任せてプロデューサー」

「今は担当じゃねえよ」

「あはは、そうだったね。いつも通り送り出してくれたからさ。行ってくる」

「おう」

スタジオに向かう美嘉の背中を見送ってから、後ろで俺達のやり取りをボーツと見ていたプロジエクトメンバーたちに伝える。

「さて、聴いてたな？ 今から本物のアイドル『城ヶ崎美嘉』のアー写が始まる。しっかりと見せてもらえ。んで、お前達が目指す”アイドル”っていうのがどういうモノかを肌で実感してこい。分かったな？」

『はいっ！』

ぞろぞろと控え室から出ていく13人。寝ていた双葉は仲のいい諸星によって連行されていった。

全員が出ていった後で、武内が横に並んだ。

「ありがとうございます」

「いいよ。本当はもっとキツイのを言おうとも思ってたんだがな」

「どう言おうと？」

『『お前らはまだスタートラインにすら立っていないのを自覚しろ』とかだな。まあ、思い止まったけどな』

「いきなりやる気を削ぐというのは……」

「分かってるよ。だからやめたんだろ」

「浅葱さん、浅葱さんはあの3人を直接ご覧になって……どう、思われましたか？」

「そうだな……。やっぱり武内の目は確かだな。どれも逸材だ。レックスンとか実際の所をまだ見てないからはつきりとは言えないが、光る

ものがある。それこそ、楓や美穂達に並ぶくらいにはな」

「そうですか……安心しました」

「なんだ、まさか自信がなかったのか」

「ええ。私は一度失敗していますから……」

武内の顔が翳りを帯びた。イラツと来たのでその頭をドつく。

「浅葱さん？」

「お前の気持ちは分かっている。痛いぐらいにな。だが、それをあいつらに重ねるな。あいつはあいつ。あの3人はあの3人の物語があるさ」

「そう、ですね……。ありがとうございます」

「ただ……」

## 誕生日おめでどうなお話 『北条加蓮』

「加蓮、起きてるか〜?」

「うん、起きてるから入っていいよ」

見慣れていてなおかつ、久しぶりに見る加蓮の部屋の扉を開けると、加蓮はパジャマ姿でベッドに座っていた。

「俺が来るの分かってたのか? あ〜、そうか。凜と奈緒が先に来てたんだっただか」

「うん。それもあるけど、こういう時にお兄ちゃんはいつもお見舞いに来てくれたからね。今回も来てくれるだろうな〜って」

バレてたか。と言いながら、ベッドの側に座る。

「それにしても……」

「誕生日にこうなるなんてね〜。私らしいけどさ」

時間を少し遡ろう。ご存知だとは思いますが、8月の終わりからウチのアイドル達の誕生日が畳み掛けるように連続する。

そこで、誕生日のお祝いの予定を纏めて決めることにしている。

「かれん〜、誕生日どうするんだ〜?」

「どうしようか〜?」

「私たちは加蓮の誕生日だから5日は空けてあるよ」

「どうせならしっかりと祝いたいからな。休みにしといた」

「さっすがお兄ちゃん!」

加蓮はソファで足をパタパタと動かし喜ぶ。

「喜ぶのはいいんだけど、どうするのってば」

「加蓮は何かしたいこととかないのかよ?」

「ん〜、ポテト食べたい」

「そりゃ何時もの事だろうよ。なんだ、誕生日プレゼントにポテト贈ればいいのか? 俺は一向に構わんぞ」

俺の言葉に不満気な目を向けてくる。

「酷くない?」

「だと思っんなら真面目に答えろっつの」

「ん、じゃあさ3人も私の買い物に付き合ってよ」

「別にアタシは構わないけど」

「私も大丈夫だよ。遼哉さんは？」

「俺も問題ない。で、何買うんだ？」

俺のその質問に、加蓮が待つてましたとばかりに目を輝かせた。

「前からみんなのことコーディネートしたいって思っってたんだあ……  
奈緒にはやってあげたことあったけど、凜とお兄ちゃんにはやったことないからさ」

「加蓮監修の遼哉さんの私服……面白そうだな」

「もちろん奈緒にもしてあげるからね？」

「アタシもかよ!? まあ、別にクライってわけじゃないからいいけどさ」

「私も、加蓮にコーディネートされたらどうなるか気になるしね。それでもいいよ」

バツと、3人6つの目が一齐に俺を捉えた。お前ら、そんな所まで息合わせなくていいから。だいぶビビった。

「心配しなくても大丈夫だっつて。逃げたりしねえよ」

「分かっつてはいたけど一応ね」

「んじや、連絡とかおいおいすることに。とりあえず今日は解散な」

「風邪引いたあ?!」

『うん……ごめんねえ。私もビツクリだよ』

『アタシたちはいいいけどさ、加蓮は大丈夫なのかよ?』

『熱が少し上がっちゃっただけだよ。今はもう下がってるし。でも、一応今日は大事をとって』

『そっか。とりあえず今から、お見舞いに行くね』

『いいよわざわざ』

「ダメだ。今日会って渡す予定だったプレゼントも持つてくからな」

！」

「それまではちゃんと寝てなよ？」

『分かったよ。もう、2人とも心配性なんだから……』

「加蓮が風邪引いた？ そりやまたなんとも加蓮らしいというかなんというか……」

「アタシたちは今から加蓮の家に見舞いに行ってくる。どうせ暇だしな」

「遼哉さんはどうする？」

「見ての通り、急な仕事が入っちまってな。これを終わらせないことには行きたくても行けない。後から行くなって伝えておいてくれ」

「了解。んじゃ、行ってくるわ」

「加蓮、寝てなくていいの？」

「お兄ちゃんまで……凜と奈緒にも散々言われたんだから勘弁してよお。心配してくれてるのは分かるけどさあ」

「諦めろ。とにかく顔も少し赤いし、少し寝ておいた方がいい。大方、

3人が揃って少し盛り上がりすぎたんだろ？」

「うんまあ、そうなんだけどさ」

「それでぶり返したんだろ。ほれ、寝てろ」

起こしていた身体をベッドに横たわらせ、布団を掛けてやると加蓮の口からいつもの違う力の無い声が漏れた。

「側にいてくれる？」

「ああ。もちろん」

「そっか」

次に聴こえてきたのは、加蓮の寝息だった。

「おやすみ、加蓮」

加蓮の髪を撫でながら、起きないように小さな声で囁く。それから俺は鞆から書類を取り出し、加蓮を起こさないように書類に書かれている案件について考え始めた。

側にいると約束したから。

1

ある程度書類の案件について考えが纏まった所で、時間を確認した。加蓮眠って1時間って所か。

「それにしても……」

加蓮の本当に気持ちよさそうな寝顔を見るのは何時ぶりだろうか。入院していたあの頃の加蓮の寝顔は安らかながらも、何処か翳りを感じるものだった。

加蓮の寝顔がここまで綺麗になった理由は分かっている。

「今は身体も良くなって、友達も仲間もいる。あの頃とは大違いだな」

「お兄ちゃんのこと忘れないでよね」

「起きてたのか」

「うん、ついさっきだけど」

むくりと加蓮は身体を起こした。位置関係的に胸が見えてしまっただったので、胸元のボタンを締めてやる。不満そうに睨まれた。何故。

「電話の時はお見舞いに来るって言われて遠慮したけどさ、本当は嬉しかった。『あ、あの時とは違うんだ』って改めて実感した。お兄ちゃんだけしか来なかったあの頃とは」

「なんだよ、俺じゃ不満か」

「そうじゃないよ」

身体を乗り出してキスをしてくる。

「何時だってお兄ちゃんは私にとっての恩人だし、愛してる人だよ」

「……………」

照れ隠しに頭を掻く。

「そりやどうも」

「照れたいのは私だって……」

「恥ずかしいならやらなきゃ良かっただろうに」

「チャンスだと思ったんだもん。最近忙しそうだし、一緒にいられたかったから」

「まあな。悪いとは思ってるよ」

「まだ私のじゃないから仕方ないよ」

「まだか」

「いつかは私のモノにしたいよ、もちろん」

「まあ頑張ってくれ。敵は多いぞ」

「知ってるよ。お兄ちゃんなんかよりよっぽど」

「そりやそうか」

ゴソゴソと鞆から小さな箱を取り出す。

「はい、プレゼント」

「ありがとう。開けてもいい?」

「もちろん、どうぞ」

「……これってペンダント?」

「何にしようか迷ってたんだが、ペンダントは見たこと無かったからな」

「うん、じっくりくるのが見当たらなくて。でも、これいいね。ありがとうお兄ちゃん。付けてもらってもいい?」

「……仕方ない」

お互いに無言で、ペンダントを付ける。風邪を引いているから、熱っぽい吐息と寝ていた名残の汗ばんだうなじが色っぽくて、大人になったんだな改めて実感させる。

……加蓮も女なんだと、認識した。

俺の動揺が悟られないように落ち着いてペンダントをつけた。手は震えていた気がする。

「……ほら」

「……ありがとう」

バレていたかもしれない。

「似合ってる?」

「ああ、似合ってる。俺の見立ては間違ってたな」

「えへへ、そうだね」

何時もとは違う柔らかなほにやりとした微笑みにドキリとする。なんか変だ。

「私、これ大事にするよ」

「そっか。誕生日プレゼントで加蓮にこういうしつかりしたのを贈るのは初めてだな」

「うん、その思い出。私から頼んだ物じゃなくて、私のことを考えてお兄ちゃんがくれた物だから」

もう一度微笑むと疲れたのか流れるようにベッドに戻って眠った。

俺は加蓮の額にキスをしようと顔を近づけ……やめて、そつと唇にキスをした。寝ているのをいい事に。

「おやすみ……加蓮」

また起きて4人が揃ったら、改めてお前の誕生日を祝おう。だから、今はおやすみ。

俺は加蓮の寝顔を何気なく見続けていたのだが、

寝ている加蓮の寝顔を見続けていたら何かが我慢出来なくなるよ  
うな……そんな気がしてやめた。

着実に俺の中の加蓮という存在が『妹』からだんだんと『女性』に  
変わっているのに気づかない振りをしてながら、さつき終わらせた書類  
とは別の書類を取り出して自分の気持ちから目を逸らした。

## 誕生日おめでどうなお話 『鷺沢文香』

カタカタとキーボードを叩きながら横のスケジュールに目を遣る。それを見て、1度キーボードを叩く手を止めてから今日の予定を組み立てる。

「22時くらいかな……」

一つ呟いてスケジュールに22時と書き加えてからまたキーボードを叩く。今日中にこの案件は片付けておかなければ……

ドアを開けて入ってきたのはちひろだ。

「資料をお持ちしましたよ」

「ありがとうございます、そこに置いていてくれ」

「ここですね」

資料を置いてから、隣に立つ。

「進捗はどうですか？」

「うーん、今やってるコレは今日中に片付く。というか、片付ける。そこら辺を加味しても、765との合同イベントの時よりは順調だな。まあ、あの時は単にやるが多かったってだけだが」

「それは良かったです。今日は早めに帰られるんですか？」

「ああ、仕事が片付き次第帰りたとは思ってる。武内にもそう伝えておいてくれるか、千か……武内」

「……………」

「……………」

訪れる沈黙。そして同時に吹き出す。

「ややこしいからちひろでいいか？」

「大丈夫ですよ。実は私もまだ武内って呼ばれるのに慣れてなくて……。武内って呼ばれて、周りを見てから『あつ、私のことか』って苦笑いながらもちひろは嬉しそうに語る。

「念願叶ったんだから早く慣れるよ……。ウチは順応早かったぞ？」

「そっちの方が特殊なんですよ！ それで、彼女はもう大丈夫なんですか？」

「ああ、もう安定期に入ってる。ただ、家に1人でいるっていうのは少

し寂しいらしい。最近よく言われる」

「そうですか……」

「で、そっちは何時になつたら祝えばいいんだ？」

一瞬ポカンとしたが、次にはちひろの顔がボツと真っ赤に染まった。

「ちよっ、いくらなんでもセクハラになりますよ！ ハア、まだです。私も欲しいとは思いますが、お互い忙しくて」

「だろうなあ……。武内、駿輔の奴4期目のCPも軌道に乗ってきたのに加えて、NGのツアーライブの総責任者になつちまつたから多忙この上ないし」

「ですねえ……。専務も心配してました」

「専務がどつちかに代理を立てるか聞いたら断つたらしいな。『どちらも私がやるべき仕事ですから』ってよ」

「それ、私も聞きましたよ。律儀というかなんというか……」

「堅物だな」

「堅物ですね」

2人揃つてため息をつく。時計を確認してみれば、そろそろ現場に向かう準備をする頃合いだ。

「時間だわ、現場行つてくる」

「そうですね、頑張ってくださいね！」

「そっちも色々頑張れよ」

「……………まあ、はい」

なんとも形容し難い顔をしているちひろにアドバイスしておく。

「どうしてもってんなら、押し倒すのが一番手っ取り早いぞ」

「お、おしたおっ!？」

「ちなみに俺はあいつに押し倒されたのがきっかけだった」

「うそっ……見た目によらず大胆ですねえ」

「あいつは昔から強かだったよ。じゃあ、行つてくる」

「はい、行つてらっしゃい」

送り出してくれたちひろの左手の薬指には、指輪が輝いていた。

「遼哉さん」

「やあ、待たせたか橘」

「ありすでいいって言ってるじゃないですか。まだお仕事モードじゃないんですから」

「からかってるんだよ、ありす」

「知ってます。もう慣れましたから」

「成長したのは身長だけじゃないってか」

ポンポンと、髪が崩れないように頭を叩く。ありすもそれが分かっているから大人しくしている。

「私、もう15なんですけど……」

子供扱いには大変不満そうではあるが。

「子供扱いするなって言われても、自分と一回り違うとなあ……」

「そういえば一回りも違うんですね。確かにそれだけ離れていたら無理がありますね……。結局は中学3年ですし」

「考え方が大人になったな、ありすは」

「昔みたいに無駄に背伸びするのは辞めにしたんです。お手本になる人が自分の周りにはたくさんいるってことに気が付きましたから」

停めてある車に乗り、現場に向かう車中で話す。

クローネに招集されてからもう3年が経っている。ありすは見た目も心もしっかりと成長しているようだ。

ありすは気づいていないだろうが、彼女は既に大人の女性の雰囲気を持ち始めている。みりあや他のジュニアアイドルとは違った成長だ。桃華が同じだろうか。

美しい長く艶やかな黒髪に、子供らしさを残した端正な容姿。今もありすなら、文香と並べば本当に姉妹に見えるだろう。喜ぶだろうか  
ら本人には言わないけど。

「周子やフレデリカとかか？」

「あの2人も……確かにお手本になりますけど」

笑いながら聞いてみれば、苦い顔をしながらも肯定した。

「あいつらは元々大人だよ。だからあそこまで子供っぽく振る舞え

る」

「そうですね……悔しいですけど。頭も回りますし、肝心な所ではふざけたりしませんし。私を弄ることに全力を尽くしている感じが否めませんが」

「それは言えてる」

それから少し経ってから不意にありすが、「あつ」と声を漏らした。「どうした？」

「いえ、そういえば遼哉さんに訊きたいことがあって」

「言ってみ？」

「あの、今日はお邪魔できないかなと……」

「ああ、なんだそういうことか。俺達は構わんよ。逆に大丈夫なのか？ 受験も近いだろ」

そう訊けば、昔と変わらない可愛らしいドヤ顔を披露しながら

「大丈夫です。あそこに行く決めてからはコツコツと勉強してましたから。もう大丈夫だろうって、担任の先生からお墨付きを貰ってます」

「おお、やるじゃん。ウチの高校ってそれなりなのにな」

俺たちの出身校は楓や文香など、有名なアイドルや芸能人の卒業生が多いのに加えて、進学実績も高いために競争率が高い。つまりはボーダーが高い。

「ちゃんとプレゼントもありますから、楽しみにしててくださいね」

「それを言うのは俺じゃないだろ」

「ここにはいませんから。代わりです」

「そうかい。ありすが来るのは久しぶりだから喜ぶだろうよ」

「私も楽しみです」

今から楽しみで仕方がないといった様子のありす。嬉しい時の感情がそのまま現れてるのも昔から変わっていない所の一つだ。

「遼哉さんの家って、なんか優しい雰囲気が出て安心するんです。ほら、言うじゃないですか。『実家のような安心感』って。あんな感じですよ」

「ありすの言ってるそれはどう考えてもネット系列に聞こえるんだ

が。言いたいことは分かるけどさ」

駐車場に車を停める。車を降りてからメガネをかけることでプライベートなものから仕事のものに意識を切り換える。

「さて橘、この後の楽しみのためにもしっかりと決めてこい」

「勿論ですプロデューサーさん。私はまだ子供ですけど、それでもちゃんと成長しているってことをファンに見せてきます」

「その意気だ。じゃあ行こうか」

「はいー」

音楽番組の収録。ソロで堂々と歌い上げるありすを見て、ふと思っ  
た。

「子供の成長は嬉しくもあり、寂しくもあり……か」

って、ありすでそれを実感するのもどうなんだよ！ とつておけよ  
その感想は！ にしてもオツサン臭くないか今の台詞……いや、でも  
俺ももう28だしなあ……いやいやいや、まだ28だろ。……”まだ  
”だよな？

ありすの撮影も無事に終わり、会社に戻った。すると、アイドルに出  
会おう度にほぼ確実に『おめでとう』と声をかけられプレゼントを渡  
される。プレゼントは、まあ……仕方がないとしても、おめでとうは  
電話なりなんなりで直接本人に伝えれやれよ。嬉しいんだけどさ。

多くなってしまったプレゼントを、『念のために』と用意しておいた  
袋に入れる。何が入っているのかが分からないために万が一壊れた  
りしないようにしっかりと並べて入れておいた。なかなかの重量に  
なったその袋を持ってプロジェクトルームに向かう。

「おっも……何入ってんだよ……」

「大変そうだね」

後ろから声をかけられ、振り向いてみるとそこには

「今西部長、それに美城専務も。お疲れ様です」

「お疲れ様」

「ああ、お疲れ様。それは彼女へのプレゼントか？」

今西部長に美城専務、ウチのアイドル部門のトップ2がいた。

「ええ、優しい子達ばかりで。嬉しい悲鳴ってヤツですかね」

「みたいだね。それで、今日君はどうするんだい？」

「どうするって……ああ、申し訳ないですけど仕事が終わり次第帰ろうかと」

「どれくらいだ？」

「そうですね。確か……予定では22時くらいですね」

スケジュールを確認して答えれば、2人は顔を見合わせて呆れたように頷く。なんだなんだ、何の頷きだ。

「やれやれ、やっぱり予想通りだったね」

「そうですね……浅葱」

「はい」

「今日は20時で帰るといい」

「はい？」

流星に素の声が漏れてしまった。

「安定期に入っているとはいえ、初めてのことだ。不安がつているだろう？ それに」

専務は久々に見るいたずらっぽい顔で言った。

「誕生日には、何かしらのプレゼントが贈られるものだ」

「……ありがとうございます」

「気にすることはない。ではな」

「はい」

そう言うと、専務は去っていった。

「ホントに……。部長もありがとうございます」

「いいんだよ。君にも彼にも負担をかけっぱなしだからね。いくつもある借りの一つを返したに過ぎないよ」

「そんなこと言ったら俺だって部長に借りがありますよ。とりあえず今度また飲みに行きましょう。まあ、あいつのおめでたを聞いたらすけど」

「それはいいねえ。どっちの意味でも早めに聴けることを楽しみにしておくでしょうか」

「ですね」

専務が向かった方向に同じように歩いていく今西部長に頭を下げ  
てから、プレゼントを持ってプロジェクトルームに戻った。心なしか  
袋が軽く感じた。

「という訳で、早めに帰ることになった」

「え、というかいままで仕事するつもりだったんですか」

「おおう？」

後輩と同僚に20時に退社することを伝えたら、後輩から予想外の  
返答が。

「ですよ？ 武内さん」

「はい。私達はてつきり18時くらいには帰るものと……」

「おい、有給全然取る気ない奴が何言ってるんだ」

「だから俺達は浅葱先輩がいつ帰っても大丈夫なように仕事早めに終  
わらせてたんですけど」

「任せてください」

「おい、武内。自ら三重苦を負う気か。やらせんぞ」

お前、だんだんヤケになってないか？

「でも、ありがとう。纏、帰る時に終わってない案件があったら頼んで  
いいか？」

「任せてくださいー！」

「あんまり無駄な負担は今のお前にかけてくはないんだが……武内、  
サポートしてやってくれ」

「サポートぐらいなら今更負担にはなりませんよ。それに、長谷川く  
んなら大丈夫ですよ」

「お前のスカウトした逸材だもんな」

「ちよっ、恥ずかしいからやめてくださいよー！」

さて、残り時間で出来るところまで終わらせるとしうか。

「ありす！」

「え、あれ、遼哉さん？」

「良かった、まだ帰ってなかったか」

「はい、自主練習を。そういう遼哉さんは、お仕事どうしたんですか？」

「専務が早めに返してくれてな。乗れよ、ウチ来るんだろ？」

「はい、じゃあ失礼しますね」

仕事の現場に向かった時のものではなく、完全に自分のプライベートな車にありすを乗せて自宅に向かう。

なんか、中学生を乗せて自宅に向かうってなんか……

「犯罪臭がしないか？」

「既婚者が何言ってるんですか……。言いたいことは分かりますけど」

「だろ？」

そんなくだらない話をしながら車を走らせているうちに、あつという間に家に着いてしまった。話し相手がいるのもあるが、思ったよりも家族が恋しかったみたいだ。

「ん？」

「どうかしましたか？」

「いや、ドアが開いてんだよ」

扉を開けてみれば玄関には見慣れない靴が。

「まさか……」

「遼哉さん……？」

この独特の匂いと、微かにする物音……！ 不審がるありすを置き去りにして家に入り、バツトリピングの扉を開ける。そこには……

「なんでお前がいるんだよ楓……」

「あら、おかえりなさい遼哉」

「あれ、楓さん？」

「ありすちゃん、こんばんは」

「こんばんは……」

「ふふふ……」

「おつと……騒がしくしてごめんな」

「いえ、最近はこういうことはありませんでしたから……」

「ただいま、文香」

「おかえりなさい、あなた」

楓の隣には妻である文香が座っていた。大きく膨らんだお腹を撫でながら。

「で、楓はどうして家に？」

「サプライズです♪文香ちゃんも誕生日なのに1人でひとり家……にいるのは寂しいと思って」

「そのためにわざわざこの日にオフ取ったのかよ……」

「ふふふ……ビックリしました？」

「ああ、思惑通りにな」

台所を覗いてみれば、夕飯の準備がされている。

「飯まで作ったのか……悪いな」

「いいんですよ。私が好きでやってるんですから。ありすちゃんも一緒に食べましょう？」

「いいんですか?」

隣で文香のお腹に耳を当てていたありすが恐る恐る聴く。

「賑やかな方がいい。な、文香?」

「はい。ありすちゃんとも、久々にお話がしたいですし」

「じゃあ、お邪魔しますね」

楓と並びながら夕食の準備をする。俺が楓を選んではいたら、これが毎日のことになっていたかもしれない。ありすには文香の話し相手になってもらっている。

「ありがとう楓」

「急にどうしたの?」

「いや、俺が仕事の間に文香といってくれて」

「私が勝手にやったことよ」

「それでもだよ。……疎遠になってくれなかったのよな」

「……そう」

もう、終わった話だが。

夕食を食べ終えた後で、みんなからもらったプレゼントを4人で見てみた。様々なハプニングや驚きがあったが、流石に割愛だ。

一つだけ言わせて貰えば、ゆっこエ……あとファツ○ユーユツキ。少しだけ2人きりにさせて貰った。本当にあの2人は空気を読むのが上手くて助かる。

「誕生日おめでとう、文香。……やつと言えた」

「ふふ、そうですね」

「ごめんな、大変な時期なのに。誕生日すら一緒にいられなくて」

「あなたがそういう人なのは分かってますから。頼まれたら結局断れないんですから」

2人で笑う。

「遅れたけどこれ、俺からのプレゼント」

「ネックレス……ですか？」

「俺たちのイニシャルを入れてある」

ネックレスの裏面には、R、H。そしてその下にはKが。

「あと、少しだな」

「はい」

「琴葉……俺達は待ってるよ」

俺達の……大事な大事な娘。その生命を文香から感じながら、俺は文香を抱きしめた。

## オリキキャラ設定※ネタバレ含む

あさぎりょうや  
浅葱 遼哉

年齢：25

誕生日：7月26日

血液型：A 型

身長：180cm

容姿：イメージとしては、ハルヒのキョンの目を軽くツリ目にした感じ。メガネが似合う。茶髪だと思う。

好き：睡眠、読書、寝ること、ボロネーゼ、ピーマン

嫌い：理不尽、特に理由もなく睡眠の邪魔をされること、人の汚いところ、ナス

本作の一応主人公的な立ち位置。主人公は、P3人だがメインは彼はず。駿輔、ちひろは高校からの付き合い。楓、加蓮とは幼なじみ。文香の元彼であり、別れるきっかけは文香が他のプロデューサーにスカウトされ、アイドルになることが決まったこと。その際に2人で話し合い同意の上で別れた。

事務所などでは名前でアイドルを呼んでいるが、仕事の時には何があっても苗字で呼ぶ。（城ヶ崎姉妹のように苗字が被る場合は例外）仕事中にはメガネをかける派。視力が悪いわけではなく、公私を分けるスイツチのような物。

河合 彰

年齢：25

誕生日：11月7日

血液型：O型

身長：183cm

容姿：長めの黒髪。普段はタレ目気味の優しい顔だが、キレると鋭い目つきになる。

好き：正面突破、格ゲー、焼き肉、運動、読書

嫌い：クソ野郎、梅干し

オリP2人目。一番最初はまゆの生贄にするための哀れなCu担

当で、こんなに出番はなかった……というか1話使い切

りのつもりでのキャラだったが、主役で大抜擢。駿輔、遼哉とは同期。元ヤンであり、相棒の大和 武蔵（大和 亜季の兄）と共に『スサノオのヤマト』『阿修羅のキアラ』と恐れられていた。今でもその名はヤンキー達の中で語り継がれている。キアラはただ単に名前の彰をもじっただけ。もちろんこんな設定なんて最初はなかった。

武内 絢香

年齢：20

誕生日：2月3日

血液型：A 型

身長：172cm

容姿：クールビューティって感じ。黒川千秋と高峯のあを足して2で割ったらすごくくそれらしいと思う。

好き：兄さん、兄、兄貴、兄様、自分より先に産まれた血の繋がっている5つ年上の男性、ハンバーグ

嫌い：兄を貶す人、苦いもの

武内Pの妹。彼女を表すならば、ブラコン。その一言に尽きる。兄が大好き。駿輔を愛している。結婚するなら兄さん以外ありえない。兄以外を恋愛対象として見ることが出来ない。そういう人物である。なお、恋愛対象として見ることが出来ないだけであって嫌っている訳では全くない。新人にも笑顔で声をかける、スタッフにも好かれるトップアイドルである。

しかし、法律で近親と結婚が出来ないことはしっかりと理解している。最近はその法律をどうにか出来ないかを考えるのが日課。

## 番外編

「お兄ちゃん」

「ん？ 加蓮か」

読んでいたマンガに葉を挟んで机の上に置く。

「あれ、なんか邪魔しちゃった感じ？」

「いやマンガ読んでただけだし大丈夫」

「へえ、マンガなんて珍しいね。何読んでたの？」

「読む暇がないだけで元々マンガは好きだったの。BLEACHだよ。加蓮は知らないだろ」

奈緒なら間違いない通じるだろうけど。

「あ、知ってる！ 懐かしい！」

机の上に置いていた単行本を持ち上げて表紙を加蓮に見せると、意外な反応が返ってきて驚いた。

「え、知ってるのか？」

「うん。入院してた時に読んだことある」

ってというと、忙しくなってお見舞いに行けなくなった5、6年前ぐらいか。

「でも、加蓮はこういうマンガとか興味ないと思ってたんだが」

「ちよつとしたきつかけがあつてさ」

「きつかけ？」

それは非常に気になる。加蓮から見舞いに行けなくなつてからの空白期間の話聞くこと滅多に無いからな。加蓮いわく、「あの頃のカッコつけてスレてた自分を今になって思い返すと恥ずかしさで死にたくなるから」だそうだ。俺としてはそれが気になるんだよねあ……（ゲス顔）

「近くの病室にさ、高校生くらいかな？ それぐらいの感じの男の人がいつも入院しててさ、その人がよくBLEACH読んでたよ」

「ほう……仲が良かったのか？」

「仲が良かったというか……よく面倒見てくれてたつて感じかな。病室近かったからさ。その人の病気の方が私のなんかよりずっと重い

「ヤツだったらしいんだけどね」

「そっか」

「うん。そのお兄さんの影響でBLEACH読んでた。その人がこういう単行本いっぱい持っててさ、貸してもらってたんだ。入院中なんてやること無いし」

「確かになあ……昔俺が加蓮のお見舞いに行った時も、加蓮は大体何をしてもなくなつただだポーツとしてることが多かったし。」

「どんな人だったんだ？」

「えーつとね。元々普通に学生してたらしいんだけど薬で抑えてた病気が突如悪化して、病院に縛られることになつたらしいよ」

「気持ちは察する。今まで普通に生活していた学生がずっと病院に縛られることになるなんて、俺なら耐えられない。」

「でも、その時に知つたBLEACHに救つてもらつたつて」

「救つてもらつた？」

「そう。一護たちの諦めない姿を見て、自分も頑張ろうって思えるようになったつて嬉しそうに話してたよ」

「ふーん……ん？」

「なんだろう。何かが引つかかる。この話を、何処かで聞いた気がする……あつ。」

「加蓮」

「ん？ 何？」

「そのお兄さん、手紙を書いたりしなかつたか？ 看護師さんに代筆頼んだり」

「手紙？ どうだったかな……あつ、でもそのお兄さんの部屋から封筒みたいなのを持って出てきたのを見たことあるかも」

「ビンゴかもしれない。」

「そのお兄さん、亡くなつてるか？」

「う、うん。五年前に……でもお兄ちゃん、なんで分かつたの？」

「BLEACHの作者……久保帯人先生って言うんだが、その久保先生がTwitterであることを言つてな？」

「あること？」

「五年前、連載10周年の頃に久保先生が体調をずっと崩してて休載が続いた時があったんだ。それがいたくメンタルにきたらしくて、スランプ状態に陥ってたらしい」

「そんな時フアンレターの中に、名前も住所も書いてない封筒があったんだと。イタズラかと思って、それを読んだらしい」

「そこには、薬で病気が突如悪化して普通の学生生活から一転。病院から一步も動けない生活に変わったこと」

「何をしてても、友達と一緒に普通に楽しく過ごしていた時を思い出して何も楽しめないこと」

「親も医者も言わなかったけれど、自分の病気が治らないものであるのをしっていたこと」

「荒れて、今すぐ死にたいと言った時にちやんと生きてほしいと医者から告げられた余命が1年半であること」

「それからは、ベッドの上でも楽しめることを探して。マンガなら世界に潜り込んで、友達のことを思い出さずに楽しめるんじゃないかと思っただこと」

「いろいろ読んだ結果BLEACHに辿り着いて、次の話を読みたくて入院してから初めて明日を考えるようになったこと」

「BLEACHが自分の世界を変えてくれた。生きる勇気をくれたこと」

「自分がもう生きていないこと。そんなことが綴られていたらしい」「それって……」

「多分加蓮が話してくれた『お兄さん』のことだろうな。で、最後はこう書かれていたらしい」

『どうか、先生の思うままのBLEACHを描き切って下さい。僕はそれが読みたい』

「この手紙に後押しされて、先生はまた筆を握ることが出来たらしい」「そうだったんだ……」

確かに、あの時期にBLEACHの休載が続いていたのは良く覚えている。休載のお知らせを見る度に、大丈夫だろうかと考えていた。ちなみに、BLEACHの穴を埋めるために代わりに連載されていた

マンガはほとんど読んだことはない。

「なあ、加蓮。その『お兄さん』の名前覚えてないか？」

「ごめん、流石に6年も前だから覚えてない。あの時も『お兄さん』って呼んでたから、名前までは……どうして？」

「さっきのはマンガ形式で書かれてたんだが、その絵の続きで、頼み事をしてたんだよ。『この手紙の送り主を捜す手伝いをしていただけませんか』ってさ」

それを見た時の俺は、ただもつと多くの人に知ってもらうために拡散することしか出来なかったが、まさか加蓮がその送り主のこと知ってるかもしれないなんて思いもしなかった。

「病院名とかでもいいから、何か教えてあげて欲しいんだ。俺は何も分からないからさ」

「分かった。どうすればいいの？」

「えっと確か……あった。久保先生のT w i t t e rに投稿フォームのリンクがあるから」

加蓮は投稿フォームに自分の知っていることを書いていった。自分が入院していた病院にその人かもしれない学生がいたことを。それを隣で眺めながら俺は、送り主が無事に見つかることを祈っていた。

## バレンタイン

「おはよう、浅葱プロデューサー……って何その袋」

未央が俺の持ってきた袋を不思議そうに眺める。

「おはよう未央。ああ……そうか。未央はまだ経験してないから知らないのか。今日は何の日？」

「ねのh……じゃなくて、バレンタインデーでしょ？ 私も、みんなに渡す分のチョコレート持ってきてるよ。浅葱プロデューサーの分も後で渡すね」

「そう。正にそれだ」

「どういうこと？ あっ、そういうことか」

「職業柄、スタッフや同僚から貰うことが多い。かといって、普通に仕事で使ってるコレには入りきらない。そんな物入れる想定なんてしてないからな。だから、チョコを入れておく用のバツクを毎年持つてくるようにしてんだよ。これ割と色んな人がやってると思うぞ」

駿輔や彰も勿論持つてきている。

「そんなにいっぱい貰うの？」

「アイドルだけでも美城ウツチに何人いると思ってるんだ。全員から貰う訳ではないにしろ、それに女性スタッフやら社員やら色々足してみる」  
「1, 2, 3, 4……うわあ」

想像して数えてみたらしい未央がなんとも言えない渋い顔になった。例え、一つ一つが小さい物だったとしても塵も積もればなんとやら。と言うよりも小さい物が多い方がきつい。小さいと持ち運びにくいんだこれが。そのためにも袋は大事。

一年目はやらかしたものだ。まさかあれだけの量を貰うとは思わなかった。

「貰えるのは嬉しいけどねえ」

「そういうこと。そうだ未央、お前にもたくさんチョコが届いてるはず」

「私に？ なんで？ 私女の子だよ？」

「お前だって凜や卯月たちに友チョコを渡すだろ？」

「うん、そりや渡すけど」

「そんな感じでファンから贈られてくるんだよ。まあ例えると、ファンレターの代わりに付属品みたいなイメージだな。……たまに本命混ざってたりするけどな」

「えっ」

信じられないような目で俺を見るけど、これが本当なんだなあ

……。美嘉も楓も貰ってるから。

「まあ、七割は害がない物だし大丈夫だろ」

「残りの三割は!?!」

「ファンレターは俺ら一回確認してるってのは知ってるよな?」

「うん。変なことが書いていないかとか、封筒に危ない物が入ってないかを調べてるんだよね」

「そうそう。チョコも同じように調べてる」

「なんで? あっ、ちよっと待って。チョコに何か入ってたりしたと

か……」

その通りでございます

「E x a c t l y」

ゲンナリとした顔をする。

「アイドルって大変なんだね……」

「まあな。嫌味な言い方になるけど、ウチは金があるからそういうのを調べるモノがある。それでしっかりと調べてあるから、お前らに渡されるのは大丈夫なモノだけだ」

「それを聞いて安心したよ」

割と最近導入したもののけどな。それまでは大変だった……。

「じゃあ浅葱プロデューサー、はいチョコレート」

「ありがとう。纏にはしつかり渡してきたか?」

「もちろん。感想はまだ聞いてないんだけどね。後で味わって食べるってさ」

「おやおやお熱いこった」

「浅葱プロデューサーには言われたくないなあ」

言うようになったじゃないか。

「いじられ慣れてきたからね」

「あらま。まあ、慣れもするか。未央、今日の予定は把握してるか？」  
未央から貰ったチョコレートを袋にしまいながら、未央に確認をとる。

「うん。レッスンだよね」

「そう。NGとCIでダンスレッスンだ。他にも何人が参加するみたいだから、よろしくな」

「了解」

「伊吹あたりだったはずだから、学んで来い」

「わかってるってば」

荷物を持って立つ。

「じゃあ俺別の仕事あるから」

「はい、いつてらっしやーい！」

「遼哉さん」

「お、美嘉か。もう仕事上がったのか？」

別の場所に向かっている途中、

「調子よかったからね〜♪ 早く終わらせたかったのもあるけどね」

「というと？」

「こゝれ！」

美嘉が手渡してきたのはチョコレート。まあ、当然か。そもそも何をくれるのかわかってたし。美嘉は毎年くれるからな。

「今年もありがとよ」

「わかってると思うけど、それ本命だからね★」

「その積極性を最後まで保てればカリスマなのになあ」

「ちよつと！ それは酷くない!？」

「ははは、改めてチョコありがとうな。お返し楽しみにしておけよ」

「うん。それ目的なわけじゃないけど、いつも楽しみなんだよね〜！」

当然だが、しっかりとお返しは渡している。グレードがあつて、渡し方とかくれた物とかでお返しは分けてる。適当に渡してきたのにこつちが一生懸命作る義理ないし。

といつても、渡してくる奴は大体しっかりしたものくれるからみん

なにそれなりの物を渡している。本命と言って渡してくる美嘉たちには個人個人の物を用意している。

「毎回言ってるけど、意味とかは特に含めてないからな」

「クツキー、マシユマロとかを貰ってそういうことかってむやみに凹むな……でしよ？」

「その通り。作りたい物も作れなくなるからな。マシユマロとか食べる機会なんてそうそうないだろ。できればそういうのを作りたい」

「なんかわかるなく……あつ、次のレッスンそろそろだし準備してこないとー！」

「ん、じゃあ行ってこい。俺も向かう場所あるし」

「そうだったの？ ごめんね遼哉さん、なんか呼び止めちゃって」

「大丈夫だつて、いってらっしやい」

「はーい！と手を振りながら去っていく美嘉を見送ってから改めて目的地へと向かう。といっても、美嘉と出会った場所は目的地のすぐ近くだったので向かうと言うほどではなかったが。

「入るぞ〜」

ガチャリとドアを開けて部屋に入る。そこにいたのは

「あらプロデューサー、おはよう」

「プロデューサーちゃんじゃん！ おはー！」

「おはようございます、浅葱さん」

奏、唯、ありすが入ってきた俺に気づいて挨拶をしてくる。ここはプロジェクトクローネのプロジェクトルームだ。

「おはようございます、遼哉さん」

「おはよう、文香」

仕事というのももちろんあるが、正直なところ文香に会うことの方がメインな気もする。

「フレデリカ、奈緒、加蓮は仕事でないからOK。アーニヤと凜はシンデレラの方。ん、周子どこいった？」

レッスンを終わらせてプロジェクトルームにいるはずの周子がない。時計を見て確認してみるが、この時間にはもうレッスンは終わってるはずだ。そう考えていると、後ろのドアが開いた。

「あ、ごめん。待たせちゃった?」

「そこまで待ってた訳じゃないけど、どうした?」

「いやあ、着替えの後にいろいろ話し込んだりやってさあ」

「特に変なことがあったわけじゃないならいいけど、遅刻はしないように」

「はあい」

これで今いるメンバーは揃ったな。

「じゃあ、来週の業務連絡するぞ。つってもみんな撮影なんだが。奏と周子は雑誌の撮影。ありすと文香は番組の撮影。唯は奏周子とは別の雑誌の撮影な。なんか質問は?」

「はいはい」

「周子か、なんだ?」

「アタシと奏ちゃんをキャストイングしたってことは大人しめかクールな感じのファッションってことでしょ? どっちかなって思ってた」

「クールめだな。lippsのイメージでのキャストイングだ」

「あく、なるほどね。りよーかい」

ぐだぐだとなりながら返事を返す周子。一見グダグダで適当そうに思えるが、周子然りフレデリカ然りやるべき仕事はしっかりとこなしてくれる。ただ……ただ……普段がフリーダムすぎるだけで……。

「はい、連絡は以上です。今日はもう何もなければ帰ってもいいぞ」

「はいはい。帰る前にこれ、どうぞ」

周子からチョコを渡される。

「おお、用意してくれてたのか。ありがとな」

「いつもお世話になってるしねえ。あたしたちの面倒見るの大変だろうし」

「なら大人しくしてくれ」

「あはは、それは無理やないかな」

「この……直す気0かよ。まあ、それが魅力なんだけども。」

「プロデューサー、彼は?」

「駿輔か？ あいつ今なにしてたかな……忙しいのは分かる。ただ、2,30分すれば終わる仕事だったはずだからＣＰルームで待ってたらしいんじゃないか？」

「そう、ありがとう。これお礼にどうぞ」

「こちらこそどうも。普通に渡してくればいいのに、素直じゃないな」

「そういうの私のキャラじゃないというか、苦手なのよ。知ってるでしょう？」

「知ってるよ。ただ、あいつに迫るならいつも通りのお前の方がいいと思うぞ」

「アドバイスありがとう。それじゃあ行ってくるわ」

そう言つて奏はＣＰルームへと向かっていった。肝心なところでへタれるからなああいつは。正妻戦争に入り込んでいけるかどうか……

「プロデューサーちゃん、唯からもあげるー！」

「私もプロデューサーに用意してます、どうぞ」

「唯もありすもありがとう」

「お返し楽しみにしてるよ！ プロデューサーちゃん料理上手だつて聞いたしー！」

「期待には応えるよ」

唯に答えるが、背中にすごい視線を感じる。誰かは分かっているんだけども。視線の出所を辿ってみれば文香が本から顔を半分出してその上半目で俺をじとーつと見つめていた。

「この仕事柄たくさん貰うことになるのは知ってるだろ……」

「……そうですね。でも、この仕事に入る前の学生の時にもいっぱい貰ってて私はずっとやきもきしてたのは先輩も知ってますよね」

「まあ……そうだな」

「……ですが、今は彼女ではないので嫉妬はお門違いなのは理解しています。ですので我慢してチョコに思いを込めました。私のチョコが一番だと願つて」

そう言うのとてくてくと近づいてチョコを手渡してくれた。

「言い切る訳じゃないんだな」

「私は……他の皆さんのチョコレートを味見したわけではありませんから」

「そういうところ律儀だなホント」

「ありがたく受け取る。」

「私もお返し楽しみにしていますので」

「半分それ目的でもあるだろ」

「勿論です」

「なんでこんなドヤ顔なんだ……後ろにありすが乗り移ったみたいになってるぞ。チョコをしまいなながらバッグを手に持つ。」

「あれ、プロデューサーさんもう帰るんですか?」

「まあな。今日は用事があるんだよ」

「……用事ですか?」

「そう、用事」

「なんだろう?」

「不思議そうに首をかしげる3人を横目に見ながらクローネのプロジェクトルームを出た。そしてそのまま家へと車を走らせた。」

「ただいま」

「あく、おかえりなさい」

「やっぱり飲み始めてやがったなこの呑兵衛。なぜ帰ってくるまで待てない。物理的に酒断ちしてやろうか」

「ひどい! 反省しまあす」

「つたく……」

「帰ってきた家には楓がいた。そして予想通りにもう飲み始めてた。」

「男から言うのもおこがましい話ではあるんだが、今日はバレンタインデーだぞ? 単純に飲みに来たわけじゃないんだろ?」

「勿論ですよ。毎年渡してたでしょう? ちゃんと今年も作ってきました」

「良かった。楓のことだから本当にただ飲みに来ただけの可能性がある」

「信頼されていない信頼ですね……遼哉は私に対するそういう扱いをもっと優しくしてくれてもいいんですけど？」

「楓が酒を辞めるってんなら改善してやる」

「実質不可能じゃないですか……」

「酒を辞める努力をしようとしないとこころがホント流石だわ」

「それほどでもないですよ」

スーツを脱ぎ終わった俺に楓が酒を注いでくれる。

「それに、これが俺と楓の距離感だろ」

「ふふっ、それもそうですね」

「乾杯」

楓がいつから飲んでいたのかは分からないが、それほどの量は飲んでいないらしい。がつつり飲んでいたら楓はもつとめんどくさいからな。

「それで遼哉」

「あ？」

「どれぐらいチョコレート貰ったんですか？」

「まあ、大体今までと同じくらいだなあ。いや、CPとクローネ分は確実に増えたな」

「そうですかあゝ」

楓はぷくぷくと頬を膨らませている。

「文香と同じような反応するんじゃないの」

「理由も一緒だと思いますよゝ」

「だろうな。気持ちは分かるが美嘉や加蓮を見習ってくれ」

「2人にも貰いました？」

「ああ。加蓮は朝方だけだな。学校行く前にわざわざ家に寄ってな」

「すごいですねえ……学校って逆方向じゃなかったでしたっけ？」

「ああ。結構早かったな」

「ちゃんと起きててあげてたんですね」

「うっさい」

見透かされていた。照れ隠しで目を逸らしながら酒を口に運ぶ。それからも酒宴は続いた。

「一回やったけど、改めて。俺たちの幸せなバレンタインデーに。乾杯」

「乾杯♪ 1か月後楽しみにしてますね」

「満足はさせてやるよ」

大人の夜は更けていく。

## ホワイトデー

どうも、長谷川纏です。今日は浅葱さんのお宅にお邪魔しています。その用事は

「よし。それじゃあ纏作っていいこうか」

「はい、よろしくお願いします先生！」

「先生はやめろ」

そう、浅葱さんにホワイトデーの贈り物の作り方を教えてもらいに来たんだ。

「にしても手作りにしたんだな。なんかアクセサリーとかでもよかったんじゃないか？」

「確かにそれも考えたんですけど、未央も手作りでチョコくれましたし、僕も既製品じゃなくてちゃんと自分の手で作った物を贈りたいと思ってる」

「青春してるなあ」

他人にこういう話をするのは結構照れくさい。でも、武内さんや浅葱さんはなんとというか近所のお兄さんというかなんというかな年上の男の人でこういう関係の人がいなかったからすごく新鮮だ。頼りがあるって感じ。

「料理の経験は？ それによって教え方が変わってくるんだが」

「料理は普通に出来ますよ。ただ、スイーツってあんまり作ったことがなくて」

「なるほどなあ。じゃあ、ある程度見せながら教えたら出来そうか。あまり教えるのって慣れてなくてな」

「はい、たぶん出来ると思います」

「よし、んじや作っていくか」

「なあ、纏」

「なんです？」

ちよつとした休憩時間にくつろいでいた纏にふと浮かんだ疑問を

投げかけてみる。

「お前と一緒にいる時の未央ってどんな感じなんだ？」

「どんな感じって……特にいつもと同じですよ？」

「んな訳あるか。なんかあんだろ」

彼女になってそれなり経つのにもいつも通りの態度とかありえんだろ。絶対に何かあるだろ。ほれ、ひねり出せ。

「そう言われても……あっ」

「なんか思い出したか」

ほら、あるじゃないか。

「未央って最近2人っきりの時……周りに人の目が無い時ですよ？」

お互いの部屋にいたりする時にすごく甘えてくるんですよ」

「ほう？」

未央が甘える姿か……想像つかんな。基本的に未央って姉御肌というか、頼られキャラだからなあ。頼られる前に自分で突っ込んでいくし。

「甘え方がこう……猫みたいな感じですがごく可愛いんです。無性に撫でたくなっちゃって」

「ああ……」

なんとなくわかった。一時期の文香にもそんな時期が確かにあった。確かその時は

「纏、最近未央と2人っきりの時間取れてないだろ」

「え、はい。確かに取れてないですけど。なんでわかったんですか？」

「昔俺にも同じ経験があったからな。そっか、確かに最近未央も忙しくなったしなあ」

「加えて僕の方も何かと予定がかさんじゃって」

「そんな時は俺が仕事始まって忙しくなってきた頃で、あんまり連絡も取れなかったんだ。んで、久しぶりに会った時には散々甘えられたさ」

「そうなんですな……」

『……忙しかったのは私も理解しています。でも寂しかったんです。』

だから……久しぶりに会えたんです、目一杯甘えさせてください』

あれは結構堪えた。すごい罪悪感に苛まれるんだこれが。

「だから、お互い忙しくてもこまめに連絡はしてやれ。電話じゃなくてもいい。繋がってるつてのが分かるだけでもうれしいもんだ」

「……はい。わかりました。ありがとうございます、浅葱さん」

「年上つてのは若い男女を応援したくなるもんなんだよ。頑張れ、応援してるよ。さて、そろそろいい感じだ。仕上げに取り掛かろうか」  
今はこんな不誠実なクソ野郎だが、だからこそ俺みたくにはなつてほしくない。ちゃんと未央と幸せになつてほしいからな。アドバイスなんざ幾らでもしてやるさ。

「はい、未央。これホワイトデーのお返し」

「わあー。ありがとうまとい！ 開けてもいい？」

そしてホワイトデー当日。僕は無事に未央へプレゼントを渡すことができた。

「お菓子……もしかしてこれまといの手作り!？」

「うん、浅葱さんに作り方教えてもらつてね。意外と簡単なんだ」

「ていうか、まといも料理できたんだね」

「あれ、知らなかった？」

「全然」

そういえば、料理のこととか全く話したことなかったっけ。

「後、これも」

「もう一個プレゼント？ お菓子貰ったのに……」

「いいのいいの。とりあえず開けてみて」

「うん、わかった」

未央に手渡したもう一つのプレゼントにはブレスレットが入っていた。

「ブレスレット……？」

「これは、お守り。未央、ちよつとこつち来て？」

「う、うん」

近づいた未央を思い切り抱きしめる。

「ま、まとい!? どうしたの!？」

「ごめんね、未央。寂しい思いさせちゃったんだよね」

「あ、うん……」

最初は驚いていたが、すぐに大人しくなった。

「私もまといも忙しいのは分かってるんだけど、どうしても寂しくなっちゃって」

「うん。僕さ、浅葱さんに言われたんだ」

「プロデューサーに？」

「こまめに連絡してやれって。繋がってるって分かるだけでも嬉しいって」

「確かに、嬉しいかも」

「そっか」

ブレスレットを未央の左手首につける。

「お守りって言ったよね。連絡できない時があるかもしれないけどこれが一緒の証だから」

僕は右手につけた似た似たデザインのブレスレットを未央に見せた。

「色違い？」

「元々ペアの物らしいよ。これで繋がってるって分かるかな？」

「うん。うん! ありがとうまとい!」

浅葱さんの話を聞いてから、何か残しておけるモノが2人の間に欲しいと思った。そこで見つけたのがこのブレスレット。一目でこれだと確信してすぐに買った。このブレスレットにはまだ未央には言っていない秘密がある。いつか、気づくかな。気づいてほしいかな。自分で言うのは恥ずかしいから。

『シンデレラの舞踏会』後のストーリー  
これが日常

「ねえねえ、浅葱さん」

「ん？ どうしたみりあ」

控室でスマホを弄りながら暇を潰していると、赤城みりあが声を掛けてきた。何か不具合でも合ったのだろうか。

みりあの方に顔を向けてみれば、何やら目をキラキラとさせている。

「新しい人達って、何時になったら来るの!？」

「あつ、あたしもそれ知りたーい！」

みりあと仲が良く、いつもつるんでいる城ヶ崎莉嘉もノってくる。

「えーっと、確か20分前くらいに武内が今から連れていくって連絡が来たからそろそろだと……」

「申し訳ありません、遅れました」

「……ほらな？」

入ってきたのは4人。それぞれ違う制服を着た3人と、パツと見そっちの筋の人間かと疑ってしまうような固い表情をしたスーツ姿の男性だ。

「遅かったな、武内」

「すみません。色々……滞ってしまっ」

「いや、問題ない。それで、後ろの3人がそうなんだな？」

「はい。彼女達が最後のシンデレラ候補です」

目を向けられた3人がピクリと反応する。

「皆さん、自己紹介を」

黒く長い綺麗な髪の少女は冷静に。

「渋谷凛です。よろしく」

短い髪の活発そうな少女は情熱を感じる挨拶を

「本田未央！ 高校一年、未央って呼んでね！」

茶色の長い髪の少女は可愛らしい笑顔で。

「島村卯月です！ えっと、頑張ります！」

「この3人に皆さんを加えた、14名がシンデレラプロジェクトのメンバーとなります」

「それじゃあプロデューサーさん、これで？」

独特のエロ……色気を持った現役女子大生、新田美波が訊いてくる。

「ああ、そういうことだよ。なあ、武内？」

「はい。これで全員揃いました。シンデレラプロジェクト始動です」

そこにいた少女達は「やったー！」と手を取り合い、喜び合った……

「そんな感じで始まったはずなんだけどなあ？」

「そうだったねえ」

目の前の惨状を眺め、お茶を啜りながら零した言葉に、隣で『うさぎ』のソファに身体を預けている双葉杏が同意する。

「なあ、杏さんや。何時からあんなったんでしたっけね？ 特にあの蒼い人」

「何時からだっけねえ。そんなこと杏に訊かれても困るよ、遼哉さんや。というか、割と最初の方からその片鱗があったように杏は思うけど？」

「言われてみればそうだよなあ」

改めて現状を確認してみる。

「プロデューサー、とりあえず印鑑貸して」

「な、何故でしょう……」

「大丈夫、大事な書類に印鑑を押すだけだから。婚姻届に」

「落ち着いてください、渋谷さん！ 貴女の年齢では結婚は出来ませ

ん！」

「安心してよプロデューサー。そんなこと分かってるから」

「この状況でどうやって安心しろと言うのですか……」

正論である。ちなみに武内は凜にのしかかっている。少しでも気を抜けば、凜に（性的な意味で）美味しくいただきますしまうだろう。ああ……凜の周りに蒼いオーラが見える。蒼い、蒼いよ……。

「ちなみにどうするつもりなんですか？」

「大事に仕舞っておく」

「そ、そうですか……」

武内のやつ露骨に安心してやがる。

「杏、続く言葉は希望か絶望か」

「絶望に来週一週間、文句言わず真面目に働んでベット」

おうふ、まさか賭けになるとは思わなかったぜ。しかも高額ベットときた。

「なるほど。FA？」

「FA」

さって、どうなるかな。

「それで……」

「それで？」

「16になったら即役場に行ってくる」

「やはり安心出来ないじゃないですか！」

やっぱり、そうなるわな。

「杏の正解だ。後で何かしてやろう」

「やったー」

「プロデューサーさん！」

おや？ 卯月がああの固有結界に近づいていく。まさか武内を助けるために!? 今まで凜と同類に見たりしてごめんな。やはり卯月は大天使ウツキエルだったか……

「島村さん……?」

「私ならもう結婚出来ますよ！」

知ってた『わかるわ』

あれ、今kws mさんの電波を受信した気がする。おい、今電波ついてって何処そのウサミミ声優アイドル17歳(笑)の歌を思い出したのヤツ！ いるだろ!? 先生怒らないから名乗り出なさい！（叱らないとは言っていない）

「助けてください浅葱さん！」

おっと、こっちに助けを求めてくるか。武内の方に目を向けて頷いてみると、『助かった!』と言わんばかりに顔が晴れる。

サムズアップをしながら、

「駿輔ファイト♪」

「裏切ったな遼哉あああああああああ！」

悪いな駿輔。自ら望んで戦地に向かつていくのは、戦場カメラマンか、報道陣か、ジャーナリストくらいなんだ。戦火の中心になっているお前が悪いんだ……。

それにしても、荒ぶってるなく、駿輔。俺のせいだけど。あ、言い忘れていたが俺と駿輔、この場にはいないが千川ちひろは高校以来の同級生の親友だ。

あく、面白いなあ。横に目を向けてみると相変わらず杏はソファの上でぐでぐんとくつろいでいる。……結構気持ちよさそうなんだよな、あのソファ。

そういえば、前に凜達がなかなかレッスンに来ないからってプロジェクトルームに探しに来たら、凜、卯月、かな子の3人がこのソファの魔力に取り憑かれていたってこともあったな。なるほど、杏の言う通りであれば人を墮落させるソファだ。

「杏、そのソファに俺も入れてくれ」

「ん？ いいよ、その代わりに杏が遼哉さんの上に乗るね」

「おk」

座ってみると、思った通り気持ちいい。なるほど、これは墮落しませすわ。そこに杏が乗って、ふうー、と息を吐いている。絶妙にいい位置に座ってきたな。

「よーっよーっ」と

「丁度いいので杏を抱いてみる。」

『!? 何やってんの!?』

「いや、特に意味は無い。ただ杏が丁度いい位置に乗ったから抱いてみた」

「ふ、ふくんそつか。それじゃあさっきの賭けの報酬はこれってことで」

「え、こんなんでいいの?」

「これがいいの!」

「ならいいけど。ほれ、撫でてやろう」

えへへ、と杏は顔を緩ませる。杏にしてはえらく積極的だな。

『!?』

しかし、その行動に反応するヤツも勿論いるわけで。

「杏ちゃん、なんて羨まs……けしからんことを!」

いやいや、隠しきれない上に、言い直した方が悪化してるんですがそれは……

「はいMa ミナミの言う、通りです。アーニヤも、リョウヤに頭、撫でてもらいたいです」

最早アーニヤは隠す気ゼロかよ。

「浅葱さん! 私を抱いてください!」

「蘭子は大声で一体何を口走ってるわけ!?!」

てかお前熊本弁はどうしたよ!

「ふふふ♪ 遼哉が抱いてくれると聞いて〜」

「25歳児は帰れ!」

「聞いて〜♪」

「お前もか姉ヶ崎!」

楓に美嘉も……お前ら仕事入ってただろ……

「何か美味しい出来事が起きている雰囲気を感じたので、早く仕事終わらせて帰ってきちゃいました」

「右に同じく〜!」

いや、2人してテヘペロされても可愛いだけなんです(真顔)。

「それで、抱いてくれるんですか。どうなんですか」

「抱きません」

途端に巻き起こるブーイングの大合唱。仲良しかよ……。仲良しだな。

「今杏ちゃんを抱いてるじゃないですか！ ハッ!? まさか杏ちゃんみたいな小さい子が……」

「い、妹たちは渡さないよ!」

「誤解を招くようなことを言うな美波! てか妹たち!?! お前の妹は莉嘉だけだろ! いい加減にしろ!」

「みりあちゃんを忘れるなんて酷い!」

「ロリコンでシスコンなカリスマJK(笑)は部屋の片隅で座って、大人しく『ふひひ☆』してろ」

「いくらなんでも辛辣すぎない!?!」

「じゃあなんでですか?」

ふむ、この状況下だと蘭子は癒しだな。流石墮天使<sup>天使</sup>。

「これは杏との賭けの正当な報酬だからな。そもそもお前らはアイドルだろうが。もし仮に有り得ないだろうが俺なんかと付き合って、金曜日さんあたりに激☆写されて『あの人気アイドル、プロデューサーと熱愛!?!』なんてことになったらどうする」

そう言うと、マズイと思ったのか黙り込む。ふう……。ようやく分かってくれたか。このタイピングで俺は『うさぎ』のソファから降りて、自分のデスクチェアに座る。その代わりに俺の上から降ろされた杏は大変不満そうだったが。

「買物に付き合っって貰うという名目でデート……はぐれないようにと手を繋ぐ……。そのタイピングで週刊誌に写真を撮られる……。スキャンダル……。そういう関係だと世間に認知される……。話題の中で引退発表……。プロデューサーが責任をとって私と結婚」

「おい待て、何を恐ろしいことを考えてやがるんだそのエロ大学生。お前最近既成事実を作ろうとしたり、そういう方面のアプローチ多くて、色々辛いんでやめてくれ」

本当に辛い。何が辛いつて、全面的に美波がエロいんだよ。俺だつてね? 菩薩でも秘丹弥虚羅多尊像でもない、健康的な男なんだよ。

ぴくにや〜。

『せめぴにめやにてや……名ぴーに刺やにだやびにけやびにもや（低音ボイス）』

なんだろう。すごく馴染みのある渋い声で、絶対に言わないようなセリフで喋る黒色の生物が頭に浮かんだ……。疲れてるのかな……。

『それだー!』

「それだじゃねえよ！（ありません!）」

美波の案に、我、天啓を得たりといった風に叫ぶアイドルに、身の危険を感じて反論する俺と駿輔。

そこにドタドタと誰かが走っている足音。どうやら段々近づいてきているようだ。バンツと、プロジェクトルームの扉を開けて入ってきたのはよく見知った顔だ。

「駿輔、遼哉、助けてくれ！ いや、一緒に逃げろぞ！」

それは別の部署のプロデューサーであり、同級生である河合彰だった。

「突然どうしたよ？」

「ちよつとまゆがな……とか暢気に説明してる場合じゃない！ いいからお前らもとつとと逃げるぞ！」

え、俺らもなの？ と混乱していると、

「プロデューサーさあん？」

「ひっ!？」

甘い、耳に心地いい声が聞こえてきた。

心地いいはずなのに、心根がスーツと冷える。ドアの方を見ると、彰の担当アイドルである佐久間まゆが縄を持って立っていた。

うわーあの縄って一体何に使うんだろー？（棒）

「逃げることないじゃないですかあ。まゆはあ、プロデューサーさんとお話がしたいだけですよお？」

「身体を縛られながら歓談が出来るほど、鋼の心を持ってない！」

別にまゆに彰を差し出してしまっても、構わんのでは？ などと思っていると、彰が俺達に逃げることを促した理由が来てしまった。

「お兄ちゃん？」 「兄さん？」

「おいおい……」

「マジか……」

どれだけ目を擦ってみても状況が変わることはない。むしろ元凶はこちらに近づいてきている。プロジェクトルームに来たのは、駿輔の妹であり、346のアイドルでもある竹内絢香。小さい頃から面倒を見てきて、俺のことを兄と慕ってくれる、同じく346のアイドル『Triad Primum』の1人、北条加蓮。この2人だった。

これはマズイ。この3人がこの状況にいるというのが本当にヤバイ。

「兄さん、何をやっているんです？ その手に持っているのは……婚姻届ですか！ ああ……兄さん、とうとう私と結婚してくれる気になったのですね！ 分かりました、印鑑はここにあります。さあ、その婚姻届を渡してください！」

「落ち着け絢香！ これは俺のじゃないから！」

「それくらい分かってますよ、兄さん。それは凜ちゃんに渡されたものでしょう？ 流石、考えたわね凜ちゃん」

「これくらいしないと、プロデューサーに一番近い絢香さんには勝てないから」

と、ここまでの行動から分かるように絢香は重度のブラコンだ。結婚するならば駿輔以外はありえない。駿輔以外は恋愛対象として見ることが出来ない。そういうヤツだ。あ、別に恋愛対象として見ることも出来ないってだけで男性にも優しい子です。

デスクチェアの凭れながら一連の微笑ましい流れを見てみると、後ろから首に手を回され誰かが撓垂れ掛かってきた。まあ、誰かなんて確認するまでもないけど。

「ねえ、お兄ちゃん。最近構ってくれないから、私寂しいよ？」

「俺もお前も忙しかったし、仕方ないだろ。トライアドのスケジュール管理とか諸々の担当は全部駿輔に任せられたからな」

「むう……それはそうなんだけども」

加蓮がこうやって撓垂れ掛かる時は昔からの寂しいという意味表示だ。昔でこそ凭れ掛かるという表現だったが、今の加蓮は妙な色気

があるせいで撓垂れ掛かるといふ表現がピッタリ当てはまってしま  
う。本当に色々と成長しちやつて……

「だから、その成長した証を誇示するかのように押し付けるのはやめ  
なさい」

「あ、バレた?」

「バレるわ! まったく……そんなことしてたら、俺が何時オオカミ  
になるか分からんぞ?」

「むしろ望むところなんでバッチコイ」

「おいコラ」

すると、加蓮が耳元で囁く。

「ちなみに……私たち今日……危ないんだ」

「は? 危ない……私……たち?」

「うん♪」

加蓮が向いた方向を順に見ていくと、まゆ、絢香、そして自分を指  
差した。この3人はさつき後から入ってきた。危ないってことはま  
さか……

「気づいた?」

あ、ヤベエ。こいつら狙ってやがる。日程を調整して、既成事実愛の結晶を  
作ろうとしてやがる! 逃げねば(使命感)

そう判断した直後、俺は加蓮の腕から抜け出して2人に告げる。

「逃げるぞ! 172NGだ!」

『了解!』

3人で扉の方に向かうと見せかけて反転、窓に突っ込む。外に飛び  
出した俺達を見て誰かが悲鳴をあげたが、予め用意していたパラグラ  
イダーで風に乗って離れていく。プロデューサーたるもの、パラグラ  
イダー等といった逃走用アイテムを常備していなければならない。

「おい、あの3人既成事実作ろうとしてやがった」

「冗談キツイぞ……」

「何時ものことだろ?」

えっ、それは……

「お前、相当苦労してたんだな……」

「分かってくれたか……」

「このまま飲みに行くか！」

「そうだな！」

街の人は突然の出来事に驚いていたが、原因が346プロからだとは分かると

『なんだ346か』

すぐに納得した。そして、逃げてきたプロデューサーを見つけると声をかける。

「何時も大変だな、いい酒入ったけど一本持つてくか？」

「今日は一体誰だったの？ 凜ちゃん？」

「いやいや、絢香ちゃんだろ」

「なあ、今日はまゆちゃん一体何を装備してた？ 縄……ああ、逃がさないつもりだったんだ……」

近所の人の協力があるからこそ、彼らプロデューサーは自重をライブ会場に置いてきたアイドルたちの魔の手から逃げおおせているのだ。

下の喧騒を見て、彼女は愉快そうに笑った。

「まったく……騒がしいな。体力が有り余っているようだ。これは仕事を増やすように言うべきか」

「騒がしいのは、嫌いかね？」

「……今西さんでしたか」

その女性に声をかけたのは初老の男性。美城プロダクションアイドル事業部の部長であり、遼哉たちプロデューサーの上司の今西だった。

「ノックしても返事がなかったから、勝手に入らせてもらったよ。すまないね」

「そうでしたか。構いません」

女性は納得すると、自分のデスクチェアに座った。

「彼らが、やはり気になるかい？ 敦子くん」

「仕事場ですよ……まあ、私たちしかこの場にはいないですしいでしょう。気にならないと言えば嘘になるでしょうね、史法さん」

彼は、彼女——美城敦子がアメリカに出張する以前よりも昔からの顔馴染みである。今西と、敦子の父である、美城会長が同級生の親友であることもあり、プライベートでの交流があるのだ。

「君の考えとは、全く違うからねえ。気に入らないかい？」

「そういう訳ではありません。あの時彼には、噛み合わないと言いましたが私はあの2人の考えを認めています。シンデレラの舞踏会で彼が私に言った言葉……そっくりそのまま返したいくらいです」

『星？ 君はその星全てを見出せるというのか？』

『いえ。私に見えて常務に見えないこともあれば、その逆もあります。渋谷さんとアナスタシアさんの、別の可能性を常務が示されたように』

『触発された他の皆さんもそれぞれの可能性を広げ、輝きを増しています。それも、無限にある彼女達の可能性の一つに過ぎないのではないかと』

『君は……私の理想もその一つに過ぎないというのか？』

『私にとって一番大切なのは、彼女達が笑顔であるかどうか。その輝

きを如何に損なわせないか。……それが私のプロデュースです」

『君とは噛み合わないな。私は城を。君は灰被りの夢を第一としている。我々は平行線のままだ』

「私は確かに、渋谷凜やアナスタシアの新しい可能性を見出しました。しかし、彼もまた私には見えなかった……思いつきもしなかったような様々なアイドルの可能性を見出していった。平行線というのは悪いことばかりではありません。何故なら常に相手とは違う目線で物事を見ることが出来ますからね」

そう言った敦子の顔は笑っていた。あの時のピリピリした空気からはとても考えられないことだ。

「それで、楽しいことは嫌いかい？」  
「まさか」

そう言いながら彼女は再び立ち上がり窓辺に立ち、外の様子を見た。外には逃走した遼哉たちプロデューサーを捕獲するために、アイドル追跡者（主にC○）が放たれていた。

「私はアイドル事業部の統括担当です。騒がしくて楽しいことが嫌いならばこんな仕事、父からの頼みでもやりません。そうでなければ、あんなにムキになったりしませんよ」

そう言つて振り向いた敦子の顔は、とても楽しそうな笑顔を浮かべていた。

## ふみふみふみふみ

鷺沢文香は愛読家である。元々本が好きなことに加え、叔父の書店の手伝いしていたことから、本を読むことは彼女にとって生活の一部となった。

暇があれば本を読むために書店を巡ったり、葉を作ったりする。暇がなくても読書をする。

彼女にとって読書をしている時が一番幸せか。彼女の中で本が最も優先度が高いのか。

答えはNOだ。

彼女にはプロダクション内にお気に入りの場所があった。ちょうど良く陽射しの当たるベンチ。静かすぎるわけではなく、かといって五月蠅いわけでもない、耳を通り抜ける程度の音。

彼女ともう一人の人物だけが知っている。2人だけの秘密だ。

文香は何時ものようにそのお気に入りのお気に入りの場所ですべての本を潰すの。もちろん、リラックスしたい時や落ち着きたい時にもここを利用している。人目を気にする必要も、万が一本を読んでいる途中で微睡んでしまっても問題ない。何故なら彼女以外にここに来るのは文香が最も信頼している人だからだ。

カツ……カツ……と靴が地面を叩く音が文香の耳に聞こえてきた。その音が聞こえるや否や、今まで読んでいたページに手作りの葉を挟んで本を閉じた。

文香という少女が読書をしている時は、何度も声をかけても文香が気づくまで延々と本を読み続ける。彼女が声をかけられる前に自ら読書をやめる相手は1人だけだ。

「おお、やっぱりここにいたか。読書の邪魔……しちまつたか？」  
「いいえ。丁度キリのいいところでしたから」

嘘だ。彼の足音が聞こえて、葉を挟む前に文香が読んでいたのは会話文の途中だった。それにも関わらずすぐさま本を読むのをやめたのだ。

「そっか、なら良かった」

「はい、そうです。それで、今日は一体どうしたんですか？」

「実はな……」

「その前に」

文香は秘密の場所にやってきた彼——遼哉の顔を見てニコリと花が咲いたような笑みを浮かべた。

「私の隣に座りませんか？ 先輩」

彼女にとって一番優先するべきモノは本ではない。

「とりあえず、ふみふみさせてくれ」

「あ、はい。いいですよ。……そういえば結構久しぶりですよね、それ」

「ん？ そうだな。最近はずちもごたついてたし、お前もクローネで忙しかったし」

癒しを求めて何時もの場所に行くと、何時ものように文香がいた。高校と大学の後輩だった彼女をスカウトしたのは俺だ。シンデレラプロジェクトが始動してからは担当を外れたが、シンデレラの舞踏会が終了した後にもまた担当になった。

常務——今は専務だが——が俺に言った言葉が、

『彼女は他のプロデューサーがプロデューズするよりも君が担当した方がもつと輝くだろう』

美城というブランドだけを守ろうとした最初の頃の常務とは大違いだ。きつと俊輔に影響されたんだろう。

「私は言ってくれば良かったのに」

「そういう訳にもいかんでしょうよ。色々と考えた結果だよ」

「……そうですか。……!？」

「ああ……すっげー癒されるわあ……」

ふみふみといってもそんな大層なことをする訳じゃない。ただ、文

香を抱き寄せ、肩に顔を乗せて、ひたすらに文香の頭を撫でくり撫でくりするだけだ。簡単だろ？

「……やっぱりこれ凄く恥ずかしいですね……」

「あ、ごめん。嫌だった？」

「いえ……相変わらず恥ずかしいですけど、頭を撫でられるのは嫌いじゃありませんから。むしろもっとしてください」

「そっか」

遠慮なく文香の頭を撫でくり撫でくりしていると、黙ってされるがままになつていた文香が口を開いた。

「今日はどうしたんですか？ えらくゲンナリとした表情でしたけど。あ、今の先輩の顔です」

そんな顔をしている自覚はある。

「聴いてくれよ、文香」

ラブライカの撮影が終わって、帰ってきた時だ。

「新田、アナスタシア、撮影お疲れ様。今日はもう仕事は残ってないから上がりだ。明日は午前9時から今度のイベントでのライブに向けてのレッスんだから、それに間に合うように来てくれ」

『お疲れ様でした』

「ところで遼哉さん、仕事の時は私たちのこと名字で呼ぶのやめませんか？ 武内Pさんはもう仕方が無いですけど、遼哉さんは普段は名前で呼んでるんですし」

「Да <sup>はい</sup>、アーニヤと読んでくれないので……один <sup>はい</sup> окий、アー……寂しい、ですね」

「お前らだつて仕事の時は、プロデューサーって呼ぶだろ。はじめだよ、仕事とプライベートのな」

まあ、色々と話しながら癖になつてるのか3人でプロジェクトルームに向かつてたんだ。そこで丁度専務とすれ違つてな。

「お疲れ様です」

「お疲れ様。君は……ああ、彼女達の撮影の帰りだったか。どうだ、君たちのアイドルを活かすプロデュースは上手く行っているか？」

「ええ、おかげさまで。専務がああの後でプロデュースを任せてくれたおかげで、武内風に言うのなら『シンデレラたちの新しい可能性』を見つけることも出来ましたから」

「それならばいい。ご苦労だったな」

「それでは」

話も一段落ついたから、礼をして離れようとしたんだ。だけど、

「言い忘れる所だった」

専務が俺を呼び止めたんだよ。何だろうと思ってまってる、近づいてきてとんでもない爆弾落としていきやがった。

「美城のアイドル部門では、恋愛は禁止していない。むしろ推奨しているくらいだ。存分に愛を深め合うといい」

あの人今まで見たこともないようなイイ笑顔を浮かべてやがった。面白くなって来たぞ、と言わんばかりの表情だったね。絶対確信犯だよ、あの人。多分専務は面白いことに対して全力を尽くすタイプだな。

怖いのはこっからだ。気づいたらな、アーニヤと美波がいないんだ。そしたらエレベーターに消えてくのが見えちまって……。俺は思わず逃げてきたよ。恐らくアイドル部門のヤツらにはもう広まってるだろうな……

「そうだったんですか……」

「そうだったの」

「……恋愛推奨。それならあの時、……別に必要なかつたじゃないですか」

「まさかこんな事になるとは思わねえだろ。そうでなくとも世間の目は厳しくなる。何よりそういう色眼鏡で文香を選んだとは思われないからな。というか、お前も納得したじゃん」

「遼哉が言ってることも正しいな、思ったから渋々了解しただけです！ 今だつて納得してないですからー！」

と言つてぷくーつと可愛らしく頬を膨らませた。あ、この反応はちよつと拗ねてるな。

「はいはい、分かったから拗ねない」

「拗ねてません！ ……ちよつと寂しかっただけです」

「可愛いやつめ」

「……今更気づいたんですか？」

「ずっと知つてたよ」

「ならいいです」

あ、勘違いしてないか？ 俺と文香は今、付き合つてる訳じゃないからな？

チラリと時計を見ると、もうこんな時間か。アイドルたちもそろそろ帰つた頃だろうし、戻らなきゃだろ。と思つていると、俺の様子に気づいたのか。

「そろそろ戻るんですね？」

「ああ、そうだな。てか、文香もよく分かるよな。毎回俺が声かける前に気づかれてるし」

「……私が何年先輩のことを見てると思つてるんですか？」

「……さいですか」

今、文香とは付き合つていない。これは事実だ。

「あ、お兄ちゃんだ。やつほー」

「あら、遼哉。今ごろになつてただいぶですか？」

戻つてきたプロジェクトルームにいたのは、加蓮と楓だった。2人とももう仕事は終わつてはるはずだろ……なんで帰つてないのよ。というか、楓。それは俺の椅子だ。もう飲んでやがる……つて！

「楓！ それ俺が隠しておいた酒じゃねえか！ どれだけ飲みやがつ

た!？」

「やだなあ遼哉ったら。そんなに怒らないでくださいよ。お猪口でちよこつとだけですよ、ふふっ♪」

「帰って家なり居酒屋なりで飲んでくればいいじゃねえか!　こんな所で飲むなよ!」

「それは私のセリフですよ、遼哉」

あ、やっべ。ここに文香と来てたんだった。

「また自分の分だっついていつて隠してたんですね?　言ってるじゃないですか。お酒が好きなのは構いませんけど、お仕事の時くらい忘れてくださいって!」

「……………うっす」

「遼哉、私と約束したじゃないですか。もう持つてかないって。大体あの時家で……………」

「分かった!　分かったから、その話を楓と加蓮の前でするのはやめてくれ……………」

「……………え?」

それでようやく気づいたのか、楓と加蓮の姿を認めると

「……………はうう」

と顔を真っ赤に染めた。可愛い。

「ずう〜つと気になってたんですけど、文香ちゃんと遼哉つてやけに仲が良くないですか?　先輩つて呼んだりさつきみたいに遼哉つて呼んだり。いえ、先輩つて呼んでるのは後輩つてことを知ってるからいいんですけど」

それに答えたのはソファで寝転びながらポテトを食べていた加蓮だった。そのポテトは一体何処の?　

「そりやそうですよ、楓さん。なんてたっってお兄ちゃんと文香さんは付き合ってたんですから」

「え?」

アツサリとバラしてくれよった。まあ、隠そうとしてる訳でもないからいいんだけど。

「付き合ってたっつてことは別れたんですよね?」

「まあな。別に嫌いになったから別れたわけじゃないけど。文香がアイドルデビューすることになったから別れようって」

「遼哉からスカウトしておきながら酷くないですか？」

「悪かったって。あん時も謝っただろ？」

「アイドルなんて普通恋愛禁止だし、デビューするのに支障が出るといけないと思って別れたんだ」

私はまだ納得してないですからね！分かった分かった……と2人の様子を見て楓は驚いていた。普段と違った様子で可愛らしく表情がクルクルと変わりながらハキハキと喋る文香にももちろん驚いている。しかし一番驚いていたのは、遼哉と文香の距離だ。別れたと言っているが、ああやって話している雰囲気は恋人以外の何物でもない。

「私……加蓮ちゃんが一番強敵だと思ってたんですけど……」

「私なんてまだまだですよ……文香さんに比べたら。でも、負けるつもりはありません。もちろん楓さんにもです」

加蓮の目は決意に満ちていた。文香は元彼女だ。そのアドバンテージは大きい。だが、加蓮も遼哉を思い続けているのだ。遼哉への想いだけは負けたくなかった。それは楓にとっても同じことだった。「私は高校まで遼哉と同じでしたし、文香ちゃんがその頃から好きなのも分かってました。まさか大学も同じところに行って、付き合うことになってるなんて思いませんでした。1歩先を越されていたことは悔しいです。悔しいですけど、私にだって幼馴染みとして何年も何年も彼の傍にいるんです。もう十分に待ちました。絶対に負けませんよ?。」

最後は加蓮だけではなく、話の終っていた文香にも向けられていた。

「……私が先輩と付き合うことが出来たのは、楓先輩が同じ大学になかったのが大きかったと思います。でも今は楓先輩、加蓮ちゃん、

美波さん、アーニヤちゃん……他にもいっぱい先輩のことが好きな人がいます。皆さんの中で一番先輩のことが好きだ。先輩への想いは誰にも負けない。そんなこと私には言えません」

その言葉に加蓮も楓も驚いた。

「でも……それでも……先輩を渡したくない。遼哉の隣にいたい！」

だから、お互い頑張りましょう？ 誰が先輩の心を掴んでも、私は素直に祝福します。絶対に悲しくて絶対に泣いてしまうけれど、私は先輩に幸せになってほしい。先輩が幸せになってくれるのならば大人しく身を引きます。でも、そうはなりたくありません。だから……」

「ええ」

「そうですね」

『お互いに頑張りましょう』

手を重ねる3人。楓と加蓮は、文香の思いの丈を聴いて感じた。

遼哉が文香と付き合うことの出来た理由が分かった気がする。

彼は如何に絶世の美女が告白してきたとしても、彼自身がその相手に惹かれていなければ告白を断るような男だ。現に、中学や高校時代にそういった場面を楓は見たことがある。

そんな彼が文香の告白を受けたのは、彼が文香に惹かれていたからだ。その文香に惹かれた理由が2人には何となく分かった気がしたのだ。楓と加蓮とでは、考えていることは違っている。しかし、それはどちらとも遼哉が文香に惹かれた理由に間違いなかった。

「そろそろ腹をくくらないといけないんだろうな……」

3人の様子を見ながら、遼哉はデスクの鍵がかかった引き出しを開けて中に入っているモノをじっと見つめた。

3分程凝視した後、気づかれない程度の大きさの溜息をつき、引き出しを閉じて鍵をかけた。

（色んなヤツらが俺のことを好きでいてくれる。男としてはもちろん嬉しいさ。……でも、好意を向けられるような出来た人間じゃないんだよ……俺は）

遼哉が見ていたのは、本当に引き出しに入っていたモノか。ソレを見ている遼哉は悲しそうな目で、何かを思い出しているような遠い目だった。

## 緑の事務員さん

「以上が、明日の皆さんのスケジュールとなります。現場入りまでの時間はオフとなっています。大丈夫だとは思いますが、収録に支障が出ないレベルで目一杯羽を伸ばしてきてください」

「はいー！」

「それでは、今日はお疲れ様でした」

「お疲れ様でした！」

明日のオフどうしましょう？等と相談しながらプロジェクトルームを後にするニュージェネレーションズの3人。何度もトラブルに襲われたが、全て乗り越えた。シンデレラプロジェクトのユニットの中で一番絆が強いのは彼女らだろう。なんて、一息つけた頭でぼんやりと考える。

「ダメだ。俺にはまだ事務仕事が残ってたんだった」

こんな風に独り言が素の言葉で漏れるようになったのも、シンデレラプロジェクトのメンバーのおかげだろう。今西部長の言う『無口な車輪』。確かに、言い得て妙だ。

誰に対しても敬語で壁を造り、必要以上にアイドルに干渉しない。仕事をこなすだけの社会の車輪。そんなモノに自分はなりかけていた。それをすんでのところで引き留めてくれたのは、遼哉だった。そして、悪い魔女かっぺの失敗にかけられた魔法を解いてくれたのは、友とプロデューズしたシンデレラだ。彼女たちを導いたのではない。寧ろ自分は彼女たちに導かれたのだ。自分は導かれた道を歩きやすいように舗装しただけだ。

「……デューサーさん、プロデューサーさん！」

「は、はいー！」

声をかけられて、ようやく気づいた。プロジェクトルームに人が来ていたのだ。

「千川さんでしたか。どうされましたか？」

「プロデューサーさんに資料をお持ちしたんですが……私のノックにも反応が無かったので、入ってみました」

「そしたら私が考え事に没頭していたという訳ですか……申し訳ありません」

「いえ、謝られるようなことでもありませんし」

笑顔で返してくれる千川さんに、申し訳なく思う。ただ、これ以上謝っても却って彼女を困らせてしまうだろう。自分は無意識に右手を首裏に持つていく。

「ところでプロデューサーさん？ お仕事は後どれくらいで終わりますか？」

「仕事ですか？ まだ時間がかかりそうですね」

「そうですね……」

見るからに凹んでしまう千川さん。恐らく飲みにさそってくれようとしていたのだろう。最近は忙しくて彼女とは一緒に飲む機会が無かった。

「まだ時間はかかります。なので、急いで終わらせますね。この仕事の方がついたら、一緒に飲みにも行きましょうか」

「あ……はい！」

ああ……良かった。笑ってくれた。もう……人の悲しむ顔は見たくないから。

「……あの」

「はい？」

「凝視されていると仕事に入りにくいのですが……。楽しみなのは分かりましたから、デスクに顔を乗せてニコニコしなくても……。千川さんにも自分の仕事が」

「私の仕事なら、プロデューサーさんに書類をお持ちしたので最後です。なので、お気になさらずに仕事を続けてくださいね」

「ですが……」

「お気になさらず♪」

「……分かりました」

人にじつと見つめられながら仕事するのはなんだかくすぐったい気持ちだ。そう思いながら、自分はやはり首の裏側に右手を回した。

「それじゃあ武内くん、今日もお仕事お疲れ様！」

「そういう千川もお疲れ」

仕事終わりの居酒屋で、同級生としての労いをしてくる千川に同じく同級生として返す。

「前にも増して忙しくなったわよねえ」

「シンデレラプロジェクトの彼女たちの仕事が増えたのもあるけど、プロジェクトクローネとしてデビューした彼女らのスケジュール調整もこつちに回ってきたからな」

「武内くん大丈夫？　ちゃんと休んでるの？」

「大丈夫。とはいえ家に帰っても少しやることあるし、結構夜遅くまで起きてるな。昨日仕事が終わったのは夜中の2時だったし」

この仕事が朝早い出勤じゃないのが幸いだなあと言いながら酒を飲む。

「……武内くん、前の休暇ってどれくらい前？」

さて、何時頃だっただろうか？　シンデレラの舞踏会を成功させた後に当時の常務だったか今西さんだったかに取らされた記憶がある。シンデレラの舞踏会もからもう……

「……3ヶ月前とか？」

「……なんで？」

「いや、なんでと訊かれても困るんだが」

ただ休暇を取るタイミングを失って、そのままズルズルといたら3ヶ月経ってしまったというだけで。それを聴いた千川は大きく溜息をついた。すごい呆れられている。

「決めました！　今度一緒に何処かに行きましょう、温泉とか！

デートですよ、デート！」

「ちよつ、周りに聞こえるから」

突然何を言い始めたのかこの人は。

「デートとか……どうしたんだよ千川」

「だって俊輔ったら凜ちゃんとか絢香ちゃんとかにうつつを抜かして私のこと構ってくれないんだもん。私だって寂しいのよ？」

むう……とむくれる。首に手が回る。

「いや、俺が困ってるの分かってるだろ？」

「分かってる……分かっているんだけど！　なんか嫌なの！」

と言って彼女は、コップに残っていたビールをグイッと飲み干した。

「結局、誰が本命なの!?　いい加減私の所には来てくれないの!?　どうなの俊輔！」

「待て待て待て待て、とりあえず落ち着けちひろ。お前もう酔ってるな？」

「酔ってますよ！　でもこれは私の本心だから！　それは分かっているでしょ！」

「分かっているから困ってるんだよ……」

千川ちひろ。美城プロダクションの事務員で俺の同期。小学校時代からの幼馴染であり、俺が告白への返事を保留している相手だ。

「こうなると思ったから私は告白したのに……保留にされて。結局凜ちゃんみたいな子が増えて。酷いよ俊輔！　元々絢香ちゃんっていう強敵がいたのに……」

「ごめんってば、ほら泣かないで！　俺、トラウマ刺激されて辛いから……確かに悪いとは思ってるよ」

「……うん」

俺の言葉に泣き止みながら聴いてくれる。

「俺もこんな風になるとは思わなかった。でも、告白された時の俺に恋愛のことを考えられる程の余裕は無かったんだ」

「確かに……そう言われた」

「ああ言った。でも、ちひろのことが嫌いだって訳じゃない。寧ろ好きだ」

俺の好きだという言葉に一瞬喜んだ顔をするが、直ぐに暗くなる。

「でも、それは恋愛感情としての好きじゃないんでしょう？」

「ああ。その時の俺はこの好きが友達としてのモノなのか異性としてのモノなのが分からなかったんだ。だから、考える時間をくれなんて言って逃げた。余裕が無かったのは本当のことだけだな」

思った以上に言葉がスラスラと口から溢れる。酒の力もあるだろう。今はこのことに感謝だ。普段言えないようなことも……今なら。「ちひろには感謝してる。仕事場ではちゃんと線引きもしてくれし、終わった後には今日みたいに同級生として接してくれる。そんな女性がちひろだけだ」

でも、ここでちひろを選んでしまつてはダメだ。選択をするには早すぎる。焦るな。逸るな。

「でも、俊輔はここで私を選んでほくれないんでしょう？」

「え……？」

考えていたことをちひろに言われて呆然とする。酔っていたはずの彼女の顔は赤味を帯びつつも慈愛に満ちていた。

「何年俊輔と一緒にいたと思ってるの？ あなたの考えてることなんて読めるわよ。凜ちゃんたち、アイドルのことを考えてたんでしょう？」

「凶星だ。」

「ほら、凶星って顔してる。美波ちゃんが言っていた恋愛推奨。それは隠れ蓑を失うことだったんだよね。アイドルは恋愛禁止。そういう隠れ蓑があったから、俊輔は彼女たちの行為から逃げられた。でも、拒む理由が無くなつちやつた」

そう。もう知らないフリは出来ない。彼女たちの中から1人を選んで、他の子を悲しませなければいけない。それは、自ら傷口を抉るようなモノだ。でも、これは今まで逃げ続けたことに対する罰。自分が一生背負い続けなければいけない重み。

「彼女たちは貴方と添い遂げるためならアイドルも引退出来た。でもそれは俊輔を傷つけることだから、遠慮していた。でも、もうその必要はない。彼女たちはもつと純粋に貴方を求めるんでしょうね」

そこで、ちひろは悲しそうな顔をした。そして俯く。

「でも、私はそこまで出来ない。彼女たちに何処かで引け目を感じている。だから、私はもう身を……」

「やめろ！」

彼女が馬鹿げたことを言う前に掻き消す。

「そんなことを言うなら、自分の涙ぐらい隠せよ……」

机には一箇所だけ雨が降っていた。

「ちひろも来ればいい。堂々とライバル宣言をしてやればいい。全部背負う。きつと俺は今まで以上にすごく困る。それでも、何時かは誰かを選ぶ。それまではとことん俺を困らせてくれればいい」

ちひろは顔を上げて笑った。

「分かった！ もう嫌だった言っても止めてあげないわよ？」

「ああ、ドンと来い」

雨はもう降ってはいなかった。

「ところで、温泉は本当に行くのか？」

「もつちろんよ！ 貴方は休みなさい！」

「……一応連絡してみる」

『休暇を取れるかだあ？ ったり前だろ、お前どんだけ貯めてると思ってるんだ！ さつさと使い！ で、何に使うんだ。温泉？ ああ……了解。色々と把握したわ。明日千川の分までしっかり調整してやるよ。そんじゃあな』

「なんで遼哉、ちひろのことまで分かったんだ……？」

## リボンの少女の恋愛観：前編

佐久間まゆという少女をご存知だろうか。元は読者モデルで、アイドルに転身した今でも変わらず人気を得ている。

そんな彼女には想い人がいる。ヒントとして上げるならば、彼女の所属は美城プロダクションだということだ。このヒントでピンと来た人もいるだろう。そう、自分の担当プロデューサーの河合彰だ。

「プロデューサーさあん？」

「おお、来たなまゆ。こつちだ」

自らのプロデューサーに呼ばれて来てみると、とある会社から送られてきたドレスの写真を眺めていた。

「うわあ……綺麗ですねえ。でも、このドレスがどうしたんですかあ？」

「ああ。このドレスはこの会社で今度発表する予定の新作のドレスらしくてな？　そこで、」

「モデルになってほしいってことですよねえ？」

そういうことだ。と、何時も自分の言いたいことを理解してくれるまゆに嬉しそうに彰は言う。

本当に綺麗なドレスだ。女の子ならば一度は着てみたいと思う。もちろんまゆもそう思っていた。だからこそ聴いた。誰がこのドレスを着られるのだろうか。

「今回は二種類あるらしいから、こちら側の2人で行こうと思う」

「そうですか。羨ましいですねえ……。それで、誰を選ぶつもりなんでしょうか？」

「いや、人事みたいに訊くなよ。1人はお前で決定してるんだから」

「え、そうなんですか？」

「だからここに呼んだんだろ？　『わざわざドレスを見せて羨ましいだろ。でも、違うヤツが着る予定だから』とか、嫌がらせ以外の何物でもないじゃん」

そんな風に話している彼の言葉はもう、まゆの耳には意味のある音としては聴こえていなかった。

「プロデューサーさん、私を選んだのはあちらからの指名とかですか？」

「いや、俺だけど？ こういうドレスとかが似合うのはまゆが俺の知ってる中では一番だと思っただけだから。この仕事が入ってきた時にはまゆはもう決まっていたよ」

「そうですか！」

「なんだよ、えらく嬉しそうじゃないか、まゆ」

「もちろん嬉しいですよ？ このドレスが着られるというのもありますけど、まゆが一つでもプロデューサーさんにとって一番だつてことが分かりましたから！」

「そっか」

羨ましかつたのは本当だ。だがそれは、ドレスを着られないことではもちろん無い。それは、ドレス姿をプロデューサーに見てもらえることにだった。プロデューサーに選ばれたその誰かに嫉妬してしまう程に……。

だからこそ、嬉しかったのだ。自分が選ばれたことに。

「まゆちゃん、ホントに嬉しそうだねフレちゃん！」

「本当だね、シキちゃん！」

「!？」

ここにはいないはずの二人の声が部屋の中に響いた。フレちゃんこと宮本フレデリカはソファの下から、シキちゃんこと一ノ瀬志希は驚くことに、プロデューサーの真後ろから現れた。

「ふっふっふ、驚いてるねーシキちゃん！」

「にやふくん♪ ドツキり大成功だよフレちゃん！ くんかくんか……おお！ 驚きとやる気に満ち溢れたい匂いがする！」

「それは褒めてるんですかあ〜？」

「もつちろん！ 仕事を頑張つてつていうことの証だからね！」

「それで、なんで2人はここにいるんだ？ とうか、いつの間に部屋に入ったんだ？」

まゆがこの部屋を訪ねて来るまでは確かにプロデューサー以外の人影は無かった。

来るまでの間に珈琲を飲みながら理由もなくうろろと部屋の中を歩き回っていたので間違いない。まさかこんな風に役に立つ立っ立とは思わなかったけれど。

後ろにいたというのならば、書類を引き出しから取り出したりそれこそ珈琲を入れた時に気づかないわけがない。フレデリカが隠れていたソファにいたっては一度座っている。

「プロデューサーとまゆちゃんがパソコンのドレスの写真に夢中になってる間にスルスルーツとね」

「そう、スルスルーツと！ アタシとシキちゃんの隠密スキルを舐めてもらっちゃ困るね！」

「その努力はもつと別の方向に回せないのか……」

いわゆる、『無駄に洗練された無駄の無い無駄な技術』という奴だ。なんで天才という奴はこうも頭のネジが外れているのか……いや、ネジが外れているからこそ天才なのかもしれないが。

「あはは、レツスンとかはちゃんと受けてるし〜？」

「そーだよ？ まゆちゃんもくんかくんか」

「くすぐったいですう……」

「おお、恋する乙女の匂い！ 流石まゆちゃん！」

それを見ながらプロデューサーはちゃんと考えていた。

(フレデリカ……なんかこのドレスはイメージに合わないんだよな。どちらかといえばカジジュアル系がいい。なら、志希はどうだ？ ん、結構似合う気がする)

「志希、ちょうどいい。この仕事をまゆと一緒に頼みたいんだが」

「そのドレスの宣材をまゆちゃんと一緒につてこと？ プロデューサーも、もちろん一緒に来てくれるんだよね？」

「そりゃプロデューサーだからな」

「そつかそつか、それじゃあ受けさせてもらおつかなく」

「えー！ アタシはあー!?!」

「そんなこと言いながら『アタシにはこのドレスはちよつと似合わないかな〜』とか思ってたんじゃないのか？」

「ありやりやバレてましたか」

テヘツといった感じでフレデリカは舌を出しておどけた。宮本フレデリカという少女は頭がいい。アホではあるが、頭の回転は志希と波長が合っている時点でお察しだろう。

フレデリカは自分のキャラクターというものを理解している。この性格を作っているという訳ではなく、自分のセールスポイントというべきモノを理解しているのだ。だからこそ、ゴネる。自分にも仕事に欲しいというアピールをする。

プロデューサーはそんな彼女のこと理解したうえで接している。そのことはフレデリカにとっても気持ちの良いことだった。

「お前はファッション雑誌の表紙に起用する予定だから、安心しろ」

「やったー！ アタシ表紙飾れるー！ ファッションリーダーフレちゃん爆誕って感じだね！」

「おおー！ ファッションリーダーー！」

「表紙ですか、懐かしいですねえ〜」

「そっか、読者モデルだったんだよね。まゆちゃんは」

「そうですよお？」

ちようどいい先輩がいるのだ。フレデリカはまゆから色々とアドバイスを貰うことに決めた。

「アドバイスみたいなの無いかな〜？ アタシ宣材はノリでなんとかなったんだけどさー」

「にやははー！ 私もいっしょー！ ビビって感じで撮ったしー」

「いいですよお？」

アドバイスになるかは分かりませんが……」

チラリとプロデューサーの方を見る。

「今日はこれだけだから行ってきても大丈夫。このことに関してはまだ追って説明するから、2人ともいい？」

「はい」

「おっけー！」

「フレデリカも、決まったら連絡するから」

「はいはい」

「ねえねえまゆちゃん」

「どんなのがプロデューサーのハートを射抜けるかな？」

「やっぱり、そのために受けたんですねえ？」

「ドレス姿を見せられるチャンスなんて滅多に無いじゃん？ だから、まゆちゃんも一緒に頑張ろうよ〜って」

「アタシもおなじく〜」

「分かりました、じゃあこんなのはどうですかあ？……」

「おおっ、まゆちゃんってばダイタンなんだから！」

## リボンの少女の恋愛観：後編

「にやふふ、どうよキミィ。なかなか似合ってると思わな〜い？」

「おおお！ これは俺の予想以上にいいぞ！」

「志希さん綺麗です……」

「でしよでしよ〜？」

撮影当日。スタジオにはピンクのドレスを着た志希が立っていた。ウエディングドレスのようなものではなく、パーティードレスが一番近い例えだろう。彼女本来の猫らしき——何処かでネコミミをつけたアイドルが無駄な対抗心を燃やした気がした——は消えていないが、そこに妖艶さともいえるべきアダルトイナ雰囲気醸し出していた。

「ホントに綺麗だよ志希。もともと可愛いのは分かってたけど、ここまで綺麗になるとは思わなかったよ」

「……むう」

「にやはは……そこまで褒められると流石の私も照れちゃうよプロデューサー」

「それにしてもなんか着慣れてる感じがするな」

「アメリカにいた時には何かとドレスを着ることもあったからねー。まさかこつちでも着るなんてー、思わなかったけど！ あはははー！」

ドレス姿の志希を褒め倒すプロデューサーに対して照れる志希とそれが面白くないまゆ。お互いがプロデューサーに対して好意を向けていることは分かっている。そのうえで志希はアドバイスを求めたのだ。

モデルとしての先輩でありプロデューサーを愛する人としての先輩であるまゆに、魅力的に映る方法を。

「それじゃあ撮影に入るので一ノ瀬さん、よろしくお願いしまーす！」

「はいはい！ りよーかーいでーす！ それじゃ、プロデューサー。あたしの可愛いとこばつちり見といてね！ あ、その前に匂い嗅がせてー」

「あー、はいはい」

「フンフン……クンカクンカ……。んー！ このドレスの新品です！ って匂いもいいけど、やっぱりプロデューサーの匂が一番落ち着くー！ あ、行ってくるね〜！」

「おう、行ってこい行ってこい」

志希を送り出した彰の隣にまゆがちよこんと椅子に座る。隣に座ってきたまゆを見遣ると、まゆも彰の方を見上げていた。まゆはプクーっと頬が膨らみ、いかにも私不機嫌ですつ。という顔をしていた。彰はそんなまゆの頬突っついて空気を抜く。

「なんだよ、どうしたまゆ」

「志希さんをベタ褒めでしたねえ〜？」

「そら、綺麗だったんだから褒めるだろうよ」

「確かに綺麗でしたよねえ〜……普段の志希さんになんか大人っぽさが加わったって感じですよ。あれでまだ成人してないんですよえ〜？」

「まだ18だったな」

「スタイルもいいですし羨ましいですよ……」

自分にはまだ絶対に出すことの出来ない魅力だ。彼女は子供っぽい一面がよく目立つが、18とは思えない色香をしっかりと持っている。

「羨ましいって……まゆももう16なんだから焦ることもないだろう。これからなんだからさ」

「それはそうなんですけどねえ……」

そう、焦ることはない。まゆは胸もちやんと膨らんでいるし、女性らしい丸みを帯びた成熟した身体つきをしている。

だが、年下で素晴らしいプロポーションをしている神崎蘭子やナターリア、同じ年の北条加蓮や及川雫などに比べるとどうしても物足りないのではないかと彼女は感じているのだ。しかし、それは比べている対象が悪いというものだ。まゆもまだ成長期の真っ只中、将来性はまだ十分にある。

78あるなら十分ではないか。同じ年にはもう成長の余地など残っていない別のプロダクションのアイドルだっているのだ。くつ……

「志希さんはまゆにはない魅力を持っていますから」

「その代わり、まゆちゃんはあたしにはない魅力を持つてるでしょ？」

まあ、私とまゆちゃんの両方が持つてるものもあるけどね〜」

「あれ、志希どうした？」

気づけば、ドレス姿の志希が2人の前にいた。何か不都合でもあったのだろうか。等と理由を考えていると、カメラマンは若干申し訳なきように

「途中までは良かったんですけど、何か物足りなくなっちゃって……です。相手役をプロデューサーさんに手伝っていただけないかと思ひまして」

「つまり、キミはあたしの王子様ってことだよ！」

それではまゆをここに置いていってしまいがいいのだろうか。気になってまゆを見てみれば、笑って頷いている。

「まゆは大丈夫ですから」

「分かった。それじゃあ自分でよければ。着替えてきた方がいいですかね？」

「仕事用のスーツでは何か違いますしね。お願いします」

「分かりました。じゃあ、ここで待っていてくれよ？」

「プロデューサーさあん？」

真面目な顔をしてまゆは彰を呼び止めた。何時になく真面目な顔をしているまゆに何かあるのだろうかと彰も真面目な顔を向ける。

「まゆの時は、白のタキシードでお願いしますねえ？」

「真面目な顔してくだらんことを言うな」

「大事なことですよお？」

「貴様最初からそれが目的でOKしたな？」

「ど、どうですかプロデューサーさん」

「おお……これは」

「まゆちゃんかわいいー！ お嫁さんだよお嫁さん！」

「うう……実際に着てみると結構恥ずかしいです……」

志希の撮影が終わり、まゆの番になった。メイクが終わり、まゆが着てきたものは純白の、まさしくウエディングドレスだった。

その破壊力は凄まじく、彰は何も言えなくなっていた。

「では、プロデューサーさん。2人で撮る時になったらまたお声がけするのでよろしくお願いします」

「あ、はい。分かりました」

まゆが撮影に向かうと、横にいた志希がツンツンと横腹をつついてきた。

「おうふ、脇腹は弱いんだからやめれ」

「お、意外な弱点はつけーん」

「んで、どうしたのよ」

「プロデューサー……彰さんってさ、ぶつちやけまゆちゃんのことどう思ってるの？ 周りに人もいないし訊いてみる」

志希はプロデューサーではなく、彰さんと呼んだ。プライベートの時にしか使わない呼び方だ。

「どう思ってるって？ どっちもいいアイドルだと思ってるよ」

「そうやってはぐらかす。私たちが彰さんのことを本気で好きなの分かってるでしょ。あたしがさっき『キミはあたしの王子様』って言った時も反応してくれなかったし」

「あれってそういう意味だったのか？」

「気づいてたくせに」

「やっぱバレてたか」

彰は困った顔をする。まゆや志希だけではない。他のアイドルも自分のことをプロデューサーや仕事の関係としての『like』の好きではなく、異性としての本気の『love』の好きでいる。

だが、それに応えてもいいのか。美城専務が遼哉に恋愛を推奨していると言ったことは会社内に知れ渡っている。しかし、『はい、そうですか』と素直に従ってもいいのか。俊輔、遼哉、彰、美城。プロダクションの3人のプロデューサーはみな同じことで悩んでいたのだ。

「好きでいてくれるのは勿論嬉しい。なんせ可愛い娘ばかりだしな。だけど、その気持ちに応えられるのは一人だけになるだろ？」

「じゃあ、一夫多妻制の国に移住しよう！」

「いやいやいやいや、それもどうなんだよ」

「……まあ、あたしは彰さんがちゃんとあたしのことも大事にしてくれるなら愛人でもいいよ」

「志希、それは」

「だって、彰さんが一番信頼して大事にしてるのはまゆちゃんでしょう？」

咄嗟に否定の言葉は出せなかった。

「彰さんは多分そんなつもりは無いんだと思う。でもさ、なんとなく分かつちやうんだよね」

「志希……」

「これだけは覚えておいて。他の子に彰さんを渡したくない。負けたくない。でも……まゆちゃんになら正妻の座は渡せる。大人しく愛人になる。まゆちゃんは愛人とか許してくれないだろうけどね。ほら、もうすぐ彰さんの出番だよ。着替えてきてね」

「お、おい！」

彰が何かを言う前に志希は衣装室に押し込めてしまった。扉を閉めた後の志希の顔はなんとも形容し難いものだった。

「いいんですか？」

「まゆちゃんにならって話だよ。勿論負けたくはないけどね」

後ろに来ていたまゆの質問に振り返らずに答える。足音は聞こえていたからだ。

「それを言うならまゆちゃんはいいの？ あたしは愛人でもいいって言っちゃったんだけどさ、まゆちゃんは許してくれないかもじゃん」  
「勘違いしてるかもですけど、まゆは……」

「お疲れ様でした。今日は色々ありがとうございます」

「いえ、大丈夫ですよ」

撮影が終わり、事務所に帰ってきた。志希はそのまま帰ってしまったが、まゆは彰と一緒に戻ってきていた。

「……プロデューサーさあん？」

「ッ!? あ、ああ、どうした？」

「私が訊きたいですよ？ ずっと何か考え込んでますし」

「悪いな……」

「志希ちゃんが言ってたことで悩んでるんですよ？」

「……よく分かったな」

彰は志希に言われたことをずっと考えていた。

「愛人でもいいなんて……そんな訳ないだろう。志希が俺に向けてた好意はまゆにも負けないぐらいだった。なのにあんな……」

「志希さんは私と同じなんですよ。1個を除いて」

まゆは彰に背中を預けながら語りかける。

「プロデューサーさん……彰さんが他の子に好かれるのは構わないんです。それだけ、まゆたちの好きな人は素敵だつてことです。まゆと志希さんはここからが違うんです。まゆは志希さんじゃないのであくまで予想ですけど、志希さんは彰さんが幸せでいるなら自分が一番じゃなくてもいいと思ってるんです」

「……………」

「まゆも彰さんが幸せでいてくれるなら嬉しいです。彰さんが他の子に愛情を向けていてもいいんです。まゆのことだけ見ている、他の子なんて見ないで。そんなことは言いません。いいえ、そんな彰さんは嫌です。まゆが好きになった彰さんは誰にでも優しく思いやれる人ですから。みんなのこともちろんと大事にして欲しい。それでも……それでもまゆは彰さんの一番でいたい」

まゆは途中から背中を預けるのではなく、彰の方を向いて寄り添っていた。

「今彰さんに選んで欲しいわけじゃありません。ただ、まゆの気持ちを知っていて欲しかったんです。多分志希さんもそのつもりで彰さんに話したんだと思います。彰さんがこれを知っている上でまゆも志希さんもアプローチすると思いますから、頑張ってくださいね？」

「……弱ったなあ」

そう言った彰の顔は憑き物が取れたようなすつきりとした顔だっ

た。

「俊輔も遼哉もすつきりした顔してたし、あいつらも何かあったんだろうな。俺も負けてられないか」

「決心つきましたかあ?」

「ああ。もう大丈夫だ」

「そうですか。今日はもうお仕事も終わりですし、私の部屋に寄って行きませんか?」一緒にお夕飯でも」

「ご馳走になろうかな」

「はい、腕によりをかけて作っちゃいますよお?」

「はは、楽しみにしてるよ」

そう言って話す2人の顔は実に晴れやかな笑顔だった。

何が始まるんです？

ウイスキーボンボンというお菓子がある。ウイスキーの名の通り、ウイスキーが使用されているチョコレートだ。しかし、度数は低いものが多いので酒にあまり強くない人や大きな声では言えないが未成年でも気軽に美味しくアルコールを楽しめる。

今回はそのウイスキーボンボンが発端だ。

「おはよう……千川何食ってんの？」

朝出勤してプロジェクトルームに入ると、千川が幸せそうなホクホク顔をして何かをパクついていた。

「あ、浅葱くん。おはようございます。これはですね、礼子さんからのお土産で貰ったチョコレートです。大人用と子供用と分けてあるらしいですよ？」

「あー、河合と確かロケだったな」

で、あの人のお土産で大人用に分けてあるってことは……と、ある程度の予想をたてながら俺も一口に入れて噛めばアルコールの香りが口に拡がった。

「やっぱりアルコール入り……ウイスキーボンボンか」

「はい。いかにもあの人らしいお土産ですよ〜」

「ああ。でも、残念だな」

「何がですか？ ……あ、そういうことですか」

とりあえず、まだ年齢の低いみりあや莉嘉たちが間違って食べてしまわないように注意書きを書いておく。

「こっちは大人用のアルコールが入っているチョコレートなので間違えて食べないように。興味がある奴は俺に一声かけること 浅葱」  
近くの普通のチョコレートを置いてこちらにも書き置きをする。

「こっちは普通のチョコレート。好きなだけ食べるといい。ただ独り占めと食べすぎには注意するように。……太るぞ（直球） 浅葱」

「うわあ、容赦ないですねえ……。私の心にもグツサリ刺さりました

よ?」

「お前、前に太らない体質って言ってなかったか?　ちなみに俺はそうなんだけど」

「浅葱くん、それ女の子の大半を敵に回しますよ?」

「あー、はいはい。千川は恋する乙女だもんな」

おっと、俺を見る視線が冷たくなった。これくらいで勘弁しておいてやろう。

「で、違ったのか?」

「ええ。私は生憎とそんな素敵な体質じゃありませんよ。ただ、どれだけ食べても太らないような工夫をしているだけです」

「そっかそっか。教えてくれてありがとう。ただ、俺が言うのもどうかと思うんだが、そういうのは場所を考えるべきだったな」

「え?」

千川の肩にかかる2人の手。

「ちひろさん、今の話本当?」

左肩に手を置いているのは、武内Pの犬、クンカーマスター、蒼の使い手など様々なアイドルとは無関係の厨二な異名を持つアイドル、渋谷凜。

「ちひろちゃん、その方法、私たちにも教えてくれるわよね?」

右肩に手を置いているのは、25歳児、ただの酒呑み、「私、モデルしかやったことがないのでアイドルなんて上手くいくでしょうか……」なんて言っていた最初の頃のしおらしい態度は一体何処に酒と一緒に吐いてきたんだ、等と悪名高い高垣楓。

最後のは流石に俺だけが思っていることだが、他の2つはファンの中でも既に広まっている。なんとも悲しくなる話だ。

「あはは……逃げちゃダメですか?」

「あつちでO☆H A☆N A☆S H Iしようか（しましようか）」  
「うう……」

隣れ千川。別の世界線でモバコインの亡者となって全国のプロデューサーに課金を迫っているのが悪いんだ……。

等とつらつらと考えながら両手を合わせていると視界が少し暗く

なる。

「おっ。」

「おはようございます、遼哉さん」

「Доброе утро、おはようございます」

「お、おはよう」

す、すげえ気だ……。オラのじゆうべえはありそうだ……。てか、普通に怖いんですが。何なの、この凄みは。

「遼哉さん、さつきちひろさんと話してたことって……。本当ですか？」

「Да 本当に太らない、ですか？」

「あ、ああ」

言った後に気づいた。

『あつ、これは返答間違えましたね。お疲れ様でした』

「ついてきてくれますよね」

「私たちも、История……。お話、しましょう」

「……武内にメモ残してからでもいいっすかね？」

流星の2人も許してくれた。

「うああ……。疲れたあ……。ウボアアアア……」

結局2人が時間を忘れて話している所に、マスタートレーナーこと麗さんが夜叉の顔をしてレッスンに連行していった。どうやらレッスンの時間をとくに過ぎていたらしい。今日のレッスンは特別メニューへと変更になったようだ。2人の無事を祈っておく。いや、美波の方は変な気が起こらない位に疲れさせておいてくれ。お願い、シンデレレ……。トレーナー!!

「色々とお疲れ様です。浅葱さん」

「よお、武内。メモの内容はちゃんと伝わってくれたみたいで良かったよ」

「はい、ありがとうございました。そちらの方は……。災難でしたね」

プロジェクトルームに戻ってみると、武内がデスクで仕事をしている。メモは見事に仕事を果たしてくれたようだ。

「ま、今回は俺の失言が原因だしな。仕方が無いっちゃ仕方が無い」  
「そうですね。それに関してはフォローのしようがないですし。ところ  
ろで、その新田さんとアナスタシアさんの姿が見当たりませんが  
……」

「レッスンの時間を忘れて話し続けた結果、麗さんに強制連行された。  
今日のはスペシャルメニューだってよ」

「ああ……」

武内が気の毒そうな顔をする。その顔を見て俺は逆に笑ってし  
まった。武内のその反応は、さつき麗さんに2人がスペシャルメ  
ニューを宣告された時の俺の反応とまったく同じだった。ちなみに  
2人は絶望の淵に立たされたかのような顔をしていた。

その時、コンコンとノックの音が聞こえた。

「どーぞ」

「失礼します」

入ってきたのは千川と

「プロデューサーお疲れ様！」

「Pくんお疲れ！」

シンデレラプロジェクトの元気コンビ、みりあと莉嘉だ。

「おう、千川。お前生きてたか」

「ええ、なんとか。レッスンの時間になりそう所で気づいて開放され  
ましたから」

凜と楓は普通にレッスンに行ったらしい。まあ、当然と言えば当然  
のことなんだが。

「それで千川さん、このお2人と一緒だったのは……」

「偶然ですよ。私は専務からの書類をお2人に渡しに来たんです。そ  
の途中でこの2人と合流したんですよ」

「なるほどな」

千川から経緯を聴きながら、その専務からの書類を受け取り目を通  
す。

……ほうほう、そこはそうするつもりなのか。ってことはだ、ここ  
の予定がこうなる訳だな？それによって、あれがそういう風になる

と。

流石専務だな。如何せんそういう発想が俺らには無いからな。これでもいいよな？と、武内に目を向ければ、しっかりと頷いた。どうやら武内もこの計画で異存はないらしい。

「千川、専務に伝えてくれ。『了解した。今回のイベントは貴女の計画を基にして実施する。』ってな。間違ってもこの言葉のまままで伝えるなよ?。」

「もちろん。分かってますよ」

さて、そろそろ大人しく待っていたちみっこたちの相手をしてやらねば。

「で、お前らはどうしたんだ?」

「あのねあのね! みりあたちね! 礼子さんにお礼言えたんだよ!」

「レッスンが終わった後にちようど会ったんだ!」

「それでね、プロデューサーたちも疲れてるだろうと思って、これ持ってきたの!」

みりあたちの手にはチョコレート。仕事はしていないとはいえ確かに疲れてはいるので、糖分補給が出来るのはすごくありがたい。

「ありがとう2人とも」

礼を言いながら、チョコを口に入れる。チョコの甘さとアルコールの香りがマッチチしていて美味しい。さつきも思ったが流石礼子さんの酒に関する目はすごいな。……んん?

ハッとしてグツ……じゃなくてハッと武内の方を見てみると、俺のと同じチョコを莉嘉から受け取って口に入れてしまっていた。

「おい待て、それはダメだ!」

俺の突然の大声にみんながビクツとなる。最悪なことに、その衝撃で武内はチョコを飲み込んでしまった……

「やっちゃった……」

「浅葱くん、どうしたんですか?」

「千川いや、ちひろ……落ち着いて聴いてくれ。みりあと莉嘉が俺たちにくれたのはチョコレートだ」

「？　そうですね」

「俺たちがさっきまで食べてたな」

その言葉に目を見開くちひろ。横ではみりあと莉嘉が何の話か分からずに小さな頭を傾げている。

「そんな……こんなことって……」

「ボーツとしてんな！　彰にエマーゼンシーだ！　被害が拡大する前になんとしても！」

「は、はい！」

走って彰の元に助けを求めに行つたちひろを見ながら、ようやみりあが質問をぶつけてきた。

「プロデューサー、どうしたの？」

「みりあたちが持つてきたあの大人用のチョコにはアルコールが入つてるって書いてあつただろ？」

「だからあたしたち食べてないよ？」

「そら良かった。でも現状は全く良くない。俊輔……武内Pは酒に対しては策レベル、簡単に言うとすごい強いんだが、こういうウイスキーボンボンみたいなお菓子に混ぜられたアルコールには何故か滅法弱い。どれくらい弱いかというと、1個食べるだけでああなる」

改めて俊輔の方を見してみる。見た目には変わっているようには見えぬ。そのままジーツと見つめると……

「どうしたんだよ、3人して無言で俺を見つめてきて」

「え？」

「うつそ……」

みりあと莉嘉は信じられないといった様子。そりやそうだよな。前にあんだけ言つても結局抜けなかった敬語がアツサリと抜けて、まるで最初からそう呼んでくるんだから。

「みりあと莉嘉はお前のその状況に驚いてるんだよ」

「そうなのか？　別に変なところはないと思うんだけどなあ……みりあと莉嘉、なんか変か？」

「変だよ！」

「そうかあ？」

そうだよ(便乗)。この状態の俊輔は色々とめんどくさいから、この部屋から出さないように誰にも会わないように対処すれば大丈夫のはず!

「プロデューサーここにいるよね、入るよ?」

「ガツデムしぶりん!」

「うえ!? な、何?」

「おま、なんてタイミングの悪い……」

まさかのしぶりんカットイン。なんでこういう時に忠犬スキルを発動させるかね……

ほーら、俊輔が凜を視界に捉えちゃったじゃん。

「お、凜か。俺に何か用か?」

「え?」

固まった。ギギギと音が鳴りそうなきこちない動きで俺を見て、俊輔を指さす。

「本当に、プロデューサーなの?」

「残念ながら」

「おいおい、そんな怖い顔すんなよ。可愛い顔が勿体ないぞ?」

「うん、プロデューサーだね。大丈夫、最初から私は分かってたよ」

「しぶりいいいいいいいいいいいん!」

なんとということだ。しぶりんが堕ちてしまった。いや、ちひろと同じでとつくにオチてたこうなったのか。

「よし、プロジェクトルームに行くか」

「そうだね」

俺が考えごとをしている内に、和やかにプロジェクトルームに行ってしまった。大変なことになる!

……前言撤回。もう大変なことになってた。

俊輔の言動に訳が分からずポカーンとした顔をしている杏ときらり。ケーキを食べるフォークが止まって……いないかな子。相変わらるかよ。あ、驚いた顔ちゃんとしてるわ。驚きと混乱でパニックになって熊本弁が抜けている蘭子と、一緒にパニックになっている智絵里。それを元来の優等生っぷりで抑えようとするみく。ナイスだみ

く、めっちゃ助かる。

その混乱の中で凜はいそいそと何かを取り出した。てか婚姻届じゃねえか！ そのネタは諦めろよ！

「押して？」

「ったく、まだ諦めてなかったのかよ。前にもまだ結婚出来る歳じゃないって言つたら？」

「でもー！」

「その代わりに……」

そう言いながら顔を近づけたかと思えば、凜の額に優しくキスをした。

「今はこれで我慢な？」

「え……あ、あ……」

これには流石の凜もオーバーヒート。瞬く間に顔が真っ赤になったかと思えば、煙を出して意識を失った。というか、意外と初心なんだな。

そういえば卯月はどうしたんだって？ ああ……あいつなら名前と呼ばれたことに驚きすぎて立ったまま気絶したよ。邪魔になるから端っこの方に飾つといた。

「Pくんってばだいたーん！」

「それほどでもないだろ」

「いやいやいや、普段のみく達が知ってるPちゃんとは大違いすぎて頭がついていかにないや」

そう。これがこの酔ってる状態の俊輔のめんどくさい所だ。普段の俊輔がやたらとポエミーなのは周知のことだろうが——専務も同じ位にポエミーであることには触れてはいけないお約束だ——  
——酔った状態ではポエミーを拗らせ過ぎたのか、絵に描いたかのようなイケメンになる。

まったく、あんなのがサラツと出来るなんて凄いわ。え？ お前の『ふみふみ』も人のこと言えねえから？ ……マジか。

ドタドタと走ってくる音がする。ようやく彰が来たか！ ガチャツと扉を開ける。

「彰、よく来て」酔っ払ったアルティメットイケメン兄さんがいると聞いてきました！」お前は帰れ！」

そこに来たるは美城プロダクションが誇る最終決戦妹、武内絢香。これ以上この場を混沌の坩堝に落とし込まないでくれよ……？

「お、絢香じゃないか。よく来たな。ほら、おいで」

「兄さああああああああああああああああああん!!!」

俊輔に呼ばれた絢香は、全力疾走からのまさかのルパンダイブ（流石に服は着たまま）。女性とはいえ飛んできた絢香をしっかりと受け止める俊輔。プロデューサーたるもの、いやそれ以前に兄としてアイドルや妹をいかなる時でも受け止める（物理）ことが出来なければならぬ。

そのまま口にズギューンッ！しようとする絢香の口を人差し指で抑えて耳元で囁く。

「そ・れ・は……まだ、後のお楽しみに取っておこうな？」

「に、兄さん……そこそ、それって……」

絢香の質問に答えず、はむっと耳を甘噛み↓頬に口づけ↓微笑みながら頭をくしゃくしゃ撫でるの三連コンボ。これには流石のUMRさんもビツクリ。

そのコンボを喰らった張本人はというと、

「きゆう……」

見事にノックダウンしていた。この絢香という少女、俊輔に対してアプローチをして困らせるのが大好きで続けているが俊輔は鋼の精神で相手にしなかった。その結果、いざこんな風に相手にされて反撃を喰らうと恥ずかしくて耐えられないというこれまた面しrゴホン、難儀な弱点を持っている。

「その行動を分かってやってるんだから尚更タチが悪い」

「そういうなよ遼哉」

俺の言葉にニヤリと笑う。

「肉親に対してマウスストゥーマウスはまずいしな」

「そういうことだ」

「悪い、遅れた！」

ガチャツと扉を開けて入ってきたのは、今度こそようやく彰（with まゆ）だ。ちひろに、何故か奏まで一緒にいる。

「今度は彰か。今日はやけに客が多いな」

「俊輔がまさか……ここ2、3年は無かったよな。俊輔が自分から食べるなんてことはないだろうし……何があつたんだ？」

「俺らは知ってて気をつけてても、プロジェクトのメンバーはそんなこと知る由もないからな。つまりはそういうこつた」

彰の反応はまさしく（ノ、）アチャーという感じ。その彰の後ろで俊輔をまじまじと見つめる4つの眼。

「で、なんでお前らが着いてきてるわけ？ あつ、まゆの方は簡単に察しがつくので答えなくても結構です」

「そのあしらいは酷くないですか!？」

誰が他人の惚気なんぞ好んで聴かねばならんのか。どうせ彰が行くならまゆも行きます的な感じだろ？

「まあ……そうですけど」

「ほらみろ」

「あら、ならその質問は私に訊いているということよね」

「お前とまゆ以外に誰かが着いてきていない限りはそうだな」

小梅案件はやめて欲しい。割と切実に

「彼がやけに急いでいる様子でちひろさんに事情を訊いてみたら、あの時のプロデューサー絡みって。これは面白そうだと思って」

「お前、案外こういうドタバタ騒ぎ好きだったりする？」

「ええ。大好きよ」

志希とフレデリカ  
Cuの問題児2人の手綱を握っていられるんだから、嫌いなわけがないか……

あ、俊輔がこつち見た。これだと俊輔がまるで動物園のパンダみたいだ。武内PのPはパンダのPだった!？」

「君はあの時の……」

「ええ、お久しぶり。覚えていてくれたのね？」

奏はこつちを向いて一言。

「あの時結局最後まで頑なに敬語だった彼を一度見ているだけあつ

て、違和感がすごいわね……」

「プライベートで俺たちと呑む時は大体こんな感じでタメだぞ。まあ、酔ってないし性格は似ても似つかないんだけどな」

「あの時はありがとう、助かったよ。何かお礼がしたかったんだが、なかなか会う機会も無くてな……。いいタイミングだ。何か出来ることないか?」

「そうね……この前つれなくされたキス……なんてどう?」

「あつ……」

2人の声が重なった。もちろん俺と彰の2人だ。奏は何時もの様にからかい交じりで言っただらろうが……

「え、そんなのでいいのか? それじゃあ」

「んむっ!?!」

「え!?!」

酔っ払った時の俊輔はお前以上にキスをすることに抵抗が無いんだよ。

「そっか、ちひろは知らなかったのか。同期だと割と有名な話なんだけど、俊輔のキスはすごいぞ」

「なんでそんなこと知ってるのにや。まさか……」

「おい前川ア!」

ヤメロオ! (建前) ヤメロオ! (本音) 申し訳ないがそっち方面へのごじつけはNG。ホモと腐女子は帰って、どうぞ。

「みく、さくらんぼのヘタを……って話知ってるだろ?」

「もちろん。有名な話だよな」

「どうゆう話?」

「さくらんぼのヘタを口の中で結べると、キスが上手いって話があるんだよ」

「で、それがどうしたのにや? Pちゃんはそれがすぐに出来たとか?」

「いやまあ、確かに早いんだが……」

「あいつがな、それを試したら5秒後に口からキスをしてる人の像みたいなのが出てきたんだ」

『……は?』

わかるわ。すぐわかるわ。何言ってるのか分からないよな。

「いや本当に。どういう仕組みなのかは分からないが、ヘタが像になってたんだよ。中世ヨーロッパのダビデ像みたいな感じの……」

「実物を見たあの時の衝撃は凄まじかったな……立体的なんだぜ?つと、忘れる所だった」

奏はそのキスを受けるんだった。つてうおお!? ちよつと目を離していた隙に全年齢では見せられないレベルで奏が蕩けている!?

……エロい。これ以上状況を伝えようとするなら、文香の力を借りて官能小説を出版しなければなくなる。紳士諸君に少しサービスするとするなら、股間に悪い。これぐらいしか教えることが出来ない……。

みくも彰もナイスだ。流石にお子様たちにはこの光景は見せられないからな。

「はーっ……はーっ……んんっ、んはあ……」

「あー、悪い。なんか夢中になっちまった。ごめん……な」

へたり込んだ奏の頭を撫でながら俊輔の意識は途切れた。よかつた……割と早い時間で眠ってくれた。

「奏、大丈夫か?」

「大丈夫に……見えるかし……んんっ、ら?」

「いいや、全く。で、凄かったろ?」

「すごいなんてモノじゃなかったわ。口の中から身体を彼で染められているよな感覚……。もう忘れられそうにないわ」

さっきのキスの名残だけではない何かの理由で顔を紅潮させたまま唇を指でなぞり、指についた何かを舐めとる。

あー……これは厄介なライバル出現って感じかな。ちひろを見やれば、ライバルの出現を感じ取ったのか何やら燃えていた。

まあ、頑張れ。他人の恋愛に軽々しく口を出せるほど楽な恋愛状況に俺も彰もいないんだ。自分のことで結構手一杯なんだよ。相談くらいはいくらでも乗ってやるけどな。

ちなみに。俊輔は酔った時の記憶がガッツリ残るタイプだ。  
つまり？

「うおあああああああああああああああああ!!!」

「あんだけ華麗に酔っ払ってフリーダムにハツチャケてる記憶が残つてりやそら黒歴史だわなwww今回ののは特にwww」

「まあ、今日は思う存分呑めよ！ つつても、お前は普通に呑んだんじゃ全く潰れないんだけどなwww」

「くそ、今だけは自分のアルコール耐性が恨めしい！

つか、お前ら俺に追い討ちして愉しいか!」

「もちろん!」

「つの野郎共……無駄にイイ笑顔しやがって……」

『可愛い顔が勿体ないぞ?』

「うぐっ」

『まだ、後のお楽しみな?』

「ごはっ!」

「ブツハwww俺が来る前にそんなに面白い名言迷言生まれてたのかよwwwもつと早く向かうんだった!」

「くっそ、忘れてやる!」

「呑め呑め! 今日ぐらいは俺がおごってやらあ!」

「遼哉ってこういう所で何故か謎の優しさを見せるよな」

「俺も思った」

「おう、お前ら唐突なマジトーンやめーや」

## アイドルコミュ 『北条加蓮』

「久々の、んーっ……はあつ。休みだあ」

オフ。休日。休み。美城ではどれだけ忙しくても最低月に週1で休みを取ることが出来る。しかし、アイドルのプロデューサーともなれば休日出勤によってその休みを使うことは滅多にない。だが、あまりに休みを取らないと上司から強制的に休みを取らされる。というか、気づいたら自分のスケジュールが2、3日休みになっているのだった。美城は『有給？そんなもの取れると思ってるの？』なんて会社ではない、ホワイト企業なのだ。

察するに、専務とあの昼行灯の作業っぽい。有給を全然使っていないことがどうやらバレていたようで、俺、俊輔、彰の3人が一斉に休みにされていた。確かに俺達以外にもプロデューサーはたくさんいるが、1番働いていたのは間違いなく俺達だ。その俺達を一斉に休みのして大丈夫なのか……それ以前にあいつらを律せるのか……あー、でもあの2人のことだ。どうせ何かしらの策があるんだろう。考えんのも疲れた。

「ねっむ……せつかくの休みなんだし、昼頃までぐっすりスヤスヤ眠ってやろうか」

そうと決まればベットに潜り込んで……（ ☒ ω ☒ ） スヤア……？ 電話が鳴っている。なんだ、仕事関連でトラブルか？ だから心配だったんだよ……

「もしもし、朝霧ですけど。楓のダジャレが寒いのなら全スルー。ラブライカの暴走には麗さんの特別メニュー。杏には飴。蘭子には黒歴史を自ら掘り返す。美嘉には早苗さん。文香は……ないな。加蓮には救急車でよろしく」

「お兄ちゃん、今二度寝しようとしてたでしょ。お昼ぐらいまで」

「あれ、加蓮？ てか、なんで分かった」

電話の相手は加蓮はだった。

『お兄ちゃん、その家に盗聴器仕掛けられてるって知らなかったの？』

そこから全部聞こえてるんだよ』

「嘘だろ!? いつの間にも!」

サラツと不法侵入されてるってこと!?

「お前、それ犯罪じゃん……」

『何処かの偉い人の有名な言葉があるでしょ? 「バレなきや犯罪じゃないんですよ」 ってさ』

「それ何処ぞの這い寄る系のカオスな邪神さんの言葉なんだよなあ……」

『まあ、冗談はこれぐらいにしておいて……答え合わせはこの後でね』  
ピンポンと聞き慣れた我が家のインターホンの音が聞こえる。それはいい。それはいいんだ。何が問題かって、その音が電話の向こう側からも聞こえるステレオ状態だということだ。

「マジか」

嫌な予感……というよりも確信をもって扉を開ける。そこには予想通り、加蓮が私服姿で立っていた。

「やつほー、お兄ちゃん。アタシだよ。遊びに来たから」

「加蓮、お前仕事はどうしたんだ?」

「お兄ちゃんが今日からしばらく休みだって聞いて、休みにしてもらった。なんか全然止められなかったんだよね。んで、今日はアタシが来たの」

「ふーん、なるほどな。……ん?」

なんか聴き逃せない言葉があったような気がするんだけど。

「今日は?」

「うん、今日は」

「え、もしかしてそういうこと?」

「もしかしなくてもそういうことだよ」

そーなのかーと言いながらベットに潜り込もうとするも止められ  
てしまう。

「何だよ」

「寝ようとしらないの。買い物に付き合っ  
て欲しいなーって。あと、電

話のマニュアルみたいなのって何だったの?」

「それはデートのお誘い? 何って、お前らのマニュアルだよ」

「そういうことだね。え、アタシ救急車呼ばれてただけど」

「気にするな」

「気になるよ」

「まあまあ……じゃ、行くか」

「むう……行こっか」

「行こう」

「行こう」

そういうことになった。

「そういえばさ」

「ん?」

訊きそびれていたことがあったんだった。

「なんで俺が二度寝しようとしたの分かったんだ?」

「んく……なんとなくな。大体お兄ちゃんの考えは読めるしね」

「うっそだろ」

「いや、ホントホント。文香さんとか楓さんとかもたまに突然反応してるし」

「お前らは何? 俺に対するセンサーでも搭載されてるの?」

ア○サイトかな? 俺の行動に反応して自動でブレーキを（俺に）かけるのか。

「あー、割とそんな感じ。ピクってなるしね」

「マジか」

「マジで」

何でもないことを話しながら目的地もなく歩いていると、見覚えのある景色が目飛び込んできた。

「お、こっこって」

「アタシがスカウトを受けたところだよね」

ふと気になった。

「なあ、加蓮。今は楽しいか？」

「うん。あの時とは比べ物にならないくらいにね」

「最初はあんなのだったのにな」

「やめてよ、恥ずかしいな」

「すみません」

スカウトで街中を歩いていると、無性に目を惹かれる少女がいた。そこで、俺は少女に声をかけた。

「ナンパなら、どっかいつてよ。そーゆーの興味ないから」

「いや、俺もナンパに興味はないんだが」

おっと、素の口調が漏れてしまった。

「ん、違うの。どちら様？」

「私は芸能事務所のスカウトで、アイドルのプロデューサーをしています。自分です」

自分で思う。俺に敬語って似合わないな。

「芸能事務所のスカウト？ プロデューサー？」

「はい。貴女にはアイドルの素質があります」

「……初対面で流石に失礼かもだけどさ、アンタが敬語使ってるのすつごい違和感感じる。別に普通の口調でもいいよ？」

「いいんですか？」

「うん。アタシは別に気にしないし」

「じゃあ、遠慮なく」

ああ……現場とかも彼女みたいに楽に接することが出来ればいいのに……

「アイドルの素質があるって……アタシがアイドルに？」

ふうん……アタシがアイドルねー。昔、病院のテレビでよく見てたなー、アイドル番組。ふふっ」

そこまで言って、彼女の顔はふと歪んだ。まるで何か嫌なことを思い出したかのように。そしてその顔には何処か見覚えがあった。

「あ……ごめん。やっぱいいや。アイドルなんて……そんな夢みたいなこと、叶うわけないから。声かけてくれたのは嬉しいんだけどさ、アタシには無理だから」

「どうしてだ？」

「だってアタシ、いろいろ最低最悪でさ……。今はもう、人生諦めムード入ってるんだよね。だから、バイバイ。悪いけど他探して」

去って行く彼女を俺は追えなかった。諦めたわけではない。彼女の話が何故か耳から離れなかったからだ。まるで……そう、何処かで聞いたことがあるみたいだ。

『あの子ね、遼哉が会いに行けなくなってから色々重なって参っちゃったみたいでね。身体が良くなってからもなんか人生諦めちやったみたい。ビックリよね』

そうだ。何処かでも何も、まさにこの前聴いたばかりじゃないか。あんなことを言うのが何人もいてたまるか。

「今の加蓮じゃん……」

随分と可愛くなつたもんだ。というか、あの時の面影すっかり残ってたじゃんか。なんで気づかなかったよ俺。加蓮も加蓮で何故か俺に気づかなかったし。あ、俺メガネかけて髪型変えてるんだった。

加蓮と分かれば尚更引けないな。

数日後

「よお」

加蓮を発見した。

「またアンタ……しつこいな」

「粘り強いと言って欲しいね。で、考えてもらえたか？」

あくまであの時が初対面だと振る舞う。

「嫌って言ったたら嫌なんだってば！ アイドルなんて、なれるわけないでしょ!?! アタシはそんな人間じゃないんだから……」

「それでもアイドルにするのが、俺達プロデューサーの仕事なんだよ」  
「それでわざわざ会いに来るなんて……アンタ、相当な変わり者だよ  
ね」

「否定は出来ないな。するつもりもないけど」

同期にも同級生にも変人だと称されているしな。

「アタシの何がそんなに気に入ったの？ アタシのこと、何も知らないのに」

加蓮は俺の返事を聞かずに話し続ける。

「アタシ、加蓮っていうんだけど。小さい頃から病弱でさ。長く入院してたし、学校も休んでばっかで、友達も少なかったし。何かに、真面目に取り組んだこともなかった……。あ、でも何時も仲良くしてくれるお兄ちゃんみたいな人はいたな。大好きだったんだけど、色々忙しくなったみたいで会えなくなっただけだね」

「好きだったのか」

「うん。大好きだった。私の初恋」

面と向かって初恋だと言われた。めっちゃ恥ずかしいけど顔に出してはいけない。ここで顔を赤くしたら、ただのキモイヤツだぞ。

『だった』って普通の過去形なのか？ それとも、もう好きじゃない的な過去形なのか。まあ、分かん。

「アイドルになるなんて、テレビの中だけの夢物語。報われない努力なんて、するだけ無駄でしょ。それに、アタシは、その価値も素質も実力も、何もないから……。それとも、アンタがそんなアタシをアイドルにしてくれるの？ アタシ、本当に何もないよ。出来るっていうの？」

「アイドルの素質があるって言っただろ。それに、言ってたじゃないか。『私、病気が治ったらアイドルになる』ってさ」

「確かに言ってたけど、それは子供の時の話でしょ。……ん？ なん  
でアンタがそれ知ってるの？ それお兄ちゃんと話してた時の……」

メガネを外して紙を元に戻す。そして、あの時渡せていなかった名

刺を取り出す。

「改めて自己紹介を。美城プロダクションアイドル事業部 浅葱遼哉だ。やつほー加蓮、お兄ちゃんだぜ？」

「お兄ちゃん!？」

ドツキり大成功だぜ。

「いやあ、未だに俺のことを覚えていてくれたみたいで嬉しいよ。にしても面と向かって初恋だと言われるとは思わなかったけど」

「う……うわあああああああ!!!」

一気に顔が真っ赤に染まった。そして抱きついてくる。

「いや、なんで抱きつく。普通は離れないか？」

「再開できて嬉しいのと、めっちゃ恥ずかしいから顔を見られたくない。この2つを同時に満たせる。素晴らしいじゃん」

「さいですか」

手持ち無沙汰なので抱きついていている加蓮の頭を撫でながら待つ。すると、嬉しそうに顔を擦り付けてくる。猫かよ。いや、懐いてくれるのは普通に嬉しいんだけど、子供の頃より甘えてきてないか？

「……ふう、堪能した。オニイニウム補充完了だよ」

「なんだその新元素」

「お兄ちゃんからしか摂取することの出来ない栄養分。摂取方法はいろいろ。一番効率的なのはキス。というわけで、お兄ちゃん。アタシにキスしていいんだよ？」

「しません。補充完了って自分で言ってたじゃん。……お前そんなキヤラだった？

昔以前にさつきまでとは全然違うんだけど」

「大好きなお兄ちゃんの前では仕方の無いことなんだよ」

やだこの子怖い。

「そういえば大好き『だった』って言ってたけど……今は？」

「今は……もう」

「……そっか」

もう5年近く会えてなかったしな。恋心も冷めるわな……。ん？  
なんで俺ガツカリしてんの？

「会えなかった分まで思いっきり拗らせて愛してる。具体的に言うと、再開出来たことが嬉しすぎてもうこの場で押し倒しちやいたいレベルで愛してる」

「やっべ、逃げなきや」

「待って！ 嘘だから。押し倒すとかは流石に冗談だから！」

「マジで身の危険を感じた。ホモって噂のプロデューサーに目をつかわれた時と一緒のレベルで」

「ごめんってば。でも愛してるのは本気だから。」

「それは伝わった」

「文香さんは？ まだ付き合ってるの？」

「いや、お互い忙しくなってな。双方合意で別れた」

加蓮と向き合う。

「さて、加蓮。アイドルになる気は「あるある！」いくらなんでも変わり身が早すぎませんかねえ!？」

「諦めてたとはいえ夢だったし。それに、約束。私の夢を叶えてくれるんでしょ?。」

そう言って笑った加蓮の瞳には俺への絶対的な信頼しかなかった。………つたく、敵わないな。

「おう、任せろ。お前を立派なアイドルにしてやるよ」

「あの時の押し倒したって言われたことと変わり身の速さは今でも忘れられない」

「忘れて。いや、ホントに忘れて。お願いします、何でもしますから」

「ん？ 今、何でもするって言ったよね?。」

「んじや、麗さんに特別メニュー頼んでおくね」

流れるように土下座をしようとしていたので引き止める。

「街中で土下座するくらいに嫌か」

「だって、特別メニユーなんて言うから！」

「うん、それに関しては正直すまんかった」

加蓮と歩く。

「それにしてもお兄ちゃん」

「ん？」

「今更なんだけど。約束、覚えててくれたんだね」

「……ああ」

その約束を思い出す。

「色々と進路で悩んでた時にお前との約束を思い出してな。言い方は悪く聴こえるけど、ちょうど良かったんだ」

「それでも嬉しいよ」

左手に温もりを感じる。見なくてもわかる。原因なんて隣で歩いている彼女以外ありえないから。加蓮の存在を確かめるようにギュツと握り返す。加蓮は、何時も凜や奈緒達と一緒にいる時に見せているものとは違う、柔らかい笑顔をしていた。

「ありがとうお兄ちゃん。夢、叶えてくれて」

「ばーか」

空いている右手で加蓮の頭を撫でる。

「まだ終わってねーよ。これからもだろ？」

「……うん！」

『ねえ、お兄ちゃん。私ね、病院が治ったらアイドルになりたいの』  
『そっか……じゃあ俺はプロデューサーになって加蓮をアイドルにしてやるよ』

『本当に？』

『ああ。約束する』

『約束だよ？ 絶対プロデューサーになって私をアイドルにしてね？』

貴方は本当にアタシを迎えに来てくれた。アタシのプロデューサー。まだ、みんなのプロデューサーだけど。何時かは……何時かは、アタシだけのプロデューサーになってくれる？ ねえ、お兄ちゃん。

## アイドルコミュ 『緒方智絵里』

ピピピと目覚ましの音がする。鳴り続ける目覚ましを止めて未だ睡眠への手招きをし続けているベッドから身体を起こす。現在、時刻は午前6時。寝起きでボーッとする頭をユラユラと揺らしながら洗面所に辿り着き、冷たい水で顔を洗った。

「ふう……」

顔を洗ったおかげで目も覚めたことだし、朝食の用意をする。朝食はその日の気分によってパンになったりご飯になったりする。今日はパンを食べたい気分だ。

食パンをトースターにセット。焼いている間にフライパンでベーコンを焼く。いい具合に焼き上がったベーコンを皿に移し、オムレツを作る。

チンツとトースターの音がする。トーストにバターを塗り、ベーコンとオムレツと同じ皿に乗せる。そして、予め淹れておいた珈琲と一緒にテーブルに運んで準備完了。席に座る。

「いただきます」

まずはオムレツに手をつける。……うん、いつも通り出来ている。ベーコンも美味しい。ある程度食べ進めた所で、忘れないうちにテレビをつけて今日の天気を確認しておく。今日は快晴。雨の心配もないので洗濯日和になりそう。なら、色々と纏めて洗濯してしまおうか。

さて、今日のスケジュールは……と思いつながらスマホの電源を入れて待ち受けが目に映った瞬間。その待ち受けは、俺をイラッとさせたと共にあることを思い出させた。だが、ひとまずは落ち着こう。クールになるんだ。そう、K O O Lに。珈琲を飲もうじゃないか。落ち着いている。落ち着いているとも。珈琲のカップが震えているのは錯覚だ。

……待ち受け画面はこうだ。

『待ち受け画面から失礼するゾ（謝罪）休みなのに普段通り仕事しようとするなんて律儀スギイ！ 自分草いいつすか？ こうでもしな

きや仕事に行きそうだから、こうやって待ち受け画面にぶち込んでやったぜ。許してください！ オナシヤ ス！ なんでもしますから！（なんでもするとは言っていない）』

失礼するゾくbotのテンプレを使った煽り文だった。正直スマホを投げてるかと思った。だが、ありがたいとは思わないまでもこれのおかげで現状を思い出すことが出来た。

「そっか……休みなんだ……」

普段通りの時間に起きてしまったのは習慣だろう。この時間に起きるのだと、もう身体が覚えてしまっているんだ。

「せっかくの休みだったんだし、今日ぐらいはもう少し寝てればよかったのに」

まあ、起きてしまったものはしょうがない。休日に動ける時間が多いと考えれば幸せだ。この際、休日にやれることをやろう。

「それでは、まずはあのイベントについての書類作成を……って、いやいや」

休みなんだってば。何が悲しくて休みの日にまで仕事をしなければいけないのか。確かにあのイベントが大事ではあるが。それにしたってもつとこう……休みの日にすることが色々あるだろう。例えば……例えば……あれ？

「……俺って、休みの日に何してたんだっけ」

武内駿輔 25歳 あまりの仕事漬けの日々で、休みに自分がやっていたことを忘れる。

まずくないか。いや、自分の趣味とか忘れてないし……セーフセーフ。

「ん？ ならその趣味をすればいいのか」

洗濯などの諸々のやらなければいけないことを終わらせ、でかける準備をする。軍資金は……これぐらいでいいか。必要な物をちゃんと用意したかも確認済みだ。

「よし、行くか」

「あああああああああ……フルコン逃したあ……。やっぱり鈍つてるな。前はラストの単一乱打もしつかり突破出来てただけだなあ」

俊輔がやっていたのは、通称洗濯機とも呼ばれる音ゲーだ。レート12・35。仕事で遠ざかる前は大分やり込んでいたので、このレートの高さだ。

お分かりの通り、彼はゲームセンターにいた。仕事が忙しくなる前、休みを普通にとっていた時などは休みの日や仕事終わりによく通っていたのだが、今西曰く『無口な車輪』になりかけてからは遠ざかっていた。だから今日は、せつかくの久々の休み。ストレス発散も兼ねて思いつきり楽しもうという心づもりだった。

ところで、音ゲーは下手すれば発散するはずのストレスが倍率ドントになる気がするのだが。本当にストレス発散になるのだろうか。特に今回の俊輔のように曲のラストで微妙にタイミングがずれてG.O.O.Dでフルコンを逃した時とか。作者はキレル（メタ発言）。

「ん〜……感覚戻ってきたかな。1回ma○ma:iは終わりにして、別のやるか」

「d a i s u k e……ふう。疲れた。やっぱりd a i s u k eキツいな……これぐらいにして……」

「あつ……」

ダン○ボで世界を救う45。な雷☆なうを踊り終えた俊輔が振り返くとそこには……。

「緒方さん……?」

「あ……あの、えつと……こんにちは」

「あ、はい。こんにちは……」

シンデレラプロジェクトの1人。C.Iの緒方智絵里がそこにいた。

「あの……緒方さんは何故ここに?」

さつきまで素の口調だったのにも関わらず智絵里の出会った途端敬語になる辺り、彼も筋金入りだ。

(何時もの口調に戻っちゃった……)

彼女は不満そうだが。

「今日はオフだったので……太鼓を叩きに来たんです」

「太鼓でしたらあちらですが……」

ダン○ボや太鼓などの音ゲーは同じ区画にあるが、置いてある場所は逆方向だ。

「あの……えっと……折角だから色々見て回ろうかな、と思って」「そうでしたか」

嘘だ。太鼓を叩きに来たのは嘘ではないが、実際は俊輔を尾けていた。というのも、彼を見つけたのは本当に偶然だった。何時ものように太鼓を叩こうとしていた智絵里はma○maiの前を通り過ぎようとした。その時だ。

『リハビリのMaster……どれがいいか……』

その声にグルンツと音がしそうな勢いで振り向いた。その声には聞き覚えが……というよりも毎日聞いている。あんな低音ボイス、聞き間違えるはずもない。そして、予想通りそこには自分のプロデューサーである武内Pがいた。敬語が抜けた完全オフ状態の彼が。

(まさか、プロデューサーさんがこんなところにいるなんて……。休みにしたっていうのは聴いてたけど、会うなんて思わなかった。あの時も思ったけど……敬語じゃないプロデューサーさんって、浅葱プロデューサーさんみたいな雰囲気……)

何時ものプロデューサーはクマのような温厚な印象だが、今の彼は素の男の子という感じだ。人見知りをする智絵里からすれば、それは最も苦手とするタイプだ。しかし、彼には恐怖を感じなかった。心根にある優しさが滲み出ているのもあるが、最たる理由は智絵里がプロデューサーである俊輔に心を開き、信頼していることだろう。

(プロデューサーさんもゲームとかやるんだ……)

そこで智絵里は自分たちがプロデューサーのプライベートなことを何も知らないことに気がついた。

(プロデューサーさんのこと、もっと知れるかも……)

そこから彼女は追跡者になり、ここで気づかれたのだ。

「プロデューサーさんもゲームとか、やるんですね」

「はい。昔はよく通っていましたから……」

俊輔は普段の癖で右手を首に回す。

「緒方さんは……太鼓はもうやられたのですか？」

「え？ いえ、まだですけど……」

智絵里は俊輔の質問の意図が分からず、頭に？が浮かんでいる。

「私もこれからやろうと思っていた所でしたので……良かったら、ご

一緒しませんか？」

まさかのお誘いだった。

「え、あ……は、はい」

智絵里はその誘いに乗った。他のみんなの知らないプロデューサーの姿を見ることが出来ると思ったからだ。

（ごめんね、凜ちゃん。卯月ちゃん。邪魔とかする訳じゃないから）

心の中で謝りながらプロデューサーと並んで太鼓の方へ歩いていった。

「!？」

「え、急にどうしたのさ。しまむー、しぶりん」

何処かの事務所のレッスルームでレッスンをしていた3人組のうち、2人が弾かれたように顔を上げた。

「出番を取られた気がします！ 私シンデレラガールなのに！」

「そんなこと言ったら私もそうだよ。誰かがプロデューサーと美味しい状況になってる。行って確認しなきゃ」

「ちよつとー……第六感はいいとしても、次元を歪めようとするのやめなよしぶりーん」

もはや慣れたちゃんみおが冷静にツッコむ。

「未央もこれに冷静にツッコむようになったよね」

呆れ顔をする凜に「あははははは……」と困ったように笑う卯月。

「未央ちゃんには余裕があるのだよ」

「やっぱり彼氏が出来たから？」

「そうそう……って、何言わせるのしぶりん！」  
NGは仲良しである。

「プロデューサーさんもマイバチ持つてるんですね」

「はい。やはり手に馴染む方がやりやすいので」

「私も、そんな感じですよ」

えへへ、と笑う智絵里。

「緒方さんのバチは軽いですね」

「あまり重いとやりづらくて……プロデューサーさんのは先端に重心を置いてるんですね」

「はい。色々試した結果、これが一番やりやすかったのよ」

「プロデューサーさん、あんなに上手だなんて思いませんでした」

「緒方さんも1度プレイを見たことがありましたが、流石の腕前ですね」

太鼓を数プレイやった後、俊輔と智絵里はゲームセンターをブラブラと目的もなく歩いていった。やはり、共通の趣味があるというのは大きいのか2人の距離は相当近くなっていた。

「あつ……」

「どうか……しましたか？」

「な、なんでもないですよ」

ふと、声を漏らして智絵里が立ち止まった。声をかけるとまた歩か、何かに気を取られたようだった。智絵里の見ていた方を見ると……

「クレインゲームですか？」

「えつと……はい」

「何か気になったものがあるんですね？」

「あれ、なんですよ……」

智絵里が指を指した方へ行く。

「クマ……ですか」

「……はい」

少し大きめのクマのぬいぐるみだった。色は黒で、愛嬌のある顔ではなく、無愛想とも言える目付きが若干鋭い顔をしていた。それはまるで……

「ちよつと……プロデューサーさんに似てるなって、思つて……」

そう。俊輔そっくりのクマだった。

「ちよつと気になっただけですから……」

そう言うが、俊輔は見逃していなかった。智絵里が、あのぬいぐるみを見ている時はC Iの2人と一緒にいるようなキラキラした目をしていたのだ。

俊輔は無言で1000円玉を入れた。

「プロデューサーさん？」

慣れた手つきでクレーンを動かし、普通に取ろうとする。しかし、アームの力はそこまで強くなくポトリと落ちてしまう。

「ふむ……なるほどな」

「あの……」

「まあ、見てなつて」

続けて1000円玉を投入する。今度は掴もうとはせず、アームでぬいぐるみを倒した。俊輔は気づいていない。集中のあまりに智絵里に対して敬語を使っていないことを。

もう1度1000円玉を投入する。アームを倒したぬいぐるみの首元のあるタグに引っ掛け、見事にゲットする。

「ほら」

「あ、ありがとうございます……」

「まあ、なんというか……今日はわざわざ付き合ってくれてありがとうっていうお礼だよ」

「プロデューサーさん……その、敬語が……」

「え？ ぬ、抜けてましたか？」

「は、はい」

「……」

困った顔をして手を首に回す。

「今の緒方さんは……プライベートで遼哉、浅葱さんたちと接するよ  
うな感覚でしたので……知らないうちに抜けてしまっていたみたい  
ですね……」

「そう……だったんですか」

智絵里は嬉しかった。あれだけやっても取れなかった……酔っ  
払った時以外は絶対に敬語だったプロデューサーが、自分に対しては  
自然に敬語が取れたのだ。

「プロデューサーさん」

「はい……なんでしよう？」

「敬語……私の時だけ取ることで出来ませんか？」

「それは……」

「普段のお仕事は何時もみたいに敬語は取れないだろうけど、今みた  
いにゲームをしてる時は……プロデューサーとアイドルじゃなくて、  
同じ趣味のお友達として……接してくれませんか？」

智絵里は勇気を出した。断られる前提で持ちかけた。

「……分かりました。その代わり、緒方さんも私を『プロデューサーさ  
ん』以外で呼んでください」

「えっ……」

「私はプロデューサーではなく、お友達ですから」

「は、はい！」

智絵里の提案は、未だにアイドルとの距離を測りかねていた俊輔に  
とって、ありがたいものだった。普段の彼女からは、未だに怖がられ  
ていると思いい距離を感じた。しかし、今の彼女と一緒にいるとき  
言ったとおり遼哉たちと同じ雰囲気に見えるのだ。その証拠に、自然  
と敬語が抜けていた。

「じゃ、じゃあ……俊輔さん……やっぱり武内にさせてください……」

「名前でもよかったですか……」

「恥ずかしいです……」

「そうですか……じゃあ、私……俺は智絵里かな」

「呼び慣れないです……」

名前を呼ばれて顔を赤らめる智絵里。

「基本名前呼びだから、なれて欲しい」

「は、はい。武内さんが名前で呼ぶのは私だけ……ですから」

（今のところはですけど。多分……凜ちゃんも卯月ちゃんも……あ、あと奏さんもあつという間に距離を詰めて名前で呼ぶようになるんだらうな……）

「智絵里？」

「な、なんでもないです。そ、そうだ。プロデュ……武内さんはさつき  
のダンスの……得意なんですよね」

「まあ、得意といえば得意ですけど……」

「私もあれ気になって……私でも、出来ますか？」

「智絵里はアイドルなんだし、コツを掴めばすぐ上手くなると思うよ。  
例えば……」

仲良く話しながら、ダン○ボの方に2人は歩いていった。その姿は  
アイドルとプロデューサーではなく、同じ趣味を持った友達そのもの  
だった。

## アイドルコミュ 『向井拓海』

物音がする。そのおかげで目が覚めた。方向的に台所。誰かが台所で何かをしている。俺は一人暮らしだし、誰かが訪ねてきたのだろうか。いやでも、鍵閉めてるし。……誰だ？

考えているとコンコンツと部屋の扉をノックする音が。

「あきらく〜？」

「……あい」

「開けるぞ。ん、目エ覚めたか？」

その声と扉を開けて見えた顔でホツとする。

「ああ。おはよう、拓海」

「おう。おはよう、彰」

来ていたのは、美城ウチのアイドル、向井拓海だった。

「飯ももうすぐ出来上がるから、用意してこいよ」

「んー……了解」

顔を洗って歯を磨いて……と、一連の流れを終わらせて席に座る。

「いただきます」

最初に卵焼きに手をつける。うん……

「今日は薄めの味付けだな。出汁の方使ったのか？」

「ああ。今日はお前休みだし、そっちの方がいいかと思ってよ。それとも、何時もみたいに砂糖使った甘めのヤツの方がよかったか？」

「いや、これで大丈夫。昨日は次の日が休みってのが分かっててぐっすり早めに寝てたから、何時ものだと口ん中甘ったるくなってたかも。助かるよ」

「へへっ……だろ？」

拓海は得意そうに笑った。

「で、味噌汁はいつも通りと」

「お前が合わせ味噌派ってのは嫌ってほど聞かされたからな」

「失敬な。まるで俺が『合わせ味噌以外は認められない』みたいな過激派みたいじゃないか」

俺は、『合わせ味噌があるなら基本的に合わせを使ってほしい。あ、

でも別に赤も白も嫌いだってわけじゃないからね?』な温厚派だ。

「別にそこまで言ってねえよ」

「知ってる」

「ったく……」

怒るのではなく、しょうがないなという風に拓海は笑った。それからは黙々とご飯を食べていく。俺たちの食事は何時も特にこれといった用事もなければ、静かなまま進んでいくのだ。

「ごちそうさま」

「ん。食器は」

「俺がやるよ。用意は拓海がやったんだから、片付けは大人しく座って待ってな」

「気にしないでいいって何時も言ってるだろ?」

「諦めてくれとも何時も言ってる」

……

「ふふっ」

堪えきれずに2人してにへらっと笑う。今まで幾度となく朝の度に行われてきたやりとりだ。このやり取りがあるだけでなんとなくほっとする。こう……なんかお互い分かり合えてるって感じで。

「なんか恥ずかしいこと考えてるだろ」

「べっつに〜?」

「……嘘だな。まあ、いいけどよ」

相変わらずそういうことには感がいいこと。拓海はリビングに置いている大きめのソファに腰を下ろす。

「……………」

「〜♪」

耳に入るのは食器を洗う時の水道から出る水の音と、上機嫌な拓海の鼻歌。聴こうと耳に意識を集中させると、この前のライブで炎陣のメンバーと歌った『純情Mindnight伝説』だ。……可愛い。上機嫌になると鼻歌とか可愛すぎだろ。

後片付けも終了し、濡れた手をタオルで拭いてから、拓海がいるソファに行く。

「終わったのか?」

「終わったよ」

ポフンと拓海の隣に座る。

「……」

……横から視線を感じる。視線の方を見れば、拓海がすごい目でこっちを見ていた。何事?

「え、隣に座っちゃダメだった?」

「そうじゃねえよ」

ん。と言いながら、ホットパンツのため空気に晒されている自分の太股をポンポンと叩いた。……え、マジで?

「いいの?」

「ダメだったらピールしねえつつの」

悪態を吐きながらも、その顔は赤くなっていた。

「恥ずかしいならやらなきゃいいのに」

「うるせえ! やんのかやんねーのか、どっちにすんだよ!」

「じゃあ、遠慮なく」

「最初から素直にそう言やあいじゃねえかよ……。ほら、どーぞ」  
拓海のシミ一つない綺麗な太股に頭を預ける。いわゆる、ひざ枕と

いうやつだ。

「スベスベだよなあ」

「そりゃ、手入れしてるからな。……っつか、撫で回すな!」

「嫌だった?」

「別に嫌ってほどじゃないけどくすぐったい」

「なるほど。……ふう」

「ひゃっ!? 息かけられたら普通にくすぐったいっての! あーもう、こっちに顔向けろ!」

グイッと体勢を変えられる。横を向いていた顔が拓海を仰ぐように上を向く。……ひざ枕の状態でこの体勢になれば、当然否応なしに視界に入ってしまうモノがある。

「確かに息はかからなくてくすぐったくはないだろうけど……この体勢はいいのか？」

「何がだよ」

「いや……その……ほら、胸がさ」

「あー……」

そう、胸だ。乳房、おっぱい、おもち。呼び方は色々ある。拓海のバストは雫の105に次いで、2番目に大きい驚きの95。その双丘が俺の視界の半分ほどを占めている。なかなかにすごい。

ちなみに雫のあれはもう、何かのバグだと思う。何処かで見たが、計算すると雫はKカップらしい。なんだそれ。

「他のヤツなら恥ずかしさとかイライラとかでぶん殴るけどな、彰なら別に構わねえよ」

「なんで？」

「だってお前、大きい胸好きだろ？」

「いや……まあ……その……好きだけどさ」

やっぱり男としては、大きい胸には何か惹かれるモノがあるというか何というか。

「昔はこんなモノ、鬱陶しいだけでなんでアタシにはこんなモノがついてんだって思ったこともある。無駄に視線も集めちゃうし、喧嘩も邪魔にもなるしな。でも、今は彰が喜んでくれる。……それならこの胸でよかったなって思えるからよ」

俺の頭を何故か撫でながらそう言う拓海の顔は穏やかで。本当に愛おしいものを見ている……そういう目だった。それが自分に向けられているということが何だか無性に恥ずかしくて、顔を背けた。

「目エ逸らすなっの」

戻された。

「つーか、触ったことだっただってあるんだから、んなに恥ずかしがることでもねーだろ？　そもそも恥ずかしがるのはアタシだろ」

「それとこれとは話が別。男つてのは欲望には単純な癖して、心は常に思春期で恥ずかしがり屋なモンなんだよ」

「そんなもんなのか？」

「そんなもんなんじゃねー？ 知らんけど」

叩かれた。避けようと思えば避けられたが、身体の力は抜けきって拓海の柔らかい太股に全て預けているので動こうという気が全く起きなかつたので甘んじて叩かれた。

「今日はお前休みだろ、ちよつと付き合ってくれてよ」

「そういや、サラツと2人でくつついてて和んでたけど拓海も休みなんだよな？」

「ああ。お前が久々に休みだつて聞いてたからな。休み取つたんだよ。まさか申請が通るとは思わなかつたけどよ」

「多分、今西さんの仕業だろうなあ……」

拓海の独白にうちの部長のなんとも言えない笑顔を思い浮かべながら、力の抜けきつた身体に力を入れて起き上がる。拓海は起き上がった俺を見て、？という他の奴には絶対に見せないキョトンとした顔をする。可愛い。

「もういいのか？」

「可愛い顔してんなよ」

と言いながら、拓海がしたように太股をポポンと叩く。その仕草にキラッと拓海が目が輝く。

「交代するだろ？」

「するー！」

ポフンツと俺の太股に頭を下ろした。俺がサラサラな髪の毛を撫でると猫みたい気持ちよさそうに目を細める。

拓海は元々特攻隊長だし、見た目からガサツそうに思われるが家事もしつかりこなせる可愛い女の子だ。

「彰にひざ枕するのも嫌いじゃねーけど、やっぱり彰にしてもらう方がいいよなあ〜」

「男のかつたいひざ枕の何がいいのやら……」

「分かってねーなく。『男の』ひざ枕がいいんじゃないやなくて、『彰の』ひざ枕がいいんだよ。そこ勘違いするなよ？ こうしてると……包まれるっつーかなんっつーか……安心するんだよ」

「すっごい恥ずかしいんだけど」

「きつきの仕返しだ」

「さいですか」

拓海の頭を撫でながら、ふと思う。よくもまあ、ここまでの関係になっただものだ。

帰り際に見かけたタイマンでのステゴロ。その光景に懐かしさを覚えて眺めていると、片方の特攻服を着た少女の立ち振る舞いにおっ？と既視感を覚えた。それに加えて目を惹く容姿と存在感。よし、と思い勝利した片方の少女……まあ、拓海を怪我をしていたからという名目で事務所に問答無用で拉……連k……連れていき手当した後、にスカウトした。

チャラチャラした衣装は着ないと言っていたが、実は可愛い物が好きだったりすることが判明したり（着ないと言っていたのは、自分には似合わないかと思っていただけし恥ずかしかったから。すごい可愛かった）。

とある事件の折に俺の過去が拓海にバレてしまい、しばらく敬語で話されたり。いやあ……あの時は未だに腕は鈍ってねーんだなって思ったよな。スーツっていうすっげえ動きにくい服装だったのに、あの頃の髪型に戻すだけでスイッチが入るとは。

「こうやってずっとダレてるけど、買い物行くんじゃないのか？」

「昼からでいいだろ。今はこうやって彰とくつついてたいんだよ。ダメか？」

「拓海の買い物なんだから、拓海の好きなタイミングでいいよ。それまではこうしよう」

「ありがとな」

「どーいたしまして」

そこからは特筆すべきこともなく。とりとめのないことを話しながら、ただただ時間が過ぎていった。

「これとかどうよ?」

「お、結構似合ってる。たださっきのと比べると、さっきの方が俺は好みかな」

「じゃ、そっちにするか」

「買い物だ。今は拓海の服を見て回っている。」

「そうだ。1回俺の選ぶ服着てみてくれない?」

「変なの選ぶつもりじゃねーだろうな?」

「違う違う。拓海って大人しめの服を着たらどうかなって思ってたさ」

「考えたこともなかったな……」

「だろ? ってことで、選んだ物がこちらです」

「早くねーか!」

「ずっとスタンバってました」

などと言いながらその服を持って試着室に入っていく拓海。イメージを崩さない程度にイメージを変えてみようと思んだんだが……どうだろうか

「……どうだ?」

「おおっ、予想以上!」

特に凝った物は選んでいない。頭の中で思い浮かべたのは、藍子だ。薄いピンクのワンピースにスカイブルーのカーディガン。シンプルだ。というか、あんまり凝ったデザインは俺には考えられない。「着てみてどう?」

「アタシがこんなの着て似合うかって思ったけど、結構好きだな。……恥ずかしいけど」

「じゃあ、今日はそれを着てこう。俺の奢りな」

「は!? 嘘だろ?」

「残念、本気でした。すいません、今着てるのそのままで行くので願

いします。あと、これとこれと……」

さつき拓海が選んでた服と今の服をまとめて購入した。

「誰もあの向井拓海がこんな乙女な大人しい服着てるだなんて思わないだろう？」

「それでお前……」

「趣味だけでここまでするわけないだろう？ 着て欲しかったのは、俺個人の考えだけだな」

メディアに出ている『向井拓海』のキャラはヤンキー上等。でも、そんな「向井拓海」がこんな可愛い服で出歩いているとは思えない。一種の変装だ。

「まあ、これなら堂々と歩けるな」

「だろ？」

店を出る。凝った変装をしてないせいか、えらく上機嫌だ。

「なあ、久々に手繋いでもいいか？」

「ホントに久々だな。OK、繋ごうか」

手を繋ぐとにつと笑った。

「最近どうよ？」

「この前の炎陣のライブは楽しかったし、順調そのものだな」

「そりやよかった。炎陣のメンバーとはあれからも仲良くしてるんだろ？」

「ああ。元々亜季以外のメンバーとはつるんでたし、亜季ともすぐ仲良くなったしな」

「亜季の兄貴とは実は昔馴染みでな？ 中学、高校……と一緒に馬鹿やってた仲間なんだよ」

「中学、高校……ってことは、大和って『スサノオのヤマト』か!？」

「あー……やっぱその名前知ってたか」

亜季の兄貴である大和武蔵の高校時代のアダ名が『スサノオのヤマト』。もう一つは『47cm砲の武蔵』だったけか。武蔵はこの名前でもう一人の『阿修羅のキアラ』と一緒にヤンキーたちの恐れられていた。

「まさかこんな近くに伝説の2人がいるなんて……」

「案外世の中って狭いもんだろ？」

「片方がアタシをスカウトするくらいだしな」

「バレた時はどうしようかと思ったね」

「あれ、プロデューサー」

声をかけられた。後ろを見ると、

「よお」

「あ、ホントにプロデューサーだ」

夏樹と李衣菜だった。

「2人ともどうしたんだ？ デートか？」

「いや、ギターとか色々見て回ってたんだよ」

「そうそう。そういう所、なつきちならいっぱい知ってるからさ。そ

ういえば、手を繋いでるけどそっちこそデートなの？」

「これ、デートって呼んでいいもんな」

「アタシ的にはデートって呼んでもいいと思うけど」

「…………え？」

「そっか。んじゃ、デートです」

夏樹と李衣菜がポカーンとした顔で見ているのは俺ではなくその横。

「た……拓海なのか？」

「んだよ、気づかなかったのかよ」

「だ、だってその格好……」

「あー……そっか忘れてた。着替えてたんだったよな」

「気づかなくて当然か」

まさか同業である2人までも欺くとは……

「俺が選んだんだが……」

「びっくりだよプロデューサー！ 全然気づかなかった！」

「随分と印象変わるもんだな……」

「おい……あんまり見られると恥ずかしいっつーの」

「ご、ごめん」

「あんまり可愛いかったからな、悪い」

近くで見っていた2人に流石に恥ずかしかったみたいだ。真っ赤。

「というわけで、今の俺達はデート中だ」

「デートって……2人とも付き合ってたの!？」

「……もつともな質問だ。だが……」

「いや、アタシたちは付き合ってるわけじゃねーよ」

「嘘だろ？」

「これが本当なんだな」

よく一緒にいて、半同棲状態になってるだけで付き合ってるわけじゃないんだよ。

「そうか……おっと、時間がもうないな」

「なんかあるのか？」

「アタシたちはこの後収録控えてるんだよ。そういうわけで、もう行くな」

「そうか、俺はしばらくオフだから色々フリーダムな奴と一緒にいたら、それとなく牽制してくれるとありがたい」

「ははっ……まあ、やるだけやるよ。それじゃあな」

「ああ、頑張れよ。李衣菜もな」

「もつちろん！ ロックにやるよ！」

そう言って2人と俺達は別れた。

「まあ、この関係だったら付き合ってると思われるよなあ」

「アタシらの関係は微妙だからなー」

「付き合ってみるか？」

「お前、自分の状況分かってて言ってるか？」

「でも、拓海の方がまゆとか志希とかより俺のこと想ってるだろ？」

「それは負けるつもりはないな。何なら、全国生放送の場で公開告白出来るぞ」

「やめてくれ」

「それぐらい想ってるってこった。でも今は、この関係が1番心地いいから」

繋いでいる手の力がギュッと強くなった

「ねえ、なつきち」

「言うな、だりー。言いたいことはわかってる」

「絶対にあれは付き合ってる」

「だってあんな優しい目の拓海ちゃん私見たことないよ!?!」

「ああ……自覚はないだろうけど、もうなんか……すごかったよな」

「あれは完全に恋してる目だった」

「まさか拓海がねえ……」

「なんでプロデューサーなんだろう？ いや、悪いってことじゃないけどさ」

「なんかきつかけがあっただんどうな……」

## アイドルコミュ 『本田未央』

ワーカーホリックとは恐ろしい物で、気づけば無意識のうちに今度のイベントについてのファイルを手にとっていた。他のことをしていないと、自分でも気づかないうちに資料が何かを作り終えてしまっただろう。

「今日もゲーセン行くか……？ いやいや、休みだからといって二日連続でゲーセンに入り浸る社会人つてのもどうなんだ」

いきなりのクス発言すぎる。いや、行ってる人もいるんだろうが、個人的にはキツイ。しかし、暇すぎるのがいけない。好奇心は猫を殺し、退屈は人を殺すのだ。

「なら、街に出て調査でもするか？ 仕事も関わってるのがなんとも言えないな……まあ、個人的に気になることもあるし。いいか」

途中で買い物もすれば一石二鳥だ。昼も外で食べることにしよう。新しい店を発掘してもいいかもしれない。美味しいハンバーグが食べたい所だ。

「ん？」

最近の世間のニーズを調べる名目で街に出て散策という名の散歩をしていると、見知った顔が街灯に寄り掛かって佇んでいた。

「あ、プロデューサーさん！」

「プライベートですので、名前で呼んでもらって構いませんよ」

「そうですか。では、改めて。お久しぶりです、武内さん」

軽く頭を下げる好青年。高校一年で、既にしっかりと身体が出来上がっている。長身というほどではないが、しっかりと身長もある。いい身体をしている。おっと、いけない。仕事の癖がこんな所にも出てしまった。

「はい。お久しぶりです、長谷川さん」

彼は別にアイドルというわけではない、一般人だ。何故一般人であるこの彼と面識があるのかといえば、ある共通の知り合いがいるから

だ。

「まとい、お待たせ……ってプロデューサー!？」

「おはようございます、本田さん」

「お、おはよう。なんでプロデューサーがまといと一緒にいるの？」

「ここで未央を待ってた時に、偶然会ったんだ」

「はい。そこで少し世間話を」

「そうだったんだ」

本田未央。俺の担当、美城プロダクション シンデレラプロジェクト、ニュージエネレーションの一員。そして彼、長谷川纏の彼女である。

「お二人が待ち合わせをしていたということは、これからデートですよね。お邪魔してしまいましたね」

「いやいや、そんなことないよ」

「そうですよ」

いや、人のデートの邪魔をするのは流石にはばかられる。

「それでは、私はここで失礼します。お二人とも、しっかりと楽しんでくださいね。本田さんはあまりバレないように」

「武内さん」

「はい、なんでしよう」

「この後、用事あったりしますか？」

「いえ、ありませんが……」

「少し、お話しませんか。色々とお礼を言いたいこともありますし」

「それは……大丈夫なのですが。お二人の邪魔になると思うのですが……」

それは建前で、本音はカップルと一緒にいるのが辛いというか。

「本田さんはよろしいのですか？」

頼む！ 断ってくれ！

「うん、大丈夫。私も言いたいことあるし」

「そう……ですか。分かりました」

「ありがとうございます！」

分かりたくはないです。でも、俺にはこの2人を見届ける責任があ

る。この2人が付き合うきっかけは俺にもあるのだから。

本田さんが高森さんなどとよく行くカフェで落ち着くことになった。昼にはまだまだ時間があるし、珈琲でいいだろう。いや、うーむ。「プロデューサー、何時もの癖が出るよ。大方、何頼むかで迷ってるんでしょ？ それだったらこのカフェはアップルティーとかがオススメだよ」

「ありがとうございます。では、それにさせてもらいます」

アップルティーか。紅茶で飲むのはレモンティーばかりだから、なかなか新鮮だ。

「私もアップルティーにするけど、まといはどうする？」

「僕はアイスコーヒーにするよ」

「んじゃ、注文するね。注文いいですか？」

「はい」

「アップルティー2つとアイスコーヒー1つで」

「かしこまりました」

……注文を取っていた店員が微笑ましそうに2人を見ていたのを見て気づいたことが1つある。若い男女が2人並んで座って、その対面には男性が。……この構図って、

「「カップルが父親に挨拶しに来たみたいだね」ですよね」

まさかの3人ハモリ。

「あはは！ みんなして考えてること一緒じゃん！」

「私ってそんなに老けて見えますか……自分でこの構図思っているんですけど」

「大人びて見えるだけ……だと、思いますよ」

知ってる？ 大人に対してその言葉は老けて見えるって意味なんだよ？ 別にいいけどさ。

「改めて、あの時ありがとうございます」

「いえ。確かに大変ではありましたが、今もいい関係でいてくれるようなので」

事の発端は、未央が凜と卯月にポツリと漏らした言葉だった。

「どうしよう、しまむー、しぶりん」

「どうしたんですか、未央ちゃん」

「何かあったの？」

思い詰めた顔を少し赤らめて

「私、告白されちゃった……」

とてつもない爆弾を投下した。

「え？」

「同じクラスの友達にね……」

「未央、ちよつと待った！」

「え、何？」

「私たちだけじゃ荷が重すぎる話だった」

「プロデューサーさんに相談しましょう！　ね？」

「う、うん。わかった……」

2人の必死さに思わず未央は首を縦に振った。

「プロデューサー（さん）！」

「!?　島村さんに渋谷さん……一体どうかしましたか？」

勢いよく駿輔のいる部屋に突貫をかけてきた2人に驚きはしたも

の、その真剣な表情に気持ちを切り替えようと珈琲を飲んだ。

「未央が告白されたって！」

むせた。

「どういう状況なのか教えていただいていいですか」

「うん。相手はクラスの友達で、私たちのデビューライブの時に呼んだ1人なんだ。アイドル辞めるって言って1人で落ち込んだりした時に1番心配してくれてた」

駿輔の頭にあの時の出来事が思い出される。

「で、それからアイドルとしての私のファンでいてくれて、何より

『本田未央』の友達でいてくれた子なんだ」

「いい人なんですね」

「うん、すっごくいい子。女優に挑戦しないかって時にも背中を押してくれた。何時も支えられてるね」

その時の未央はとても嬉しそうな顔をしていた。駿輔は、その笑顔が何時も未央が見せているモノとは違うことに気づいた。

「そこに、今日の告白だったんだ」

「なんて言われたの？」

『アイドルとしての未央のファンだけど、何より僕は君自身、本田未央っていう女の子のことが好きなんだって気づいたんだ。アイドルが恋愛禁止なのは分かっている。だから、僕が君のことを好きなんだって言うことだけを覚えておいてくれないか』って……」

それはまたイケメンなことを……と、今の関係を崩したくないがためにちひろの告白への返事を保留にした俊輔は思った。自分には真似できないとも。

「それに対して……本田さんはどのように感じましたか？」

「どのように……。私ってこんな性格だからさ、男子から女子に見られることって今まで無くてさ。だから、こうやって告白されて……」

嬉しかった。そう言いながら笑う未央の顔に駿輔は見覚えがあった。そう、まるで

(あの時のちひろみたいだ)

そう気づいた駿輔は、行動を起こした。

「本田さん。その告白した彼に会わせてもらえませんか？」

その理由は単純で。

(その彼は……勇気を出して告白した。俺にはその勇気が無かった)

駿輔は……自分を变えるきっかけを彼から貰おうとしていた。

「プロデューサー、この人が」

「どうも、長谷川纏と言います」

「急な申し出ですみません。私、本田さんのプロデューサーで武内と

申します」

「はじめまして。それで、僕が呼ばれたのは……」  
「その前に」

早速本題に入ろうとした纏の言葉を遮り、未央に声をかける。

「本田さん、申し訳ありませんが席を外して頂けませんか。あと、盗み聞きもやめて欲しいと部屋の外にいる皆さんにも伝えてください。まあ、防音性の高い部屋を選んだので漏れることは無いと思います  
が」

「大事な話なんだよね」

「はい。本田さんにとっても大事な話です。ですが、ここに本田さんがいては意味が無くなってしまいます」

「うん。分かった」

未央は一瞬纏に目を向けてから部屋から出た。扉が完全に閉まったのを確認してから話し始める。

「お待たせしました」

「いえ、大丈夫です。改めて、今日僕が呼ばれたのは告白の件についてですよね？」

「はい」

「やっぱりダメでしたか？」

「いえ、上にはこの話はしていません。これは個人的に長谷川さんにお訊きしたいことがあったからです」

それに驚いたのか、軽く目を剥いた。

「なんででしょう……？」

「長谷川さんは、元々本田さんのご友人として接していたのですよね」  
「そうですね」

「何故、その関係が崩れかねない危険を犯したのかが知りたいんです」  
その質問に纏は悲しそうな顔をしながら、自嘲気味に話し始めた。

「馬鹿ですよ。相手は恋愛禁止のアイドルで、しかも友達。告白すれば、絶対に今までの関係ではいられない。でも、気持ちを抑えきれなかった！ 叶わない恋なのにこんなに苦しんで熱くなって……笑っちゃいますよね」

一通り話し終えて俯いた。

「いえ、私にはそれが羨ましいです」

「えっ?」

しかし、駿輔の予想外の言葉に驚き即座に顔を上げた。駿輔のその目は本当に羨ましそうで。まるで、自分が欲しいおもちゃを誰かが持っているのを見た子供のよう。

「1人の男がいました。その男には昔からの幼なじみの女の子がいて、ずっと仲良くしていました。男はある日、その幼なじみの女の子に告白されました。小さい頃からずっと好きだったと。しかし、今までの心地いい関係が崩れるのを恐れて返事を保留にして逃げました。優しい女の子はそれを受け入れて、今まで通りの関係で接してくれていますとさ」

「それって……」

「はい。私の話です」

驚いた。そういうのには無縁そんなこのプロデューサーに、こんな話があるとは。

「私は羨ましいです。長谷川さんのその勇気が。私には……俺にはその勇気は無かった」

「さっきのプロデューサーさんの話を聴いて思ったことがあるんです。僕は、今まで通りの関係が嫌だったんです。友達ではなく、もっと近い存在でいたかったんです」

「もっと近い存在……」

その言葉には聞き覚えがあった。

『ただの幼なじみじゃもう嫌なの!』

涙を流しながら悲痛に叫んだ彼女。それでも、あの時は逃げてしまった。だが、現状維持を永遠と続けることは出来ない。何事も前に進み続けるのだ。

「そうか……。ありがとうございます、長谷川さん。貴方のおかげで気づくことが出来ました」

「こちらこそです」

「1つ、確認してもいいですか」

「なんででしょう」

「長谷川纏さん。貴方は本田さんのことを好きでい続けてくれますか？ アイドルとしての「本田未央」を。友達としての「本田未央」を。何より、『本田未央』を。好きでいてくれますか？」

「もちろんです。もう迷いません」

「分かりました」

外にいた未央を呼び戻す。

「本田さん、今回私たちに相談したのは……そういうことで合ってるんですよね」

「うん。やっぱり気づいてたんだね」

「はい。ですので、長谷川さん、本田さん」

「はい」

「お2人の交際を私が認めます」

「……え？」

その言葉に2人は目を合わせる。

「いいんですか？ アイドルって恋愛禁止なんじゃ……」

「責任は私が全て負います。お互いの気持ちを理解することも出来ましたから。アイドルでも、本田さんは1人の女子高生ですからね」

「未央は僕でいいの……？」

「もちろん。告白されて嬉しかった。だって、私も好きだったから。何時も私のことを応援してくれてるのが嬉しくて。気づいたら好きだった」

「なんだ……僕達似たもの同士だったんだね」

「そうみたいだねー」

未央があの時見せていたのは恋する乙女の顔だった。最近ニュージエネレーションの2人が駿輔に向けているのと同じ顔。でもその2人の笑顔は、なんだか怖い

「長谷川さん、本田さんのことよろしくお願いします」

「はいー！」

「あの時プロデューサーが許してくれなかったら、今こうやってお茶なんかしてないもんね〜」

「そうだね。それから武内さんに色々と助けてもらったし」  
「私も大切なことを教えてもらいましたから」

運ばれてきた注文したアップルティーとアイスコーヒーを飲みながら談笑する。楽しそうに笑っている2人を見て、あの時の判断は間違っていないかったと再認識する。

この幸せそうなカップルを見ながら、そろそろ自分も今の状況を打破しなきゃいけないと感じた。今までの関係を変えていかなければ、待たせているちひろに申し訳が立たない。

ちちゃんと彼女達に向き合おう。

そう心の中で決心した。もう、逃げるのはやめだ。

# アイドルコミュ『???』

1つの……しかし、とてつもなく大きく抗いようのない欲求が活字の海に沈んでいた俺の意識を急激に浮上させた。

「腹減った」

そう、腹が減った。レツスンだからと言って拓海に起こされたのが7時過ぎ。現在時刻は1時半を数分超えたところ。既に飯を食ってから4時間ほど経っている。だから、腹が減ってしまうのは仕方がないことなんだ。

「んー、ラーメン食いたい。ラーメン、ラーメンかあ……。高校の時は武蔵とよく食いに行ってたな」

そういえば、ラーメンと言えばあいつは元気にしてるんだらうか。いや、いろいろとエンジョイしてるのは知ってるが。最後に直接会ったのはいつ頃だっただろうか。最近は忙しいし、ラーメンとか食ってないんかな。いや、あいつ結構ラーメン食ってた気がする。仕事で。「いや、今はそんなことはいい。とりあえず俺は腹が減ったんだ。ゴローちゃんにも匹敵するレベルだ」

財布を持っていざゆかん。ランチタイムの街へ！

街中で本来見かけることのない、見覚えのある奴を発見してしまった。

「お、お姫様じゃん」

「おや、きa」

とんでもないことを街中で口走ろうとしていたのでとっさに口を人差し指で止める

「おっと、こちら辺でその名前を口にしちゃダメだ。めんどくさいことになる」

「承知しました。では改めて、お久しぶりですね。彰殿」

「お前、事務所のアイドル全員くっそ忙しいのに、よくここにいれるな。休みか何かなのか？」

「ええ。それにしても、あの貴方様が今では私と同じアイドルという業界にいる……なんとも面妖なこともあるものですね。一体いかなる心境の変化でしょうか？」

「色々あってな。俺だってここまでプロデューサー業が自分に合ってるだなんて思わなかったよ」

彼女は四条貴音。ご存知765プロダクションのトップアイドルであり、昔なじみだ。

「二十歳になったんだっけか？ てか、デビュー当時に成人してないとか嘘だろ。あの色っぽさで？」

「21ですよ。褒められるのは嬉しいのですが、色っぽいというのは……」

……ずつと気になってただけだ。

「その口調さ、疲れないか？」

「最初の頃は苦戦も疲れもしたけれど、慣れてしまえばそうでもないわよ？」

そ・れ・に、この口調を私に提案したのはそっちでしょ、貴方様？」「そりやそうだけど、まさかそのキャラのまままでトップアイドルに登りつめるだなんて思いもしねえだろうよ。この本性を知ってるのは俺らぐらいだし、そこの所苦労してないのかと思ってな」

そう訊くと、普段メディアでは見る妖艶な笑みではなく、晴々とした笑顔で

「いいのよ。この姿はある意味変装みたいになってるし。素顔が作られたキャラの隠し蓑になってるだなんてすごいわよね」

「同じプロダクションのアイドルには？」

「第一印象がこの姿の私でしたので……ミステリアスで古風な銀髪美女。そっちの方がアイドルとしても売り出しやすいでしょ？」

「そりやそうだけど」

つてことは……

「赤羽根さんも知らないのか？」

「ええ。だってその方が面白いじゃない」

「お前はそういう奴だったな……。そうしたら、俺の初めてのプロ

デューズはお前のそれになるのか」

「あら、彰の初めての相手が私だなんて嬉しいわね」

「おい、誤解を受けるような言い回しをするんじゃない」

これが四条貴音の本来の姿だ。今のメディアに出ている（自称）ミステリアスで古風な銀髪美女の姿は、俺が当時彼女に勧めたキャラだった。自称だったそれは、最早そのイメージが世間に浸透して自他に認めるモノとなった。

本性はこんななんだけどな。ミステリアス（笑）、古風？　これが？　銀髪美女、これは否定出来ない。

「こんな所にいるってことは、どうせいつも通りラーメンでも食いに来たんだろ。だったら、もう少し努力して変装しろよ。例えば、普段の『四条貴音』がしないことをするとか……ポニテとかどうだ？」

貴音は自分の長く綺麗な銀髪を一房手に取った。

「ポニテか……確かにしたことなかったわね。してみようかしら」  
「おお、マジか。やったぜ」

「そつちが提案したんでしょ。ところで、ポニテが好きなの？」

「バレたか。実は俺、ポニーテール萌えなんだ」

「へー、いいこと聞いた」

こう……長い髪の子が髪を纏めて上げて、普段は見えない首元が見えるってのがいいんだ。イメージが変わるんだよな。

「ねえ、ピン持ってない？」

前髪も軽くアレンジしたいから」

「ヘアピンか？」

えーっと……あつたあつた。ほら」

「ありがと。訊いといてなんだけどさ、なんでヘアピンなんて持つてるの？」

「俺も飯でラーメン食いに来たからだよ。いつも食うときは髪纏めてただろ？」

「そうだったそうだった。よし、じゃあ行きましょうか」

にっこりといい笑顔でこちらを見る。

「そうじゃないかなと思ってたけど、やっぱり一緒に行くんだな」

「せっかく久しぶりに会えたんだから、一緒にいたいじゃない」  
「お前がそれでいいんならいいけどさ。じゃあ行くとしようか、お姫様」

「お姫様も嫌いじゃないけど、あの時みたいにはもう呼んでくれないのかしらっ…」

「……分かったよ。行こうか、キオ」

「ちゃんとエスコートしてよね、キアラ」

だから、その名前を出すなっつってんの。ほら、知ってる奴だったのかビツクリした顔でこっち見てるじゃん。

「で、キオは何食うつもりなんだ？」

「んーつとね、まずは醤油食べたいかな」

「まずはね」

「そう、まずは」

まあ、お前が一杯で終わるとは思っちやいねーよ。

「俺が行こうとしてたのも醤油だからちようどいいや」

「じゃ、そこ行きましようか」

「美味しいわね」

「だろ？」

食ってるのは同じ醤油ラーメン。迷ったらココに来ている。

「スープが美味しいわよね」

「そう！ そうなんだよ！」

ラーメンはスープだと思うんだ。いや、俺個人としての見解だから色んな意見があってもいい。で、その中でも俺はスープというだけで。

「このスープに惚れ込んじゃつてさ。どうよ？」

「なんでキアラが自慢げに言ってるのよ。でも、私もこのスープ好きね」

「やっぱりな。昔から味覚は一緒だったからそうじゃないかと思ってたんだよ」

ズルズルと麺をすすする。麺もスープと絡むように細めの卵ちぢれ麺だ。

「そういえばキアラ、あの子とはどうなのよ」

「あの子？」

「ほら、えーつと……拓海ちゃん！」

「拓海か。どうって？」

抽象的すぎて伝わらんですよ。

「……モグモグ、ゴクン」

「口で言わんでも」

「気になるじゃない。もう私が入る余地ない位に親密な関係になっちゃてるのかさ」

あー、そういうことね。

「そこまでじゃねーよ。半同棲状態になってるぐらいだ」

「ぐらいって……それは相当進んでるわよ」

「やっぱり？」

「やっぱりよ」

薄々気づいてたけどさ。

「それで、貴方様」

「突然のお姫様かよ」

「もう拓海殿とは致されたのですか？」

「何を」

話が見えてこない。スープを飲みながら次の言葉を待つ。

「もちろんナニをです」

「んごほっ!？」

むせた。

「お姫様モードでなんつーこと言ってるんだ！」

「面白いと思って」

「てめえ……」

威力がすごいぞ……

「それで？ やったの？」

「黙秘権を行使する」

「それは自白してるようなモノでしょうに。やったのね」

「決して最初は俺から手を出した訳ではないということをご理解いただきたい」

俺から手を出したんじゃない。そう……

「どっかの誰かさんみたいに襲われたんだよ。手口も似てたしな」

「私と同じか。やっぱり拓海ちゃんとは気が合うみたいね。あの方法ってやりやすいのよ」

「みたいだな。別の人間が同じ手法を使う辺り。一応拓海とはまだ面識ないんだろ？」

「ないわよ。会う機会がないもの」

「ま、近いうちに嫌でも会うだろ」

「それもそうね」

会話はそこで途切れ、後はズルズルゴクゴクとラーメンを食べる音が聞こえるのみだった。

「ごちそうさま」

「よし、先出ててくれ」

「いや、お金」

「いいからいいから」

「そうだった……キアラったら昔から私にお金払わせてくれたことなかったわよね」

俺個人のポリシーとして、『基本的に女性に金を払わせない』つてのがある。女性はなんだかんだで金の使い道も多いからそういうのに使えるようになって思ってた。男なんて金の使い道なんざ限られてくるし、プロデューサー<sup>仕事</sup>業してたら金を使う暇もないしな。もちろん、男としてのプライド的な意味もある。

「そういうこと。だから、大人しく外で待ってる」

「分かったわよ」

渋々といった体でキオが店から出たのを確認してから、財布を取り出して席を立つ。

「醤油ラーメン2つで1, 500円で大丈夫だよな？」

「はい。ところで、キアラってもしかして……センパイですか？」

「なんだようやく気づいたのかよ。夢、叶えられてよかったな」

「はい！ あの時センパイが喝を入れてくれなかったら俺……この夢諦めてたと思います！ だから、ありがとうございました！」

「俺はただのきっかけだよ。簡単にテメーの夢を諦めようとしてたのが気に入らなかつただけだ。お前のやる気があつたからこそ、今こうして成功してるんだ。もっと胸を張れよ」

「はは……全然変わってないんですね。最初は分からなかったですけど、あの時のセンパイのままだ」

「人間、そうそう根つこの部分を変えられはしねーんだよ。それじゃ、また来るぜ店長。次もよろしくな」

「はい！ ありがとうございました！」

金を払って店から出ると、若干ジト目でキオが見てきた。

「知り合いだったのね」

「いつ気づくかと思ってたんだけどな。お前のキアラで思い出したみたいだ。後輩の店だったんだよ」

「キアラが食べ物に関して身内鬮盾をするとは思えないし、ホントに偶然入った店が」

「後輩のだったってわけ。俺はすぐに気づいたんだけどな。あの時のまんまだったし」

「キアラは昔とは全然違うものね」

「まーな」

人って髪型を弄るだけで別人に見えるからな。

「にしても半同棲ね……私もお邪魔しようかしら」

「大丈夫かよ。うちの会社は恋愛推奨とかになってるからバレたらバレたで……ってなるけど、そっちは違うだろ」

「そうなのよねえ……え、恋愛推奨って何」

「うちのアイドル事業部の専務が、『恋愛禁止などと言ったことはない』とか言い出してな。おかげで俺たちは大変なことになってる」

「へえ……おもしろ苦労してるのね」

「お前ふざけんなよ」

誤魔化せてないからな！それは誤魔化せてないから！

「拓海ちゃん以外にも色んな子に好かれてるみたいだし……私も狙っちゃおうかしら」

「だから765はというか、基本的にアイドル事務所は恋愛禁止だろうが。スクープとかどうすんだよ……」

「その時はキアラに責任を取ってもらうしかないわね」

「うっわ、その流れ遼哉から聞いたことあるわ」

世間体的にはバッドエンドなんだが、こんな可愛くて綺麗な嫁を貰えるという点では確実にハッピーエンドなのが何とも言えない所だ。

「私は本気ですので。覚悟しておいてくださいね、貴方様？」

「……そういう告白の時とかにお姫様モードになるのはズルいだろう。無条件でドキドキする」

「武器を与えたのはキアラでしょ。それに、今の私じゃ……ドキドキしないの?」

「バーカ」

「あいた!」

こちらを振り向いて後ろ手で拗ねてむくれているキオの頭を小突く。

耳元で小さな声で反論する。

「お前みたいに可愛くて綺麗な女の子に告白されて、ドキドキしない男がいるわけないだろう」

「えっ、それって……」

「ほら、次行くぞ」

言い終えてからすぐに離れて次の店に向かう。

「待って! もう1回! もう1回今の言って!」

「恥ずかしいから嫌ですう」

「もう1回言ってればキアラ!」

アイドルコミュ 『鷺沢文香』『橘ありす』

ピンポンと何処かデジャブを思わせるインターホンの音が鳴った。もちろん、デジャブを感じたのはこのシチュエーションに対してで、音に関してではない。分かっているとは思いが。

「はい」

『遼哉さん、私です』

「文香か。今開けるよ」

昨日の加蓮に代わって今日来たのは文香のようだ。ドアを開けると、

「え？」

「おはようございます、遼哉さん」

「お、おう。おはよう文香。えっと、なんで？」

文香の隣にいるもう一人を指差す。

「指を差さないでください」

「おお、すまん」

「着いていきたいと言われたので……ご迷惑だったでしょうか？」

「いや、予想外の珍客に驚いただけだから。よく来たな、ありす」

しゃがんで視線を合わせてから頭をグシャグシャと撫でる。

「頭を撫でないでください！ もう子供じゃないんですから！ それと、橘ですー」

「はいはい、クール・タチバナ、クール・タチバナ」

「もうー！」

「ははは！ 改めていらっしやい」

「……お邪魔します、プロデューサーさん」

「別に名前で呼んでくれていいんだけどな」

本日のお客様はこちら、俺の元カノである、鷺沢文香さんです。さらにスペシャルゲストとして橘ありすさん。このお2人をお迎えしました。一体今日はこの3人でどのような時間を過ごすのでしょうか。

今日と明日の間のマジックアワー。ちよつとの間（15時間くら

い) だけど、楽しい時間が過ぎせたらいいな。

「家に来るなんて何時振りだ？」

「確か……2人で話し合った時ぐらいなので……」

「3年振りだな」

「ですね」

2人で今後をどうするかを話し合ったのだ。その話し合いの末に俺達は別れることにした。別に不仲になったという訳ではないのであしからず。……この説明何処かでもしたような気がする。

「文香さん、来たことあったんですか？」

「あれ、ありすは俺達の関係についてのこと知らなかったっけか？」

「桶です。まあ、いいですけど。噂だけなら耳にしたことがあります。

曰く、『浅葱プロデューサーと鷺沢文香は昔付き合っていた』と。これって本当のことだったんですか？」

「本当ですよ。私と先輩……遼哉さんは昔付き合っていました」

文香のその言葉にありすは驚いた顔をする。文香に関しての噂だったし、しかもその噂が文香が男性……俺と付き合っていたなんてこと信じられなかったのだろう。

「驚きました……本当だったんですね。その、お2人は気まづくはないんですか？」

「ええ、全く。先輩のことが嫌いになって別れたというわけではありませんでしたから」

「今も好きかどうかと訊かれれば、大好きだと即答出来るな」

「勿論、私だって出来ますよ」

俺たちのやり取りにありすは顔を真っ赤にする。流石に恋もしてないお子様には早いか。

「あれ、でも冬フェスで文香が倒れた時に言ったんだけど……聴いてないのか？」

「……迷惑をおかけしました……」

「いや、気にしてないからいいよ」

「あの時、浅葱さんが何の脈絡もなく突然文香さんにキスをしたと思つてパニックで頭が真っ白になつてしまつてその時間のこと何も覚えてないんです。浅葱さんが何か言つていたような気はするんですけど。もしかして、その時ですか？」

ああ……道理である時、ありすがヤケに静かだと思つたんだ。

「そうそう。胃痛に加えて過呼吸が出ちやつて、咄嗟に人工呼吸したんだ。で、呼吸も正常になつて文香が正氣に戻つたと思つたら文香が流れるようにキスをしてきたんだ。全く正氣に戻つてなかつた」

「その間なんとなく意識がボーツとしていたもので……人工呼吸を久々に遼哉がキスをしてくれたんだと勘違いしてしまつたようなんです。それで周りも見えずにそのまま……恥ずかしいです……」

「周りには奏を筆頭に多くのクローネのメンバーが。まあ当然だよな。なんてつたつて、そこはクローネの楽屋なんだから。質問攻めにされたよ」

いやあ……あの時の楽屋の空気は凄まじかつたな。空気が凍つたなんてちやちなモンじゃなかつた。専務があの時あの場に居合わせいてなくてよかつたと心底思う。

「そこでやむなく、俺と文香が昔付き合つてたつてことをバラしたんだよ。何も無ければそのまま隠し通すつもりだつたんだが」

「何を言われるか分かりませんが。アイドルとプロデューサーが昔、交際していたなんて。武内さんとかは流石に知つてましたけどね」

「週刊誌のパパラッチ共からしたらアイドルのゴシップなんて格好のエサだからな」

「そんなことを言つたら、今のこの状況も大概だと思ひますよ」

「ははっ、確かにな」

てか、来たのはそつちじゃね？ と至極真つ当な疑問をぶつけて見れば、仲良く2人揃つて目を逸らす。自覚あつたのかよ。

「お前ら朝は食つてきただろ？ 飲み物だけでいいか」

「それなんです……」

「あれ、食つてないの？」

「いえ、私は食べましたよ。でもありすちゃんが……」

「少し寝坊してしまつて……」

「どうしたんだ？　ありすが寝坊するなんて珍しいな」

ありすはそういう所はきちつとしたいタイプなので、ほとんど時間に遅れるということはない。自分のタブレットでもスケジュール管理をしてるからな。

「最近やけに練習がキツくなっている気がする……」

「私もありすちゃんも昨日はヘトヘトになつてしまつて。私は朝も大丈夫だったんですけどありすちゃんは……」

「普段なら『子供扱いしないでください、私はもう大人なんですから！』と言いたい所なんですけど、流石に今回は自分の身体はまだまだ子供なんだということを自覚せざるを得ませんでした。身体が重くて……なかなか起きられなかつたんです」

「遼哉さん、何か知りませんか？」

「というよりもプロデューサーなんですし、普通何か知ってますよね」

「そりゃ知ってるかどうかと訊かれれば知ってるけども」

しかして、これはもうアイドルに教えてしまつてもいいものなんだろうか。ほとんど確定事項ではあるとはいえ、サプライズ的な所もあるからなあ……

「まあ、近いうちに発表する予定だったからそこまで大人しく待つてろ。アイドル集めて伝えるから」

「……それなら仕方ないですね」

「で、何飲むよ？」

「昨日買い物に行ったおかげで大抵のものは揃つてるぞ」

「昨日は加蓮ちゃんが来てたんですね。その時に買いに行つたんですか？」

「そうそう」

立ち上がつて、台所の冷蔵庫の中を確認する。昨日の買い物での加蓮のアドバイスのサムシングにより、飲み物を大量購入したのだ。

「私はカフェオレにします」

「私は……ミルクティーってありますか？」

「あるよ」

「じゃあ、ミルクティーでお願いします」

「はいな。んじゃ、朝を食べてないありますのために何か軽く食べられるものでも用意するよ」

「そんなあ、私は大丈夫ですよ」

「いいからいいから」

なんとなく、朝飯を食っていないという状況は個人的に気に入らないんだ。

「あー……そういえば昔もそんなことを言っていましたね」

「よく覚えてたな。さーて、何作ろうか……」

俺が零したその言葉に文香が「え？」と驚く。

「遼哉が作るんですか？」

「俺が作るけど？ どうせ文香も食べたいんだろ？」

「はい！」

「限定の腹ペコちゃんめ……」

「遼哉の作るものが全部美味しいからいけないんです。私は悪くありません」

「ひどい責任転嫁を見た」

んー、冷蔵庫の中から……いや、下手に腹に溜まってもなあ……あつ。

「ありす、ホットケーキでいい？」

「いいと思います！」

「文香には訊いてない。イチゴジャムもあるけど」

「じゃあ、ホットケーキでお願いします」

「任された」

　　～遼哉クッキング（パパ）中～

「2人とも、出来たぞ」

「「おおっ！」」

「ありす、ほらいちゴジヤム」

「あ、ありがとうございます」

「文香は何がいい？ バターとかチョコとかもあるけど」

「バターでいいですか」

「はい」

フオークとナイフを渡してやると文香は目をキラキラさせている。楽しみなのは分かったからちよつと待つてろつて。

「ほら、カフェオレとミルクティー。よし、食っていいよ」

「いただきます」

「どうぞ」

「美味しい……すごくふわふわです」

「なんでこんなふわふわなんですか？」

「簡単な裏ワザみたいなモノなんだが……と、前置きする。

「一つは焼く前の生地の段階で少しマヨネーズを混ぜるんだよ」

「マヨネーズですか」

「そう、マヨネーズ。ホットケーキミックス200gに対して大きじ二杯ぐらいだな」

「マヨネーズの味しませんよ」

「そりゃ、しない程度の分量が今言ったのだからな。んで、焼く時には予めフライパンを高温で熱しておくんだ」

「このフライパンが結構大事。」

「生地を高温状態のフライパンに入れると、ベーキングパウダーが反応して炭酸ガスが大量に発生する」

「なるほど、その大量に発生した炭酸ガスが生地を持ち上げて膨らませた結果、こんなふわふわになるんですね」

「文香、その通り」

「偉そうに言ってるが前調べたものの受け売りだよ。気になったらありすも調べてみな」

唐突に「ふわふわのホットケーキが作りたい」と思った時があった。いや、なんでそんなことを考えたのか今の俺には理解出来ないが。

「はい。ところで遼哉さん、このジャムって」

「おう。手作りだな」

「とつても美味しいです！」

「お気に召したようで何よりだよ。まだあるから持っていくか？」

「はい！」

やっぱり大好物のイチゴのことになると思いつきがいいな。素直になる。確かにイチゴは俺も好きだけど。だがイチゴパスタ、テメーはダメだ。

「文香さんや、会話の合間合間で食ってるにも関わらずなんでお前の分に用意してた3枚がもう無くなってるの？」

「美味しいから大丈夫です」

「いや、問題だ。てかなんでかな子なんだよ」

「なんとなくです」

ほんと……普段は少食なのに……なんでそんなに入るんだよ。

「昼も俺が作ってやるから。ありすの分まで狙おうとするのはやめなさい」

「分かりました」

「文香さんが壊れました……」

「俺がなんか作ると毎回こんな感じだからなあ……」

一体何が文香をそう駆り立てているのか。何、俺の料理は別腹です的な？ 物理的に胃の容量が増えでもするわけ？ 疑問だ……当時から。それから15分経ったぐらいにありすが食べ終わった。

「ごちそうさまでした」

「はい、お粗末さまでした」

「さて、ありすの朝ごはん（飯）も終わったし昼まで時間もありません。どうしようか？」

「そ、それじゃあお2人のお話を聴きたいです！」

「俺らの？」

そんな面白い話があるわけでもないのだが。

「はい！」

「俺はいいけど……」

ちらりと文香の方を見る。

「私も大丈夫ですよ」

「OK、じゃあ何から話そうか……」

目を輝かせているありすに話を聴かせる。嬉々として答えづらい質問をしてくるありすに苦笑しながら解答を模索したり、顔を真っ赤にしたありすを2人で撫で回したり。そんな時間が楽しくて。何よりも、文香とこうして昔のことを誰かに……それもありすに話すことがあるなんて思わなかったから……それがなんだかやけにくすぐったかった。

## 幕間『電話』『お知らせ』

電話のコールの音が鳴る。その音は時間がかからずにすぐ途切れた。

「もしもし」

『もしもし？ 久しぶりだな！』

「久しぶりって……この前会ったばかりじゃないですか」

『あれ、そうだったか。まあいいや。それで電話をかけてくるなんて珍しいな。どうしたんだ？』

「今度のイベントについて色々と話したいと思ひまして」

『そっか』

「はい。そちらの準備はどうなってますか？」

『うちは順調だよ。何処かのプロダクションと合同でやることなんて滅多にないからな。みんな張り切ってるよ』

「そちらは、もう皆さんに話されたんですね」

『ああ。そう隠すようなことでもないし、何より隠し事が苦手なんだよ。お前だって知ってるだろう？』

「そういえばそうでしたね」

電話の相手の言葉にふふつと笑みが零れる。

『そういえば武内、お前……また笑えるようになったんだな』  
「え？」

『今笑っただろ？ 前は仮面被ったような感じだったんだろ？』

「そうですね……遼哉と、シンデレラプロジェクトの皆さんもおかげです」

『そりゃよかったよ。そっちはまだ公表してないのか？』

「はい。ですが、明日辺りに発表すると思います」

『そっか。楽しみにしてるよ』

相手は安堵した溜息を漏らした。よほど彼を心配していたのだろう。

『そうだ。千早がそっちの高垣楓さんと一緒に歌えるのを楽しみにしてるってのを言っておいてくれ』

「如月千早さんですか。というか、それは遼哉に頼んでくださいよ。でも、先輩も同じ高校だったんですし遼哉を通じて高垣さんとは交流も会ったんじゃないですか？」

「一応はな。ただ、今は別のプロダクションで彼女はアイドルだからな。危険な橋はあまり渡りたくはないから」

「それもそうですよね」

今はそれが大丈夫な状況にはなっているのだが。

『そういえば、今美城さん『恋愛推奨』なんていうとんでもないことになってるんだってな?』

「先輩ご存知だったんですか?」

『貴音から聞いたんだ』

彼のプロダクションで貴音と言えば……

「四条さんですか」

『そう。なんでも346にいる知り合いと、この前の休暇でばったり会ったらしくくてな。その時に聞いたらしい』

「誰でしょう? それを知っているということはアイドル部署なんでしょうけど」

『それなんだけど、知り合いって言う前に1回言い直してるんだよな。確か……きあ……とかなんとか』

きあ……何処かで聞いたような……と首を傾げる。

「私だけじゃなんとも……」

『それもそうだよな。悪い』

「いえ。ところで先輩」

「ここでさつきまでビジネスライクに話していたが、親しげに話を交える。」

「○?日の夜、空いてませんか?」

『○?日って、そっちで色々詰めるためにお邪魔する日だよな。空いてるけど』

「じゃあ、終わった後で飲みに行きませんか? 遼哉や彰も誘って親睦を深める意味でも」

『おおっ、いいな! 店とかはそっちに任せていいか?』

「はい、そのつもりです」

『楽しみにしてるよ。……おっと、呼ばれてしまった。それじゃあ武内、楽しみにしてるよ』

「はい。それではお疲れ様でした、赤羽根先輩」

次回、新章開幕

シンデレラプロジェクトの存続をかけた一大イベント『シンデレラの舞踏会』。それは無事に大成功を収め、シンデレラプロジェクトは存続。美城常務……いや、美城専務との関係も良好なものとなり、アイドル達は平和にレッスンを受け仕事をし、プロデューサーはいつも通りにプロデューサーに頭を悩ませ、いつも通りアイドル達に襲われていた。

そしてこれは、その『シンデレラの舞踏会』に至るまでの軌跡。シンデレラプロジェクトの2人のプロデューサーと14人のアイドル達の成長の記録。

アイドルマスターシンデレラガールズ『2人の魔法使い』

coming soon……

始まり

『合同イベント?』

その場に集められていたアイドル達のほとんどの声が揃った。

「はい。今回は他のプロダクションと協力をしてイベントを行いま  
す」

「美城<sup>ウチ</sup>としても相手方としても合同でのイベントなんて初めての試み  
だから、色々と大変なんだけどな」

遼哉の言葉にその場にいたプロデューサー達が苦笑いをする。自  
分達でイベントを企画し、実行するだけでも多大な時間と労力を労す  
るというのに……そんな裏方としての哀愁漂うものだ。

「みんなの中には、レッスンの内容が普段やっているものよりもハー  
ドになっている。そう感じた人もいると思う。というか、実際そう感  
じたというのを直接聞いている。もちろん、それは勘違いじゃない」  
それまでプロデューサー達から一步下がって話を聞いていた女性  
が1人前に出る。トレーナー四姉妹の長女、青木麗。トレーナーラン  
クでいうと最上位であるマスタートレーナーの資格を持つ女性だ。

「プロデューサー達から他のプロダクションとの合同イベントを行う  
旨とその相手を聞いて、生半可なパフォーマンスでは舞台にあげられ  
ないと思った。そこでプロデューサー達の許可を得て、普段のレッス  
ンから難易度を上げさせてもらった。発表されて解禁されたこれか  
らの厳しいレッスンに着いてこれなくなっては困るのでな。今回  
のレッスンはこの前の『シンデレラの舞踏会』の時よりもキツイもの  
になるからな、覚悟しておけよ?」

麗の『厳しいレッスン』という言葉を聴いて多くのアイドルがう  
ええ……という声を漏らした。ただでさえ、シンデレラプロジェクト  
にしてもプロジェクトクローネにしてももちろんプロジェクト以外  
の他の部署のアイドル達もいずれの例外もなく『シンデレラの舞踏

会』に向けてのレッスンで地獄を見ているというのに、今回はそれよりも厳しいというのだ。既に何人かのアイドルの目が死んでいた。そこで1人が手を上げた。

「ん、どうした唯」

それはプロジェクトクローネのメンバー、大槻唯だ。

「ねーねー、プロデューサーちゃん。その協力するっていう相手のプロダクションって一体何処なん？　ここまで周到な準備をするってことは相当な所なんでしょ？」

唯の質問に全員が頷く。この質問は凶らずともこの場のアイドル達全員の代弁になった。その質問に遼哉はニヤリと笑った。確認を取るように俊輔に目を向け、彼は頷いた。

「聴いて驚け。その相手は……」

わざわざ一呼吸間を空けてそのプロダクションの名前を発表した。

「765プロだ」

その場にアイドル達の驚愕の声が響き渡った。

「な、765プロってあの天海春香とか如月千早とかが所属してる有名プロダクションにや！　なんでそんな大物のと!?!」

それに答えたのは今西部長だ。

「765プロダクションの高木社長とは昔からの知り合いでねえ……。会う機会があった時にこの話が持ち上がったんだ。その後は君達に情報が漏れないように、極秘にプロジェクトを進めていたんだ」

「社長と知り合いつて……どんな交友網なんですか」

「ははは、勿論それは秘密だよ」

至極真つ当な質問を何時もの人好きのする笑顔で受け流した。

「今回の合同イベントだが、他のイベントで披露したユニットでの楽曲……例えるならLIPPSの『Tulip』とかだな。それを披露することが決定している」

「またあのメンバーで歌えるということよね？」

「そういうことだ。新しいユニットも組む予定だから楽しみにしてくれ。まあ、選ばれたってことはその分レッスン増加だから大変だけ

どな」

彰のその言葉を聴いて、実に複雑な表情を浮かべる。新しいユニットということは間違いなく、新曲だ。新曲を歌えるのは嬉しいことには嬉しいが、振り付けも歌詞も1から覚えるということになると他のアイドル達の何倍もの練習量になる。その二者択一は厳しいモノがある。

「それだけじゃない。何人かは、765のアイドルとパフォーマンスをしてみよう。全体曲はどちらのアイドルも全員参加なんだが、それ以外の個人曲と一緒に歌うという形だな」

「現状で決定しているのが、楓だ」

「私……ですか？」

楓は自分の名前を呼ばれたことに驚き、ポカンとした顔をする。

「俊輔があちらのプロデューサーから……まあ、赤羽根先輩なんだが、伝言を受けたらしくてな。だよな？」

「はい。如月千早さんが、『一緒に歌えるのを楽しみにしてます』と伝えてください。と仰っていたそうです。ですので、赤羽根先輩たちと協議して結果、一緒に曲を披露しようということになりました」

「まあ！ 以前1度番組で一緒にさせていただいた時に歌声を聴いたんですけど、如月さんの歌声ってスツと心に響くんですよ」

「それは楓さんも同じですよ！ ナナ、応援してますからね！」

「何を歌うのかは今後本人を交えて話し合うからそのつもりでいってくれ。他にも決まる予定だから、心の準備だけはしておけよ」

何人かの目処は既についてはいるのだが、敢えてここでは発表しなかった。

「そういうことです。これから合同イベントに向けてのレッスンを追加されます。負担は重くなりますが……」

「なに、俺達プロデューサーのこれからの修羅場に比べればどうってことない」

遼哉のブラックユーモアにまたもやプロデューサーの苦笑いが。しかし、今回は先ほどの物よりも闇をじっくりコトコトブイヨンスープで煮込んだような暗いものだったが。何人かは、「俺、今回は何徹す

るんだらう……」や「新記録を樹立する自信がある」等の耳を塞ぎたくなるような言葉を漏らしていた。

「全くだ。肉体的疲労だけなんだからな。それに、『シンデレラの舞踏会』をきっちり成功させてるんだ、大丈夫」

「それじゃあ、みんな。合同イベントに向けてアイドルもスタッフも頑張るぞー！」

「おー！」と、その場の全員の声が揃った。

刻は遡って765プロダクション。

「合同イベントをする？」

その場を代表して、天海春香が質問した。

「そう。美城プロダクションと協力してイベントを行うことが決定したんだ。ウチの社長とあっちのアイドル部門の部長が昔からの知り合いらしくてな、そこから発展したらしい」

「美城ですか……高垣楓さんがいらつしやるプロダクションですよ  
ね」

相手のプロダクションの名前を聴いて、如月千早が声を漏らした。

「知ってたのか？」

「はい。以前番組で共演させて貰いました。といっても、直接の交流は無いんですけどね。とても綺麗な歌声で、感心しました」

「楓ちゃんかあ〜確かに綺麗な声だよな」

『『楓ちゃん』ってえらく仲良さそうな呼び名じゃない』

プロデューサーの言葉に水瀬伊織が目敏く反応する。確かにファンでも無ければ呼ばなさそうな呼び方だ。

「ああ〜……高垣楓ってな？ 俺の高校の後輩で知り合いなんだよ。というか、美城って後輩が何人もいるんだよな」

「そうなんですか!?! すごい偶然ですよー！」

確かに凄い偶然だ。何者かの意思を感じる（）。

「プロデューサー、昔から高垣さんはあんなに歌が上手かったんですか?」

「上手かったな。カラオケ行ったりした時は凄かったな。感動モノだよ」

確かに感動モノだろう。あの美声にあの歌唱力なのだから。

「そういうえば、キア……美城プロの知り合いに聴いたのですが、美城プロダクションのアイドル部門では『恋愛推奨』ということになっているそうです」

ここで唐突に四条貴音が爆弾を落としてきた。

「れ、恋愛推奨!?!」

その言葉に萩原雪歩が顔を真っ赤にする。

「何それ面白そうなの!」

ずっとソファで寝転びながら話を聞いていた星井美希が飛び起きた。ちなみに他のメンバーは仕事に行っている。

「聞くところによると、社内恋愛が推奨されるようになったそうです。これによって水面下で行われていたアイドルによるプロデューサー争奪戦が表立った行動になり始めたらしく……」

そして誰にも聞こえない程の小声でボソツと、「またライバルが増えるってことよね……」と不満を漏らした。

「そんなことになってたのか……遼哉も俊輔も大変なことになってたんだな。あ、今のは後輩の美城のプロデューサーのことな」

「ホントに後輩多いのね……」

呆れたように伊織が呟く。

「ということだ。今いない5人には後で俺からちゃんと説明しておく。トレーナーさん達には話を通してある。今日からイベントに向けてのレッスンになるからみんな、よろしく頼む」

「任せてください!」

春香はニツコリと満面の笑顔で答える。他のメンバーはトレーナーの元へ向かっていく。途中で千早が何かを思い出したのか、プロデューサーの元に戻ってきた。

「どうした千早？」

「プロデューサー、高垣さんと知り合いなんですよね」

「そうけど……」

「一緒に歌えるのを楽しみにしてますって、伝えておいてくれませんか。お願いしますね」

それだけ言って千早はトレーナーが待っている場所へ向かった。

「知り合いつて言っても、今はアイドルだからなあ……俊輔にでも頼むかなあ……」

こうして、765プロ×346プロ合同イベントが始動した。

### 346スレ①

【合同イベント】 346スレ その40 【決定！】

1 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
合同イベントクル——（。△。）——！！

2 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>>1

合同イベントってどういうことや

3 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>>1

おう、詳細あくしろよ

4 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

詳しいことはまだ発表されてないから分からんが、どうやら他のプロダクションと協力してイベントやるらしい

5 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>>4

そマ？

6 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
画像貼つといてやるよ

つ【画像】

7 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
……カッコいいやんけえ

8 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
楓さんとしぶりんが誰かと向かい合ってるな……誰や？

9 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
対応して2人なのは分かるんだけどな

10 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
片方がシートで片方がロングか……

11 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
>>>10

まあ、絞れる程の情報ではないな

12 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
シヨートとロングがいる事務所なんてほぼ全てだしな。何か特徴的な髪型をしてくれる子だったら良かったんだが……

13 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
ああ、目立ちたくないと言いなながら髪先縦ロールという目立ちやすく特徴的な髪型をしてたりとかな

14 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
>>13

森久保オ！

15 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
>>13

この前のラジオよく頑張ったな森久保オ！

16 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
>>13

新曲も待つてるぞ森久保オ！

17 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
流石の団結力やな

18 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
勢いがあつて嫌いやないで

19 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
にしても、合同イベか……

20 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
どれくらいの規模なんだろうか

21 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
>>20

ほんそれ

22 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
この前シンデレラの舞踏会やったばかりだしな  
ちなみに最高だった

23 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
でも、合同イベだし総力じゃないと相手方にも失礼じゃね？

上田しやんがフルスロットルだったな

24 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
しかし、346ほどの大手プロダクションだったらむしろ相手方から気を使うだろ

お前ら行ったのかよ。俺は行けなかったぞ

25 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
ただ公式サイトの写真を見るに、すごい相手方をリスペクトして  
る感じが見受けられるのは俺だけか？

26 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>25

わかるわ

突然色々な方針を変え始めた時はどうなるかと思っただけど、シンデレラの舞踏会は素晴らしかった。

27 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>26

わかるわ

ところでトライアドプリムスを考えついた奴は天才だと思うんだが、どうよ？

28 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>27

わかるわ

歌唱力バツグンだもんな。俺はあの加蓮ちゃんの夢げな感じが好きだ

29 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>28

わかるわ

無限ループって怖くね？

30 プロデューサー仮面

hey、お前ら。kws mさんで無駄にスレを消費すんなYO！  
みんなお待たせ！颯爽登場プロデューサー仮面だぞ！

31 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

うわ、なんだコイツさつむ

3 2 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
プロデューサー仮面！プロデューサー仮面じゃないか！

3 3 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>>3 2

なんだ、お前3 4 6スレ初心者か？肩の力抜けよ

3 4 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
随分とご無沙汰だったじゃないかプロデューサー仮面！

3 5 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

スマン、俺も初心者なんだがプロデューサー仮面つてのは一体何者  
なんだ？教えてクレメンス

3 6 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>>3 5

いい質問だな。

プロデューサー仮面とはッ！

3 7 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

3 4 6スレに何処からともなく現れッ！

3 8 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

一体何処から仕入れてきたのか分からない正確な情報をッ！

3 9 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

俺達一般プロデューサーに教えてくれる正体不明のいい人なの  
だッ！

4 0 プロデューサー仮面

>>>3 6―3 9

素晴らしい連携での紹介ありがとう

4 1 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
ところでプロデューサー仮面は何故現れたんだ？

4 2 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

最近は出没しなかったしな

4 3 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
あ、時期的に美城が色々と大変な時か

4 4 プロデューサー仮面

よく分かったじゃないか。ホント大変だったんだぞ

4 5 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

激動だったのは俺達一般プロデューサーにも伝わったぞ。カリス  
マが違う方向のカリスマになったりな

4 6 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

あったな。でもあれ嫌いじゃなかったぞ

4 7 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>4 6

わかるわ 美嘉ちゃんの新しい一面を見れたよな

4 8 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

とときら学園は天才だったな

4 9 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

とときん先生という新しい可能性

5 0 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

千枝ちゃん可愛すぎひん？

5 1 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

薫ちゃんにせんせえと呼ばれたいだけの人生だった……

5 2 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

桃華ちゃんのあの優雅さだろ

5 3 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

みりあちゃん p r p r p r p r p r p r

5 4 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

途中から始まったあんきランキングの発想はすごい

5 5 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>5 4

あの組み合わせを思いついた番P優秀だよ

5 6 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>5 3

通報した

5 7 プロデューサー仮面

さて、今日現れたのはそろそろ俺の正体を教えて、この後の情報に  
信憑性を持ってもらおうと思つてな

58 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
マジか！

59 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
今んとこ予想しか出てないしな

60 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
野獣先輩並に新説生まれてるからな

61 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
SHINOBI説が結構有力じゃね？

62 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
ああ……あやめ殿の師匠だったってヤツか。俺もあれは嫌いじゃ

ない

63 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
情報の驚きの正確性な

64 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
この後の情報とかwktkなんだが

65 プロデューサー仮面  
どうも、悶絶少年専属……あつ、間違えた

66 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
フアツ!?

67 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
これは……たまげたなあ……

68 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
>>>65

お前ホモかよお!? (歓喜)  
69 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>>68  
なんで喜んでるんですかねえ……

70 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
おら、ボケはいいからあくするんだよ

71 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>70

ホモはせっかち

72 プロデューサー仮面

さて、気を取り直して

73 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

ほら、お前ら落ち着け

74 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

語録乱用してる場合じゃないぞ

75 プロデューサー仮面

実は俺はシンデレラプロジェクトのプロデューサーだったんだよ

!

76 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

ΩΩΩへナ、ナンダツテー!?

77 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

ΩΩΩへナ、ナンダツテー!?

78 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

そマ?

79 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

め、名刺とか見たいんすけど……

80 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

プロデューサー仮面ってまじでプロデューサーだったのか

81 プロデューサー仮面

この仮面ともおさらばだな……

名字と所属だけだぞ。名前と番号は隠させてもらう

82 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

十分すぎる

83 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

むしろ名字は見せてくれるのか

84 浅P

ほれ、くれてやろう

つ【画像】

85 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
うわ、マジモンだ……

86 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
プロデューサーがあんなこととして良かったのか？

87 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
怒られたりしねえの？

88 浅P

問題ない範囲の情報だけだし大丈夫だよ

そうだ、ちよつと前に誰かが加蓮のことを話してたけどあの3人の  
中で加蓮が一番イタズラ好きでお調子者だよ

89 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
何それ超かわいい

90 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
なんでそんなこと知ってるんだ……

91 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
>>>90

それは俺も気になってた

92 浅P

今だから言えるけど、一時期プロジェクトクローネの担当だった時  
があつてな？

93 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
ほう

94 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
まあ、流石にそんな所まではこつちに知らされないわなあ

95 浅P

それに、加蓮とは昔から個人的に親交があるのよ

96 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
ほう、そうなのか………んん!?

97 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
!?

98 以下、名無しに変わりましたして魔法使いがお送りします  
いくらなんでも聴き逃せないぜ……

99 浅P

昔家がすごい近くでよく遊んであげたってだけだよ

俺が高校入ってからは忙しくなって全然会ってなかったけど

100 以下、名無しに変わりましたして魔法使いがお送りします  
アイドルと幼なじみだと……

101 以下、名無しに変わりましたして魔法使いがお送りします  
その罪、万死に値する！

102 以下、名無しに変わりましたして魔法使いがお送りします  
者ども、囲めえ！

103 以下、名無しに変わりましたして魔法使いがお送りします  
絶対に逃がすな！

104 以下、名無しに変わりましたして魔法使いがお送りします  
羨ましいぞこの野郎！

105 浅P

そうか……俺も殺されるわけにはいかないから逃げるとしよう

残念だなあ……せっかく合同イベントについての情報を投下しよ  
うと思っただけだなあ……殺されるわけにはいかないからなあ

……

さらば！

106 以下、名無しに変わりましたして魔法使いがお送りします  
嘘だろ!?

107 以下、名無しに変わりましたして魔法使いがお送りします  
おい、てめえら何やってくれてんだゴラア！

108 以下、名無しに変わりましたして魔法使いがお送りします  
ちよっ、浅P帰ってきて！

109 以下、名無しに変わりましたして魔法使いがお送りします  
情報があるって分かった状態での生殺しはキツいつて！

110 以下、名無しに変わりましたして魔法使いがお送りします  
ほら、101—104謝れよ！

続く  
⋮

? ? ?

## 346スレ②

346 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
……なかなか戻ってこないな浅P

346ゲットだぜ

347 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
そりや俺たちとは違って浅Pはちゃんとしたプロデューサーって  
いう職業を持つてるから忙しいんだろうよ

348 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>>347

おいバカやめろ。ここにいる何人にダメージ入ると思ってんだ  
349 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
きつつい一言だ……

350 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
偶然休みの俺に死角はなかった

351 347

かく言う俺にもブーメランだった

352 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>>351

流石に草を隠しきれない

353 浅P

お待たせ！イベント情報しかないけどいいかな？

354 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
何故自分の傷口もえぐったのか

355 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
浅Pだ！

356 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
浅Pが帰ってきたぞ！

357 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
待ちわびたぞ……

358 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

いや、ホントに愛想を尽かされたのかと思った

359 浅P

すまん。早めに戻るつもりだったんだが、収録の時間になりそうだったから反応が出来なかったんだ

360 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
マジで焦ったよな

361 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
やっぱり仕事だったのか

362 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
CPのプロデューサーってゆってたし、CPメンバーか？

363 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
どうなんだろうな

364 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
気になるところだ

365 浅P

第一、あれぐらいで愛想尽かすんだつらとつくに尽かしてるわ

366 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
収録ってことは番組だよな……

367 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
流石浅P……

368 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
一体何時のなんだ

369 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
ラジオかテレビかだけでも教えてくれ浅P！

370 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
あそつか、ラジオ収録の可能性もあるのか

371 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
完全にラジオの可能性を忘れていた

372 浅P

何の収録かはそのうち発表されるから震えて待て

誰かは……クローネの1人だとは言っておこう

373 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
なぬ

374 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
クローネか！

375 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
クローネ好きなワイ歓喜

376 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
ありすちゃんですね、間違いない

377 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
>>376

橘です！

378 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>376

橘です！

379 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>376

名前で呼ばないでください！

380 浅P

さておまいら、そろそろいいか？

381 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
俺としては唯ちゃんを……

382 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
お、なんや？

383 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
発表か？

384 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
くる？

385 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
待ってたぞ！

386 浅P

諸々教えようじゃないか

387 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
やったー！

388 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
きた！

389 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
はよ！はよ！

390 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
どうなんだよ！

391 浅P  
とりあえず、相手方について

有名プロダクション。アイドルも勿論超有名

392 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
マジか！

393 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
何処や！

394 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
アイドル、プロダクション共に有名……

395 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
どっちが先なんだろう。

有名プロダクションだから、そのアイドルも注目されてるのか。それとも、アイドルが有名だからプロダクションも注目されてるのか

396 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
>>395

それだいぶ変わるぞ  
397 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

>>395  
後者だと結構絞れる

398 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
これ以上は教えてくれないだろうね

399 浅P  
398の言う通り。共演者についてはこれ以上教えられない。公

式発表を待て。

400 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
ですよー

401 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
ま、まだ情報はあるんだろう……？

402 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
も、もつと情報をよこせⅢ（。口。Ⅲ）

403 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
可愛いボクは出るんです？

404 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
ユツキときらりの再戦はないんですか!?

405 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
>>404

あれは奇跡だから

406 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
にしてはいいフォームをした

407 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
打たれた後のモノマネ細かすぎて伝わらんやろwww

408 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
まあ、総合するとどれぐらいの人数なのか知りたい

409 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
>>408

俺達の代弁者

410 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
そういうこつた

411 浅P

ふむ……

412 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
お？

413 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
なぞのま

4 1 4 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
何故止まった

4 1 5 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
まさか教えられないのか!?

4 1 6 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
嘘だろ……

4 1 7 浅P

喜べ、シンデレラの舞踏会に続いて3 4 6プロのアイドルが総力を  
かけてお送りするぞ!

4 1 8 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
やったぜ。

4 1 9 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
勝った

4 2 0 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
絶対行くわ

4 2 1 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
これさ、相手方のファンも合わせたら競争率やばいんじや……

4 2 2 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
行くしかねえ!

4 2 3 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
あっ

4 2 4 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
多々買わなければ……

4 2 5 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
多々買わなければ生き残れない

4 2 6 浅P

この前ライブで発表したL i p p sのT u l i p yや、L . M . B .  
Gのハイファイ☆デイズなんかも披露することが決定してるから見  
に来て損は無いぞ(ダイヤモンド)

4 2 7 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
くそう……お布施を貯めねば……

4 2 8 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
めっちゃ行きたくなってきた

4 2 9 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
L i p p s 来るのか！

4 3 0 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
L・M・B・G……ふむ、娘の授業参観に行つてこないとな

4 3 1 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
聴けて嬉しいんだけど、聴かなきゃ良かったと思わないでもない。

4 3 2 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
>> 4 3 1

確実に行きたくなるもんな

4 3 3 浅P

新ユニットも組む予定です。震えて待て

4 3 4 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
うっわ、超楽しみ

4 3 5 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
俺はもう行くことに決めた

4 3 6 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
そもそも行かないという選択肢が俺にはない

4 3 7 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
>> 4 3 6

同じく

4 3 8 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
当たり前だよなあ!?

4 3 8 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
担当が出る事は確定したからな

4 3 9 浅P

後はコラボすることぐらいかねえ……まあいいか

4 4 0 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
おい、サラッと爆弾落とすぞ

4 4 1 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします

よくない

4 4 2 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
まあいいか……じゃねえよ！

4 4 3 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
コラボってどういうことだ！教えろ！

4 4 4 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
ハリー！ハリー！

4 4 5 浅P

すまんが、これについてはこれ以上は何も言えんのだ

4 4 6 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
引つかかるのか

4 4 7 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
うわああああああ!!気になる！

4 4 8 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
気になってムズムズする！

4 4 9 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
しばらく考えるわ

4 5 0 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
一体何のコラボなんや

4 5 1 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
上田しゃんの着ぐるみのコラボとか？

4 5 2 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
………

4 5 3 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
>>>4 5 1

貴様天才か!?

4 5 4 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
何故それだと思ったwww

4 5 6 浅P

さて、俺は仕事に戻るわ。また何か教えられそうだったら来るわ。

アデューー！

457 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
ありがとうございます！

458 以下、名無しに変わりました魔法使いがお送りします  
感謝しかない

以下、合同イベントについての考察が続く

「顔合わせ……?」

「ああ」

俺の言葉に美城のカフェテリアでノンビリとカフェオレを飲んでいた楓が首を傾げる。

「誰と?」

「そりや今回コラボが決定してる如月千早とだよ。一度顔合わせした方がいいと思つてさ。設定しておいた」

「分かりました」

コクリと一つ頷き、カフェオレを口に運んだ。すると、何かを思い出したのかすぐに顔を上げた。

「それにしても、赤羽根先輩と会うのも……久し振りよね?」

「いいや、俺は前会ったぞ」

「なんで誘ってくれなかったの!?!」

「仕事だつつの」

お前はそもそも収録だったし、裏での決め事の会議で会っているのだ。楓をその場に呼んでどうしろいうのか。

「今度の水曜日に向こうの事務所に行くから、そのつもりで」

「交通手段は?」

「俺が車出す予定」

「珍しいわね」

「下手に時間かかって待たせるわけにもいかないしな。使えるものは使うに越したことはない」

免許は普通に持っているわけだし、他の交通手段を使って合同イベントの相手が765だとバレてはいけない。

「それじゃ俺は行くから」

「あら、もう少しゆっくりしていけばいいじゃない」

「まだ仕事が残ってるっつーの。楓はもう終わったんだっけか」

「ええ。このカフェオレを飲み終えたら帰るつもりよ」

ニコリと笑う。

「ホッと暖まってからってか」

「あら、先に言われちゃった」

「やっぱりな。そう考えてると思った」

「以心伝心ね。嬉しい」

「そりや良かったな」

何年も一緒にいれば、思考ぐらい読めるわ。この25歳児は隙あらばダジャレを挟もうとするからな。

「あんまり遅くならないようにな」

「もう……子供じゃないんだからそんなこと言わなくてもいいのに」

「心配ぐらい素直に受け取れよ」

「うふふ、はい」

「それじゃ」

「ええ」

「……」

「ああ。ここが765プロダクションだ」

俺と楓で2人して上を見上げる。雑居ビルの3階。そこに有名プロダクション、765プロダクションがある。

「何故かここから移転しないんだよな」

「いや、本当になんでだろうな」

俺の言葉に反応したのは

「赤羽根先輩」

「よお、よく来たな」

「お久しぶりです、赤羽根先輩」

「こちらこそお久しぶり、楓ちゃん。俺が卒業して以来だよな」

「現場で一緒にすることなかなかありませんでしたしね」

「そろそろ入ろうか。バレちゃマズいしな」

「そうですね。行こうか」

「ええ」

カツっ……カツっ……と音を響かせながら、赤羽根先輩の後ろに着いて階段を上って行く。

「如月さんはもういらっしやるんですか？」

「ああ。事務所で待ってるよ」

「今日は赤羽根先輩だけですか？」

「いや、社長たちもいるよ。まずはそっちに挨拶するんだろ？」

そりやあそうでしょうよ。と、先輩の言葉にツッコんでいると扉の前に着いた。

「それでは、765プロへようこそ」

赤羽根先輩がガチャリと扉を開ける。

「あ、にーちゃんお帰り！」

「おう、ただいま」

赤羽根先輩が事務所に入るなり、いかにも快活そうな少女が反応した。

「右側の短い結び……てことは双海亜美か」

「にーちゃん、その人たちが？」

「ああ」

周りを見渡し、奥の方に社長がいるのを確認しそちらに向かう。何はともあれ、1番上の人に挨拶をしなければならぬ。

「先日の会議以来ですね。改めて簡単ではありますが、御挨拶させていただきます。美城プロダクション、プロデューサーの浅葱遼哉です。こちらが」

「高垣楓です。本日はよろしく申し上げます」

「ああ、よく来たね。私がこの765プロダクションの社長の高木順二郎だ。堅苦しいのはここで終わりだ。くつろいでくれ」

「ありがとうございます」

それは助かる。敬語自体は嫌いじゃないんだが、本当に目上に使うようなガチガチの敬語つてのはどうも馴染まないんだ。

高木社長の近くのデスクには2人の女性がいる。

「あつ、私は事務員の音無小鳥です。経理とかは私の担当なので、関わってくるのはもつと忙しくなってきた頃ですね。よろしくお願います」

何処か馴染みのある緑の事務員服を着ている音無さん。アイドルプロダクションの事務員服は緑色じゃないといけない決まりでもあるんだろうか。

「1度会議でお会いしてますよね。秋月律子です。765は彼と私の2人がプロデューサーなので、色々と迷惑をかけちゃうと思うんですけど……ごめんなさいね？」

こちらはレディーススーツの秋月さん。過去にはアイドルもやっていたのだが、今は引退してプロデューサーになっている。

「それじゃあ、早速本題に入ってもらいますね。あつちでプロデューサーと千早が待ってますから」

「分かりました。行こうか」  
「ええ」

秋月さんに言われた方に向えば、ちよつとした談話スペースがあり、2人はそこに座っていた。

如月さんは俺達を認めると、立ち上がった。

「お久しぶりです、如月千早です。今回はお呼び立てしてすみません」

「お久しぶりです、高垣楓です。いえ、1度きちんとお話ししてみたいと思っていましたから」

「そうだったんですか」

「とりあえず座ってくれよ」

立ったまんまじゃ、ゆっくり話も出来ないしな。と、高校時代から変わらないことを言いながら俺達を座らせた。

「今回は顔合わせという名目になってるけど実際は、親睦会に近い感じだな」

「ですね」

「高垣さんは元々モデルだったんですよね」

「そうですね」

「なんでアイドルに？」

その言葉に何かを思い出しながら楓は答えていく。

「スカウトでモデルになったものですから……お仕事はお仕事。そう割り切ってやっていました。モデルというお仕事に……特にやりがいとかは感じていなかったんです」

「そんな中、美城に知り合いが入社してきたんです。それがきっかけの一つですね」

「それって……」

如月さんは俺の方を向く。

「はい。俺のことですね」

「何よりも大きかったのは、『彼の側にいたかった』からですね。実に4年ぶりでしたから」

そう。楓とは高校を卒業して以来その時まで1度も顔を合わせていなかった。電話などの連絡はしていたが、俺は大学、楓はモデルの仕事で会う暇などなかった。

「今はお仕事に不満なんてありませんけどね。やりがいがありますし。大好きな歌もお仕事で歌えますから」

歌の話が出た所で如月さんの目がキラッと輝いた。

「そう。歌なんです。私、高垣さんのラストスパートに入ってから走り抜ける感じがすごく好きなんですよ」

「ラストスパートは、すぱーっと歌い上げることにしていますから。うふふっ」

「お前は……」

なんでこんな所までダジャレを言う必要があるのか……

「そういえば楓ちゃんってダジャレが好きだったね……」

「ほら見ろ如月さんだっ……て……」

「すぱーっとって……くっふふ……ふふ……」

めっちゃ笑ってる!? 何故かめっちゃ笑ってる!? つまらなすぎて逆にツボに入ったのか……?!

というか楓、お前も驚くなよ。驚く気持ちも分からんでもないが。すると、それを見ていた赤羽根先輩が俺達に説明してくれた。

「あー、千早ってな？ 笑いの沸点が異様に低いんだよ」

「いくら何でも低すぎませんか!？」

「ホントにな……。何気なく口から出たダジャレとかあるだろ？ 自分でもこれは無いな……。って、思ったのも千早が聴いてると高確率で笑ってる」

楓のあのダジャレでこんだけ笑うとか……。上田しゃんと難波審査員の漫才とか見たらどうなるんだろうか。笑いすぎて死ぬんじゃないの？

そこで閃いた考えを赤羽根先輩に耳打ちする。

「そういうの、ステージに織り交ぜてもいいかもしれないね」

「そうだな。面白いかもしれん」

「皆さん、お茶が入りませ……ピヨッ!？」

「あ、ありがとうございます。ピヨ?」

「アツイエ、何でもないですよ……」

お茶を淹れてくれた音無さんが謎の鳴き声を発した。一体どうしたのだろうか。

気になりはしたが、何でもないとのことなので気にしないことにして、俺達は雑談とも呼べる他愛のない話を続けた。

まさかあんな美味しいシチュエーションを見ることが出来るなんて……。男どうしの耳打ちっていいわよね。

(浅葱×赤羽根……。耳打ちしてたのは浅葱さんだったものね。強気後輩攻め……)

☒小鳥の餌場☒

「先輩、この後時間ありますよね？ 最近ご無沙汰でしたし……。鳴かせてあげますよ」

「あ、ああ……」

「ンブフツ……!?!」

「うわっ、どうしたのピヨちゃん?」

「あ、何でもないのよ何でも」

あ、危なかった……すっごくいしっくりくるわ……。今までのカップリングの中でも最高峰の出来よ……。でも落ち着きなさい。落ち着くのは音無小鳥。まだ他の可能性があるわ。

(そう、逆。あの状況からの敢えての赤羽根×浅葱。つまりは、後輩による誘い受け……!)

☒小鳥の餌場りたーんず☒

「せ、せんぱい……もう、我慢出来ませんよ……。この後、ダメ……ですか?」

「ったく、仕方ないな。まあ、言いつけ通り我慢出来たペットにはしっかりとご褒美をあげないとな?」

「……! はいい……」

「ピヨオツ!」

「ど、どうしたんですか小鳥さん!」

「いえ、ちよつと……でも、大丈夫ですから」

「ホントですか?」

「ホントですから!」

何なの……この赤羽根×浅葱の破壊力は……。最高峰なんてモノじゃない。間違いなく今までの妄想の中でもトップ……

いつも春香ちゃんたちアイドルには優しい笑顔を向けているけど、本性はとてつもなくドS……。あの人好きのする笑顔に釣られてしまったら最後。彼の本性を知った時には、もう身も心も彼から離れられなくなっている……。

完全に堕ちきる前に、もうここでやめて、ここで自分から離れるか、このまま自分の元に居続けるかの選択を相手にさせるの。彼は相手を手放す気なんてない癖によ。そこで自分から最後の理性を断ち切らせることで、彼は満足するのよ。

他にもペットはいるけど、アメとムチのバランスが完璧だから誰も彼から離れないしペット同士の不仲もない。その中でも浅葱さんは

高校時代からの彼のお気に入りで……この業界に入ったのも、本当は彼からの命令で……

ああ……止まらない。妄想が止まらないわよ……。なんなのこのカップリングは……恐ろしすぎるわ……。

待って、そういえば浅葱さんには確か同期のプロデューサーがいてそれは彼と同じ赤羽根先輩の後輩。

話に聴くと、不器用で無愛想で……また餌なの!? なんなのこの餌場は!? 美味しすぎるわよ!? うああああああ……やってやるわよ!

「なんか、音無さん荒ぶってませんか?」

「ピヨちゃんって偶にああなるから、あんまり気にしなくていいよ。鼻血出てないだけマシだよ」

「そうなんですか?」

「あ、ああ……俺は滅多に見ないんだけどな」

「それにしても、一体何が原因なんでしょうか……」

「気づかない方が幸せだと、私は思うわよ……」

ダメ無小鳥……もとい音無小鳥。どうやら律子さんには趣味がバレている模様。みんなにバレてしまうのも時間の問題……かもしれない。

## ガラスの靴のサイズ

「~~~~~♪」

ボイスレックスンを受けている楓の様子をレックスルームの扉の近くで見ていると、隣に麗さんと聖さんが並んだ。

「お疲れ様です、麗さん」

「そういうお前もな。そろそろ忙しくなってくる頃じゃないか？」

「ええ、大変です。どうですか、楓の調子は」

そう言うと、麗さんも楓を見て

「至って順調だよ。こう言うと語弊があるかもしれないが、普段以上にやる気がある。気慣れたプロダクションのメンバーではなく、別のプロダクション。その上一緒に歌うのは如月千早だ」

「そうですね」

「確かこの前、あちらに出向いて話もしたんだろ？」

「はい、気が合うみたいで話も弾んでいました」

「それもあるんだろうな。普段とは違う環境にワクワクしているといった感じか」

「昔からあいつはそんな感じでしたよ」

良くある、『遠足が楽しみで前日寝れない子』に近い。

「やる気があるなら、止めはしないさ」

聖さんも笑いながら、

「高垣がオーバーワークになるとは思っていないしな。とことん付き合わせてもらう」

「ありがとうございます。明ちゃんにも、よろしく伝えておいてください」

「ああ、分かったよ」

それじゃあ……と、仕事に戻ろうとした所で、大事なことを思い出した。

「おっと、忘れる所だった。昨日はいなかったので一日遅れですけど、聖さんお誕生日おめでとうございます。これ、誕生日プレゼントです」

聖さんは驚いた顔をした後に、呆れたような顔になる。

「まったく……キミも律儀だな。アイドルだけでなく私の誕生日まで覚えていたとは。だが、素直に嬉しいよ。プレゼント、ありがたく受け取らせてもらう」

「いえいえ。いつもお世話になってますから。楓のこと、よろしくお願ひします。それでは、今度こそ失礼しますね」

「あつ、プロデューサーさん」

「おはようございます。緒方さんだけですか？」

「えっと……そう、みたいです」

駿輔がプロジェクトルームに入ると、そこには智絵里しかいなかった。

「そうですか……となると、みなさんが集まるまでは結構時間がかかりそうですね」

「ですね……」

会話終了。仕方がないことだ。アイドル相手には、改善されてきたとはいえ基本的に口数が少ない俊輔と、人見知りである智絵里しかこの場にはいないとなると、会話が続かない。未央がここにいたならば、会話が弾んでいたかもしれないが。

「あの、プロデューサーさん！」

だが、今回は珍しく智絵里が勇気を出した。駿輔は突然呼ばれたことに驚きながら返事を返す。

「なんででしょう？」

「えっと、その……お話、しませんか？」

「話……ですか？」

「はい。ボーツと待つのも何ですし……プロデューサーさんと2人きりで話せるのも滅多にないですから……」

そういえばと駿輔は思った。彼女と接する時は基本的にキャンディアイランドの2人、杏かかな子のどちらかがいることが多い。2人で話したのはあの時くらいだ。

「そうですね。お話ししましょうか」  
「はいっ！」

「緒方さん、あのユニットの調子はいかがですか。私はもう1つのユニットの担当ですので」

「プロデューサーさんは卯月ちゃんたちの方でしたよね。私たちは……あつ、この前川島さんと加蓮ちゃんにご飯を食べましたよ」

「あのお2人とですか？ 随分と珍しい組み合わせですが」

「レッスン終わりからの流れでそうなったんです。前のLove∞Destinyを歌った時の『Masque・Rade』での話をしたり、川島さんからサマカニ!!を歌った時の『サマプリ!!』が大変だったっていうのを聞いたりして……」

「随分と……盛り上がられたようですね」

「はいっ」

智絵里の話聴きながら、駿輔は彼女の成長に喜んでいた。

シンデレラプロジェクトが始まり、キャンディアイランドを結成した時。美城常務からプロジェクトの解体を申し渡され、挽回のために奮闘していた際のインタビュー。そして、『シンデレラの舞踏会』の成功。その成長の証を、聴いているのだ。

「緒方さんは、変わられましたね」

「そうですね。川島さんにも言われたんですけど、前までの私だったら加蓮ちゃんにご飯食べに行くなんて絶対に有り得ませんでした」

「目を合わせることもなさそうですね」

「えへへ……同じことを加蓮ちゃんにも言われました」

「それに、よく笑顔になるようになりました」

「余裕……っていうのはちよつと違うかもしれないですけど、意識して笑えるようになりました」

駿輔の目から見ても、智絵里の笑顔は前までのものよりも柔らかく自然なものになったように思える。

「色々なユニットを経験したこともそうですけど……やっぱり一番は

プロデューサーさんのおかげだと思います」

「私の……ですか？」

「はいっ」

駿輔は大きく目を見開いた。

「私は何もしていませんが……」

「いえ……臆病で人見知りだった私をアイドルにしてくれて……アイドルになってからもずっと弱かった私を支えてくれたのはプロデューサーさんですから！」

彼女の言葉で思い出されるのはあの光景。きつと自分はその時のことを一生涯忘れることが出来ないのだろうと、駿輔は確信していた。

離れていった彼女たちの3つの手。掴むことが出来ず虚空で彷徨う自分の手。離れてしまいそうだった自分をしっかりと掴んでくれていた2人の手。

いつそのこと罵倒してくれば良かった。ああ、自分が悪いのだ。そう思わせてくれれば良かったのに。彼女達は決して自分を責めなかった。

『ごめん、ごめんねプロデューサー』

『プロデューサーがこんな頑張ってくれてるのに、私出来る気がしないの……』

『プロデューサー、武内さん。最後のお願ひ。私たちのことは引きずらないで。私たちの思いは断ち切って。その思いは……あの子たちに、楓や美穂たちにあげて』

『私たち……もう、プロデューサーのアイドル……じゃ、なくなっちゃう、からあ』

『私がなりきれなかった……アイドルにい、して、あけて……』

『プロデューサーは、間違っつて無いから。私たちが、弱かっただけ、だから』

ありがとうごさいました、プロデューサーさん。私たちにアイドルの夢を見せてくれて。そうやって泣きながら。震えた声で。頬に濡れていない場所なんて何処にも無くて。それでも彼女たちは怒るで

もなく、呆れるでもなく、自分に感謝の言葉を伝えたのだ。

「忘れられるわけがない……」

「えっ……」

その思いは口から漏れ出していた。自分の言葉を聞いてから急に黙りこくりに、突然独り言を漏らせば驚きもするものだ。

「アイドルの夢を見せてくれてってなんだよ……。夢は叶えるものだろう……。それを叶えてやれるのが俺たちじゃないのかよ……」

「あっ」

その言葉に、智絵里は思い出した。

何時だったか今西部長が語ってくれたことがある。……そうだ。未央がアイドルを辞めると言った時。プロデューサー……。駿輔ではなく、もう一人。遼哉の態度に不満を持っていた時に見かねた今西部長とちひろさんが教えてくれたんだった。

口から出ているのに気づいていないのか、今のアイドルと接する時の敬語ではなく、昔、アイドルと接していた際の彼本来の言葉で話していた。

「結局断ち切れなかった。未だに忘れられない。だからこそ、彼女の発言に俺は咄嗟に動けなくなった。目が……。声の悲痛さが、一緒だった」

「あれから……。上手くやれたかな。俺は彼女達を、アイドルにするこ  
とが出来たかな」

「シンデレラプロジェクトは守ることは出来た。けど、ちゃんとアイドルに出来ただろうか。俺の思いを込められただろうか」

「ちゃんと伝わってますよ」

大きいはずなのに、小さく見えるその身体を智絵里はギュツと胸に抱き締めた。

「緒方……。さん？」

「声に出てましたよ」

「えっ……」

「私たち、みんなプロデューサーさんに感謝しています。私たちはちゃんとプロデューサーさんのおかげでアイドルになれました。だから、

そんなに自分を責めないでください」

「緒方さん……それでも私は……」

「武内さん……駿輔、さん。駿輔さんがシンデレラプロジェクトの解散を止めようとしたのは、義務感とか罪悪感からですか？」

身体を離して、真っ直ぐと目を見つめる智絵里に同じようにしつかりと見つめ返して返事をする。

「いいえ。あれは私自身の気持ちからです」

「じゃあ、それでいいと思います」

智絵里はにっこりと笑った。

「完全に忘れられなくても、駿輔さんは乗り越えられてると思います。私は言葉足らずだから……伝わらないかもですけど……」

「いえ……大丈夫です。緒方さん、ここからはプロデューサーとアイドルではなく、個人として聴いてもらえませんか」

「は、はい。私は気づいたらそっちで呼んでましたけど……分かりました」

お互い、ソファに座り直した。語り始めた言葉は敬語ではない砕けたもの。

「昔……それこそ、美穂や茜を担当してた時は今みたいに普通に接してた。それは知ってるよな」

「はい。でも、」

「ある時……彼女達が辞めてからは、アイドルと距離を置くようになった」

「なんでですか？」

「なんでだろうな……どれだけ熱意があつてもダメな時はダメ。そして傷つくのはアイドルと自分だけ。それなら、事務的になれば必要以上には傷つくことはない。そう、考えたのかもしれない」

駿輔はそう言いながら、遠い目をした。

「でも……駿輔、さんは、色々表情を見せてくれるようになりました。最初は怖かったですけど、私がアーニヤちゃんやかな子ちゃんとケーキを食べた時に笑顔を見せてくれたり」

「それは間違いなくみんなのおかげだよ」

「私たちのおかげ……ですか？」

「ああ」

そう答えた彼の目は輝いていた。

「確かに色々なことがあった。でも、それと一緒に俺も何か大事な物を取り戻していった気がする。敬語は慣れすぎてなかなか抜けられないけどな」

「そうですか？　でも、私とは砕けた口調で話してくれますよね？」

「ん〜……前にも言ったけど、智絵里って遼哉と同じ雰囲気なんだよ。いや、一番安心出来るのは智絵里かもしれない」

「そうなんですか？　それなら、嬉しいですね」

駿輔は智絵里のその本当に嬉しそうな笑顔に少しドキツとしてしまった。

アイドルの笑顔を大切に作るプロデューサーを心掛けてきた駿輔だが、智絵里のその笑顔は今まで見たことの無いものだった。今日だけで智絵里の様々な一面を目にした駿輔。彼の中で、緒方智絵里という女性の認識が変わっていった。

しかしそれは、彼だけに限った話ではない。駿輔が智絵里の新しい一面を見たように、智絵里も駿輔の新しい一面を見ているのだ。

(今日のプロデューサーさん、なんだかすごく可愛い。思わず、駿輔さんなんて呼んじゃった……恥ずかしい)

智絵里にとってのプロデューサーという人は、最初こそ見た目のインパクトで怖がっていたが、時間が経つにつれてとても頼れる大人の人というイメージだった。

しかし、本来のプロデューサー……武内駿輔という人はとても弱く繊細な人物だ。

「なんだか私たちって、似たもの同士ですね」

「ははっ、確かにな」

智絵里はそこに親近感を覚えた。そして、今まで無かった感情も芽生え始めていた。

2人きりの時間。休日に出会った時、今こうしてみんなを待つ合間の会話。このたったの2回。時間を合わせても、レッスン1回分にな

るかならないかの短い時間。この短い時間で、2人の関係は自分でも気付かないほどに変化していた。

「私たち、前より仲良く、なれた気がしますね」

「そうだな」

笑い合う。そこからは、名前で呼ぶきっかけにもなったゲームの話をしたり、アイドルたちの面白い話を聴いたりしていた。

ガチャリとプロジェクトルームの扉を開く音が聞こえた。

「今日はここまでだな」

「そうですね。またお話ししましょうね、駿輔さん」

「ああ」

「おはようございます!」

「おはよう、プロデューサー」

「おっはよー、ちえりん!」

「みんな、おはようございます」

「おはようございます」

「ん?」

「あれ?」

揃って返事を返した2人に、凜と卯月が何か違和感を感じる。

「2人で座ってるけど、どうしたの?」

「私とsy……プロデューサーさんしかいなかったの、色々とお話してたんです」

「そうなんですか?」

「はい。近況などを教えていただきました」

「ふーん。そっか」

何か違和感を感じるものの、それに2人は気づかなかった。

「他のみなさんももうすぐ来られるでしょうか」

「うん、そうだと思うよ。らんらんからも連絡あったし」

「そうですね。それでは、資料などを用意してきます。緒方さん、ありがとうございます」

「いえ、私こそ……」

プロジェクトルームにあるプロデューサーの部屋に入る際に駿輔と智絵里はアイコンタクトを交わしていた。

「また今度」

それに気づいたのは、未央だけで他の2人は違和感の正体に首を捻っていた。

「ねね、ちえりん。本当は何話してたの？」

「えっ？ 近況……今回のイベントのこととかかな。特別なことは何も無いよ？」

「……そっか」

「うん」

それだけ訊くと、未央は智絵里から離れた。その後にはホッとため息をついた智絵里を横目で見ながら未央は確信していた。

(怪しい……絶対に何かあったはず……)

少しだけ核心に近づいていた。